僕は無実だァっ！！！

ラトソル

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

勘違いを証明するために奔走する勘違いオリ主の話。

ちゃんと書かないと非公開にされるんだなぁ……（Ｔ―Ｔ）

ｐｉｘｉｖでも投稿しております!!

目　次

犯罪者予備軍じゃねぇ!! ―― 1
ブルーノ、お前…… ―― 11
なんでサッカーしてんの? ―― 20
ネッシー?ああ、良い奴だったよ。 ―― 33
お前がピカチュウに勝てるわけないだろ世界のピカ様舐めんじゃねえぞお前とじゃあ生物としての格が違うんだよ比べることすら烏滸がましいぐらいの差があるんだよ身の程を知れよクソが龍とノミ位の差あるんだよ分かっ ―― 41
早く逃げるぞっ!!! ―― 54
ゾワゾワッッッッッ ―― 65
癖が多い友達ってキャラ濃いよね ―― 79
人間不信なりそう ―― 89
【傑物】は魅せ、【天才】は産声をあげる ―― 102
【至宝の弟】は喰らいつき、【申し子】はピースをかき集め、【狩人】は時を待つ ―― 117
【至宝】の一撃、【悪魔】の胎動 ―― 129
【悪魔】の躍動、【傑物】の裁き ―― 140
そんな終わりは認めねぇ!! ―― 155
土下座……『土の上に直に坐り、平伏して礼(お辞儀)を行うこと。日本の礼式のひとつで、姿勢は座礼の最敬礼に類似する』

犯罪者予備軍じゃねぇ!!

ソレを見つけたのは、偶然だった。
日本サッカーが糞だと感じたのは何時だっただろうか。俺、絵心甚八は日本サッカーに絶望し、才能の原石を腐らせていく環境に憤怒した。
だから、俺が作る。
日本に最強の1を創りあげることの出来る最高の環境を。それが、ブルーロック・プロジェクト。未来のある３００人の高校生ＦＷを集め、２９９人を犠牲にして究極のＦＷを創る。
人選は俺自ら行った。アンリちゃん達にも探させたが、最終判断は俺。既に３００人の才能の原石共をピックアップし終え、あとはプロジェクトを予定通り進めるだけだ。
あの日の衝撃は忘れない。
仕事が一段落着いて、気分転換にでもと辺りを歩いていた時だ。
人通りの少ない少し田舎だった。空気が美味いやらのどかだやらは俺には興味なんてない。
飽きたな、と感じ、そろそろ戻るかと思ったその時、音が聞こえてきた。
耳を澄まさなくても分かる程に聞き慣れた音は、ボールを蹴る音。そして、そのボールが何かに当たるような甲高い音だった。
普段の俺ならさほど興味も湧かないようなものだ。壁当てをしているヤツらなんぞごまんといる。しかしその時は自分でも不思議なくらい、足が自然とそちらに向かっていた。
近づくにつれ大きくなっていく音は先程から不自然な程に等間隔だ。中々やるな、と思い……そして、見つけた。
俺は、身体の芯から震え上がった。
そこは公園だった。滑り台と鉄棒が少しある程度の小さな空間だったが、そこにいたヤツの存在感に震え上がる。
壁に蹴り続けていたのだと思っていた。だが、実際は違った。
アイツは、鉄棒に当て続けていたんだ。それも、見る限り２０ｍは

離れた地点から。
狙って当てることは……まあ、簡単ではないだろうが、トッププレイヤーならば数回で当てられるだろう。それを奴は当て続け、そしてその全てが足元に帰ってきている。
ブレない最高のシュートフォーム、そして右脚から放たれるボールは美しい回転がかかり鉄棒に吸い込まれるように弧を描いて着弾する。命中したボールはワンバウンドしてから主人の元へと舞い戻り、そしてその工程が繰り返されていく。
圧巻だ。奴は涼しい顔をしてやり遂げている。つまりこの程度奴にとっては遊びでしかないんだ。
なんだアレは。
誰だ。
何処のチームだ。
俺はアレを見落としていたのか？
俺が選んだ原石共の中に奴は入っていなかったはずだ。
いや、アレは原石じゃあない。
アレは。アレこそは。
奴が、俺が思い描いていた理想のエゴイストだ、と。
興奮が隠せない。口角が自然と上がる。
欲しい、欲しい、欲しい!!!
こんな場所に置いておく人材じゃあない!!
調べなくては!!　奴は何者なんだ!!
あんな逸材、話題になっていないはずもない!!
ということは、やはり環境が悪いのか？
試合にも出られない環境が、奴を阻害しているのか？
そうだとしたら、奴は窮屈だろう。
数分、数十分と俺の足は動かない。ようやく我に返ったのは、奴が飛んできたボールを足に吸いつかせるような絶妙なトラップを見せた時だった。
シュート技術だけでは無いことに更なる歓喜を覚えた俺の瞳に映ったやつの姿は、”諦め”だった。

おもむろに俯いた奴はつくづく思っていたのだろう。
【対等な敵が欲しい】、と。
だからアイツはこんなところで鉄棒へと蹴り続けているんだと当たりをつける。実際にそれは正しいんだと思った。
一目で分かった。奴は『天才』だ。そして、他人との違いを明確に理解しているんだろう。それ故の、『諦観』。
まずい、と思った。
このままではヤツという才能の塊が消えてしまう。後から調べあげてプロジェクトに組み込むにしては奴に伝わるまでが遅すぎる。その間に奴がサッカーに失望しないとは限らない。
俺は速く、しかし悠々とした姿を崩さないようにヤツへと近づいていく。
俺の足音に気づいたのだろう。奴は近づく俺を鋭い眼差しで見据える。警戒されているな。
「落ち着け、怪しい者じゃない。俺は絵心甚八。腐った日本（サッカー）に革命を起こす者だ」
言葉選びを間違えたらこいつは消える。そんな予感が俺の心を駆り立てる。俺の言葉にやはり奴はさらに目を細めた。
「お前の名前は？」
奴は口を堅く閉ざしたまま。それもそうだ。見ず知らずの、それも絶望しかけていたサッカー関連の話を持ち込んできた俺に不信感を覚えないわけがない。
だから俺は、奴の目を見据えながら口にした。
「お前の探し物を、見つけてやる」
「――――」
俺の言葉に、奴の目が見開かれる。やはり俺の予想は当たっていたようだ。思わず口が歪むが、一瞬で元の形に戻す。
「……見つかったところで、意味なんかないっすよ」
初めて口を開いた奴の声は澄んでいた。しかし何処か暗い印象を抱いてしまうその声に、期待と失望が半々で混ざっていることに気付く。

『俺に匹敵する奴なんて居ない』とこいつは確信しているんだろう。
変な期待などさせるな、と奴は怒っている。
ああ、こいつだ。
こいつこそ、俺が求めるエゴイストだ。
「安心しろ。初めは退屈かもしれんが、すぐに満足させてやる」
俺の言葉に、期待の色が奴の瞳に灯る。まだ警戒心が解けないが、今はこれでいいだろう。
名前は聞けなかったが、また調べればいい。俺は満足気な気分のままに自室へと戻った。
そして、先程の近辺の高校を調べあげた。
調べるのは弱小校だ。強豪に居てやつの名を聞かないはずがない。
時間はかかったが、見つかった。
水野悠。
ギリギリ11人のサッカー部に所属していた。
こんな腐った環境に居てはダメだと焦燥感に駆られてしまった。
次に、奴の試合動画を漁った。
弱小の試合なんて残っていることなどないと半分諦めてはいたものの、奇跡的に一本だけ見つかった。
弱小故に、逆シード。
奴らの地区で一番の強豪との試合だった。
俺はその試合に釘付けになった。
いや、試合に、ではなく、水野に、だ。
敵チームのパスをカットした途端、爆発的に加速する脚。敵が束になっている難しいルートを切り裂くドリブルセンスと発想。そして離れた距離からでも正確なゴールへと放たれるシュート精度。
全てが完璧だった。そして、気付く。
あれらは凡人からすれば、奇跡だと口にするものだ。しかし、違う。俺には分かる。
あれは、再現性のあるものだ、と。
偶然見つけた才能、その価値に手が震えてしまう。そして奴を見つけた過去の自分を手を叩いて賞賛する。

奴がワールドカップでコートを駆け回る姿を想像するだけで口角が上がる。
そして、水野悠という『才能』をブルーロックに解き放った時、才能の原石共はどんな反応を見せてくれるのか。
ああ、楽しみだ。

才能の原石共３００人、そして水野悠を加えた計３０１名のストライカーに招待状を送り、その全員が集まった。水野に関しては来るかどうか不安だったが、後方にその姿を確認できて内心安堵する。
「やあやあ、才能の原石共よ」
マイクをＯＮにし、演説を行う。俺の視線は周りにいる原石共を見渡しているようで、しかし常に水野の姿を映していた。
奴は俺の計画にどう反応するのか。期待か？　失望か？　諦観か？　興奮か？　憤怒か？
今の奴は興味のなさそうな表情を浮かべている。眠たそうなやつの顔は期待なんてしていないように見えた。
焦る。なんとか奴の興味を引かなくては、世界級の才能を壊してしまう。
「――これがそのための施設……〝青い監獄〟、通称ブルーロックだ」
ようやくプロジェクトの概要に入ろうというところで、水野の目が見開かれ、画面へと食いついた。
よし、と俺は歓喜し、思わず拳を握る。
それからプロジェクトについて説明するところで、馬鹿が割り込んでくる。
全国大会？　チーム？　やっぱ重症だな、こいつら。
見ろ。水野も心底どうでもいい顔をしている。むしろお前の発言が気に触ったようだ。
俺は奴らの考えを否定する。会場が恐ろしい程に静まり返るが、そんなことは気にしない。
演説を終え、飛び出した一人のエゴイストを皮切りに３００人のストライカーは俺の後ろに開かれた扉をくぐった。

残っているのは一人だけ。それが有象無象ならさっさと帰れと言うところだが、今回は別だ。
「不安か？　水野悠」
マイクを通さず、直接奴に語りかける。水野の表情には不安が見えた。
それもそうだろう。チームやら全国大会やらとほざいていた奴らのせいで水野は今思っているのだ。
『こいつらが俺の相手になるのか』と。
そのままではダメだ。俺がその不安を解消しなければ。
「お前の探し物は見つかる。絶対だ。俺が保証しよう」
「……見つかんねぇっすよ」
小さく零した奴の諦めた声を俺は聞き逃さなかった。奴はゆっくりと俺の横を通り過ぎ、扉へと向かう。
「なら、お前は何をしに扉をくぐる？」
「――俺が俺であると、証明するために」
ああ、やっぱりお前は最高だ、水野悠。
そして、才能の原石共よ。
俺を……水野悠を失望させるなよ。

公園で遊んでたらコンタクト落とした。
いやまじかぁ。コンタクト落とすとか初めてなんだけど。試合中もズレたことも無いけどなー。
俺は裸眼になったら視力の差になれないんだよなぁ、普通にぼやける。うわぁ、この視界の中探すのきちぃ。まだ1週間使ってねぇよ。ママ上に怒られるっての。
サッカーボールをひとまず置いて、コンタクトを探そうとしたら足音が聞こえてきた。
知り合いかな？　と思ったけどマジで見えない。もっと近づけや。目を細めてやっと見えたのはおカッパ頭にやべぇ目。
あ、こいつヤバいやつだ。

「落ち着け、怪しい者じゃない。俺は絵心甚八。腐った日本（サッカー）に革命を起こす者だ」
あ、こいつヤバいやつだ。（二回目）
革命家ってやつか？　そんなやつマジで存在するのかよ。ワンピくらいだろそんなの。
顔がぼんやりと見えないからはっきりとは分からないが、こいつ目がいってやがる。
「お前の名前は？」
教える訳ねぇだろ馬鹿が。常識的に考えろや。今のところ俺の中でお前はやべぇ奴かマジでやべぇ奴の二択なんだよ。
「お前の探し物を、見つけてやる」
え？　コンタクト探してくれんの？　めっちゃ良い奴やんコイツ今まで疑ってごめん。
いや、待て。冷静に考えてみろ。仮にコイツがマジのマジでただの優しいやつだったとして、だ。
コンタクト砂だらけじゃね？
うわ、気づきたくないことに気づいちまった。
何ついてんのかわかんねぇよそんなの。そんな怖いの目に入れたくねぇわ。うん、諦めよっと。
「……見つかったところで、意味なんかないっすよ」
なんか申し訳ないけど、見つかってもコンタクト捨てるだけだしな、うん。
「安心しろ。初めは退屈かもしれんが、すぐに満足させてやる」
え？　いやいや、探す速さとかじゃなくて、もういいんだって。見つかっても汚ぇコンタクトに満足しないし。
いや～、でもそこまで言われたら断れきれんな。とりあえず探してもらって、見つかったらお礼でもいってしれっと捨てるか。うん、そうしよう。じゃ、お願いします～。
と思ったら、自称優男は振り返ってどっかに行った。
あ、そういう感じの嫌がらせっすか。
性格悪っ!!!

コンタクトの件はママ上にはあまり怒られなかった。しかしその後に問題が出てきた。
なんか、『強化指定選手』ってのに選ばれたらしい。なんこれ？
いやいや、なんで俺？　そりゃ俺のサッカー部の中じゃ俺は一番かもだけど、全国いったらもっとすごいヤツらいっぱいいるでしょ。動画見ないから知らんけど。
詐欺かな、と思って無視しようとしたけど、チームメイトからは「絶対行った方がいい!!」「ついにお前を見つけてくれる人がいたんだ!!」とか大騒ぎ。なんか満場一致で俺が行くことになってたので、まあ行くだけ行くかぁ、と思い説明だけ聞きに行くことにした。
会場にはめっちゃ人がいた。モヒカンやらもじゃもじゃやら目隠れやら下まつげやらロン毛にムキムキなどオンパレード。会場間違えたかな？　何人か人殺してそうな顔してっけど。
そう思ってたら突然会場が暗転。誰かがステージ上に立っていた。ああ説明始まる、と思ったところで突然の睡魔が襲ってくる。
そういや昨日スペインの友達と電話してて寝れてねぇわ。説明始まったけど、まあ後でパンフ貰えるだろうしそれだけでいいや。
半目になりながら説明は言葉とならずに耳を通り過ぎていく。ただ、ふとした瞬間に眠気が一瞬だけ消えた。ああでも眠いかも……
「これがそのための施設、青い監獄」
……ん？
今あいつなんて言った？
”監獄”？
……
ふぁっ!?
眠気は四散した。
いやいやいや何言ってんの!?　監獄!?　へ!?　俺捕まったの!?
なんもしてないっての!?
どうなってんだ……ん？　アイツどっかで見たことあるな……
自称革命家やんけ!!!!

あ、アイツ……!!　そういや腐った日本とか言ってたな!!
じゃあなんだ!?　犯罪者予備軍一斉投獄ってか!?　俺なんもしてねぇわ!!　強いて言えばこの前コンタクト落としたくらいだわっ!!
そういえば、さっき殺人者みたいなやつとか目が逝ってる奴とか狂ってるやついたな。
俺、手違いで入れられたのでは……?
おいっ！　出せ!!　今すぐ!!
なんで俺が犯罪者予備軍と一緒にされなきゃ行けないんだよ!!
善行の塊だろうがっ!!
俺犯罪なんてやったこと……やったこと……え、ないよな?
なんか自信なくなってきた。え、やってないよね!?　姉ちゃんのプリン盗み食いって犯罪にはいる!?
いや、昔スペインにいた時に友達の顔面にシュート決めたな……
……
ソレだ!!!
暴行罪か!?　やっべぇ、俺犯罪してるわっ!!
いや、落ち着け。時効だろコレ。しかも友達許してくれたし。
「やっぱお前は俺のパスを受け取るべき選手だ」とか厨二病発言してたのには引いたけどそれくらいだっ！
「不安か?　水野悠」
ハッと我に返り周りを見るとそこには俺と諸悪の根源しかいなかった。え!?　みんな逃げたか!?　いや、既に投獄されちまったのか!?
ってか、「不安か?」ってなんだよ!!　不安に決まってんだろ煽ってんのか!?　身に覚えのない罪で胸が張り裂けそうだわっ!!
「お前の探し物は見つかる。絶対だ。俺が保証しよう」
「……見つかんねぇっすよ」
コンタクトはもう新しくしたっての!!　お前そういえば探すって言いながらすぐに帰りやがって……こいつ、俺で遊んでやがるな!!
なんか笑ってるし、キモっっ!!

あと目が逝ってんだよ!!　何徹してんだてめぇ!!
あ～、あったまきた。そっちがその気なら俺も抵抗してやるよ。
なんか扉空いてっけど、あっちが監獄か？　いいぜ行ってやるよ。
「なら、お前は何をしに扉をくぐる？」
は？　決まってんだろ。
「――俺が俺であると、証明するために」
俺はっっ!!　無実を証明するっ!!!

ブルーノ、お前……

無実の罪で犯罪者予備軍集団に仲間入りさせられた俺は、無実を証明するべく扉をくぐった。てか、扉でっかっ！　門じゃん。

その先には5台のバスが並べられており、うち1台は出発しようとしていた。

さて、俺はどのバスで連行されるのかと思っていたら陰の方から一人の女性がこちらに近づいてくる。

なんか色々言っていたが、俺はその女性――アンリさんというらしい――のビッグサンダーマウンテンに意識が集中しており、全く内容が入っていなかった。多分相槌も「ああ」とか「おー」とかしか言っていなかった気がする。

「着きました」というアンリさんからの声でようやく意識を取り戻した俺は彼女に案内されるまま、なんかでかい建物に入れられた。

そこで俺はハッとする。なるほど、ここが監獄か、と。

アンリさん先導のもと、監獄内の設備、トイレや食堂、あとは俺の部屋に案内してくれた。なんかめっちゃ丁寧だった。

ていうか、俺の部屋が一人部屋だったことに驚いた。こういうのって狭い部屋に大人数で雑魚寝とかさせるんじゃねぇの？　一人部屋だとしてももっとこじんまりした硬い布団とも呼べない布切れしかない部屋じゃねぇの？　知らんけど。それに比べ、俺の部屋はめっちゃ広い。実家の部屋より広かった。

疑問が絶えないままに、着替えを渡された俺は言われるがままに着替える。なんかピッチピチの服だった。なんだこれ？　なんで俺のサイズピッタリなんだよ。てか隙間すらないしデザインダッサッ。

なんかワンポイントみたいな感じで左肩に【００１】という数字が書かれていた。なんだこれ？　と思っていたら突然壁にカッパが映し出された。

「やぁやぁ、水野悠」

カッパじゃなくて自称革命家だった。相変わらず目がイってやがる。

諸悪の根源であるヤツの顔に思わず目を細めてしまったが「まあそう焦るな」とよく分からないことを言い出した。焦るに決まってんだろうが、煽ってんのか。俺は無実なんだよっ！

「お前には予定されていた一次選考を免除とする」

何言ってんだこいつ？

「他の才能の原石共の一次選考が終わるまでの間、実装予定のブルーロックマンの調整に付き合ってもらう」

何言ってんだこいつ？

終始意味のわからないことを言っていたものの、ブルーなんちゃらの調整というのが俺に課せられた労働、ということなのだろう。

俺、機械とかあんま得意じゃないんだけどな。ミスったらペナルティとかあったらクソだりぃ。

画面が消えるのと同時に後ろの自動ドアが開く。そこにいたアンリさんに連れられ、広い空間に一人入れられた。

こんなとこで作業するのか？　と思っていたら、突然現れたサッカーゴールとゴールキーパー。え、いつから居たのお前？　という疑問が生じた途端に壁からボールが飛び出してくる。なんかよく分からんが、反射的にそのボールをトラップし、直接ゴールへとシュートする。

するとゴールの上に『残り　９９ＧＯＡＬ　　２９分５３秒』という文字。おい、説明しろよ。なんだこれ？

よく分からないがまたボールが飛んできたので先程同様にゴールを決めると『９８』へと数字が減っていた。つまり、３０分以内に１００ゴール決めろ、ってことか？

なんで急にサッカー？

いや、え？　どっからサッカーに繋がった？　ここ監獄だろ？　監獄サッカーチームでも作るのか？　全く分からん。

これと労働がなんの関係があるのか全く分からないが、３０分で１００ゴールか。

楽勝だろ。

蜂楽のサポートもあり、ブルーロックの入監テストに合格した俺達は３日間の体力テストを終えた。
俺のランキングは変動し、２７４位。つまりブルーロックには俺の上に２７３人ものストライカーがいる。
部屋に集められた俺達に絵心はブルーロックのシステムについて説明していく。
ブルーロックは五つの棟で構成されており、Ｂ～Ｚのチームに分けられる。俺達は五号棟のチームＺ、つまり最底辺のチームであること。
自分が底辺であると言われたことに雷市は声を荒らげていたが、それは当然として、俺は困惑していた。
体力テストを通して、俺はチームの身体能力をある程度把握していたが、優秀なこいつらが最底辺であることが信じられなかった。
なら、他の棟にはどんな化け物がいるんだ、と想像もつかない強敵に武者震いしているところで、絵心はある動画を見せてきた。
「見ろ。これが現ブルーロックランキング一位……水野　悠だ」
そこは、全国大会が行われるようなコートではなかった。設備の整った高校のコートで行われる予選だろう。
動画はとある選手がパスを受け取ったところから始まった。センターラインから駆け出したその男が見せた……いや、魅せたプレーは衝撃的すぎた。
足下を一切見ず、ボールが足に吸い付いているようにさえ見える、敵を寄せ付けないドリブルセンスで、一人で中央突破を成し遂げる。
よく見れば、相手選手に知った顔がいる。雑誌にも取り上げられている有名な選手だ。彼が所属している高校は、全国経験も多数あった

はず。つまり相手は全国にも届く強豪校。それをたった一人で相手取り、完封している。
３人に囲まれたとしても、彼の足は止まらない。流れるような動きで隙を潜り抜け、ゴールへとボールを捩じ込む。
そこからの映像は彼の……水野悠のダイジェスト。
彼のドリブル、パス、シュート、トラップ。その全てが詰まったその映像に、俺、いや俺達は水野の力に魅せられ、そして格の違いを理解させられた。
嗚呼、これなら俺の順位にも納得がいく。そう思ってしまうほどに、水野は強かった。
映像だけでこれ程なのだ。実際に見てしまえば、俺はどう感じてしまうのだろう。互いの格の差に絶望するのか？
否。
俺は震えていた。それは恐怖か？
否。
俺は水野に魅せられた。あの圧倒的なまでに、暴力的とも言える強さに釘付けになった。
そして。
（あいつを、倒したい……!!!）
あいつを超えた先には、何が見えるのか。何があるのだろうか。
俺は、一人のストライカーとして。
一人の最強ストライカーを打ち倒すと、そう心に刻んだ。

水野選手を特別枠としてブルーロックに招集するという話を絵心さんから聞いた時、私は疑問に思っていた。
水野悠。

有名な選手の名前は大方頭に入っているが、そんな選手は聞いたこともない。絵心さんによれば、地方の弱小校の選手だと言う。
既にブルーロックには３００名の才能に溢れた高校生ＦＷが決まっている。当初の予定を崩してまで招集するような選手なのかは腑に落ちなかった。
それでも、例外というものは存在する。
現に私がノーマークだった凪　誠士郎、御影玲王というブルーロックでもトップクラスとなるであろう選手を見つけたのも偶然だった。
絵心さんからは「実際に見たら分かる」と言われた。試合映像ではなく、生で見た方がいいとの事だった。だから私は彼の過去の映像を見ることなく、水野君を彼専用に整備された特別棟へと案内した。
第一印象は、爽やかな好青年だった。
目鼻立ちも整っていて、身長も１８０ほどだろうか。実際に車内で話してみたが、相槌もしっかりしていて好印象を抱いた。
私たちが求めるストライカーは究極のエゴイスト。己のゴールを追求することに全てを注ぐ、そんな存在。彼からは、そんな片鱗を感じなかった。
今まで数多くの選手を見てきた。高圧的な選手、笑顔を振りまく選手、様々な選手がいたが、彼らには共通して、ストライカー独特のオーラというものを感じた。
しかし、彼からはそういったものを全く感じない。
絵心によれば、彼の一次選考をパスすると言う。予定外の３０１人目とはいえ、それはあまりにも特別待遇なのではないかと一度抗議した。
が、そんな私の抗議に絵心さんは、ただ一言。
「奴は、既に宝石だ」と。
今なら、その言葉の意味がわかる。いや、分からされた。
目の前で行われている、圧倒的なまでの技術に。
二次選考で実用予定のブルーロックマンの試運転という名目で行われたテストは、着々と進んでいた。
不自然な程に、すんなりと。

ブルーロックマンは段階的に難易度が変化する。
Ｌｖ１はキーパーのみ。それでも、ブルーロックマンは各国のＧＫのデータを元に作られているため、生半可なシュートは防がれる。
それを、彼は一度も外すことなく決めた。
Ｌｖ２。ＤＦが追加され、パスの難易度も跳ね上がる。
汗ひとつ垂らすことなく、全てを決めた。
そしてＬｖＭＡＸ。ＤＦが不規則に動き、妨害してくる。パスには乱回転がかかり、スピードも跳ね上がる。ここからが本番だと言うような、デタラメな難易度。
全て、完璧に決めた。
圧巻の一言。いや、そんな言葉ですら表せないような高揚感。私は今、何を見せられているのだろうか。設定を誤ったのか？　違う。あれは自分でも引くくらいにはデタラメな難易度設定だ。実装前だからという理由で、ＬｖＭＡＸの難易度は予定よりも高めに設定してある。それにも関わらず、彼は全て決めて見せた。
Ｌｖ１、いやブルーロックマンのテストが始まった時、彼の表情は明らかに歪んでいた。離れた位置からでも分かる。怒りだ。
こんな低レベルなものに俺は付き合わされているのか、そんな感情が窺えた。それはＬｖ２になっても変わらなかった。
ＬｖＭＡＸでは怒りの感情は消えていた。彼の中では及第点だったのだろう。それでも、歓喜とは程遠い。彼にとっては大した差は無かったのだろう。
そんな彼とは打って変わって、私は歓喜していた。彼だ。彼こそが私達が求めていた存在なのだと。絵心さんの言っていたように、彼は恐ろしいまでに「宝石」だった。
「アンリちゃん、気付いた？」
「はい？」
不意に、隣にいる絵心さんが私に問いを投げかけてきた。気付いた、とはどういうことなのだろうか。彼の技術には驚愕した。ブルーロック内では彼は頭一つどころか、数個抜けているだろう。
だが、絵心さんの質問はよく分からなかった。いったい何について

聞いているのだろうか。
口ごもる私を見て絵心さんは先程まで行っていたテストの映像を巻き戻す。そこに映っていたのはＬｖＭＡＸのパスをトラップしている時の映像。いくつかのパターンの映像を見せられる。シュート精度もさることながら、トラップ技術も一級品だ。目を輝かせながら映像を注視していると、不意にあるところに気がついた。
「……ボールを、見てない？」
私の言葉に、絵心さんは首を縦に振る。
「そう。水野悠はこのテストが始まってから、シュートの時以外、一度もボールを見ていない。パスの場所は毎回違うにもかかわらず、だ」
怪物だよ、と続ける絵心さんを横に、私は歓喜に震え、そして恐怖した。
視野が広い。そんな言葉では言い表せない。空間認識能力が冠絶している。彼は本当に人間なのだろうか。
そんな人間離れした神業と言ってもいいものを３０分という短い時間の中で１００回をも繰り出した彼から疲労は窺えない。むしろまだ終わりでは無いんだろうとこちらに語りかけてくるようだ。汗ひとつ見せない彼に対して絵心さんは「お疲れ様」という中身のない言葉を告げ、退出させる。
私は己の口角が上がっていることを自覚しないままに、彼の過去の試合映像を漁ることを決め、自室へと戻った。

あのゴールキーパー弱くね？　全部入るんだけど。
上にでっかく【ＢＬＵＥＲＯＣＫＭＡＮ】って書いてるけど、あいつの名前か？　ださっ。
十回くらいゴールを決めたが、既に作業ゲーみたいになってきて飽きてきたな。と思っていたら、ブルーロックマンに目がいった。首と

手首、足首には錠がつけられ、ちぎれた鎖も付いていた。そこで俺はハッとした。なんてことだ。
あいつ、ここで強制労働させられてやがる。しかも、顔まで布で包まれてるから前も見えない状況で、だ。
俺はそんな人権を無視した非道な扱いに怒りが込み上げてきた。可哀想に、つまり奴は視界が塞がれた状態でＧＫという名のサンドバックにさせられているんだ。
なぜ俺が執行人みたいな立場になっているのか知らないが、どうせカッパの娯楽だろう。巫山戯やがって……!!
安心してくれ、名も知らない人……適当にブルーノでいいか。ブルーノ、あなたには絶対ボールは当てないからなっ。早くこんな茶番は終わらせよう。
少し経ってから、Ｌｖ２とかになって、障害物が増えた。だからどっから出てきてんだよ。
まあ対して難易度は変わらん。それよりも非人道的な行いが俺には許せない。
おそらく、今回のようなことはまだ軽い方なのだ。あんなにガチガチに縛られているやつがこの程度の労働で済むはずもない。目隠しキーパーとか意味の分からない労働だが、ここは特別なのだろう。あのカッパの娯楽に付き合わされるブルーノはたとえ囚人であろうとも同情してしま……ん？
ちょっと待て。ここは監獄。俺は無実だとしても、他の連中は犯罪者予備軍。それに、元々収監されていた囚人、つまり犯罪者もいるはず……
あいつ犯罪者じゃね？
しかもあんなに厳重な拘束、半端な犯罪じゃねぇ。
ブルーノお前……連続殺人鬼かっ!!!
なんか障害物が動き始めたが、どうでもいい。さっきまでの怒りと同情を返せ!!　このクソ異常者がっ!!　顔面にシュート決めてやろうか!!
いや、落ち着け。そんなことしたら俺も糞の仲間入り。あいつの奇

行による被害者に変わって俺が裁きの鉄槌を下したいが、必死に抑え、この茶番を終わらせよう。

１００ゴール決めた瞬間、ブルーノを含めた障害物どもは一瞬で姿を消した。逃げやがったなあいつっ!!

なんでサッカーしてんの？

「――――二次選考（セレクション）一人目が入場した。始めるぞ」

一般的なサッカーコートに比べて二回り以上小さな空間。

四方を白い壁に囲まれ、目の前にはホログラムで立体的に移されているゴールとブルーロックマン。

コートの中央には、一人の男が悠然と佇んでいる。

緊張も、何もかもを感じさせない佇まいを見せるその男に、抑揚のない声で始まりを告げた絵心は、モニタールームで様子を伺いながらニヤリと笑っていた。

ホイッスルの音などはなく、唐突に真横から飛んできたボールはピッチに立つ男、水野のやや前辺りに着弾する。

速くも遅くもない、一般的なパスと呼べるそのボールが地面へと接し、反発して少し浮いた所を、水野はボールを一切見ることなく蹴り放つ。

強い逆回転がかけられたそのボールは地面スレスレを浮かび上がっていくようにゴールの左下の隅へと吸い込まれて行った。それを阻止しようと動き出したブルーロックマンがその場へとたどり着いたのは、ボールがネットを揺らした後だった。

【残り　１９９ＧＯＡＬ】

ゴールの真上に表示された数字。もう何度目かも分からないほど見てきたその文字を見て、水野は間髪入れずに飛び出してくるボールをゴールへと放ちながら、静かに嘆息した。

（飽きた）

一????

一次選考を終えた俺たちチームＺだが、絵心から二次選考が始まるまでのトレーニングを言い渡され、地獄のような毎日を続けた。

身体機能強化という名目で俺たちのことを殺しに来ているのでは

ないかと本気で思うほどには身体を虐め抜く内容だった。
そんな長いようで短かった地獄のトレーニングは十日程で突然終わりを告げ、俺達は今二次選考へと足を踏み出した。
正直絵心には殺意しか湧かないが、それよりもようやくサッカーができることに身体が喜びに震えて、試合中ですらないにもかかわらずアドレナリンが大量に分泌されているのが分かる。
そして、未だ見ぬ上の棟のストライカー達を喰らい尽くす。寝不足の目を見開きながら、扉をくぐった。
そこには、見たことの無い選手、つまり上の棟の人間であろうストライカー達がいた。
（チーム……W!?）
『やぁやぁ才能の原石共よ』
「!!?」
遥か上の存在であろう別の棟の奴らは、俺達と同じように疲弊したような様子だった。更には、肩に刻まれたチーム名がV～Zまでしか見当たらない。
他の奴らも俺同様に訝しみながら周りを伺っているところに、会場全体に絵心の声が響き渡る。
前に見た時と変わらない無表情な絵心に喰らいつくようにモニターを見る俺達に、〝青い監獄〟には五号棟しか存在しないことが告げられる。
自分達を騙していた絵心に対し、一部が激昂しモニターに向かって唾を撒き散らしていたが、俺も衝撃こそ受けたが、納得するのは早かった。
凪や玲王、國神に千切、蜂楽は、最底辺の棟にいるような人材じゃない。もしもあいつらの上に２４０人ものストライカーがいるのだとすれば、こんなプロジェクトを打ち立てなくとも世界一のストライカーは生み出せた。
俺達の飢餓（ハングリー）を刺激するためだったと説明した絵心は、『いや、ひとつ訂正しよう』と口にする。
『先程、〝青い監獄〟には五号棟のみ存在する、と説明したが五号棟の

他にもう一つ”特別棟”が存在する。特別棟は本来建設予定ではなかったが、急遽造らせた文字通り《特別》な棟だ。お前達が過ごしてきた五号棟に比べ、最新鋭のトレーニングフィールドなど更に充実した設備が整っている』

突如語り始めたことが、どういうことなのか分からない。一体、絵心は俺たちに何を言いたいんだ。今から、つまり二次選考で使用する場所のことを言っているのか？

（――――いや違う）

忘れていた。絵心のペースに呑まれ、俺は重大なことを忘れていた。

五号棟以外存在しない？

何を言ってるんだ。絵心は最初に俺達に示していた。

頂点を。あの、怪物を。

モニターの中にいる絵心が指を弾く。それと同時に、俺が想定していたのと同じ人物がピッチの中央に佇んでいる映像が映し出された。

『特別棟は、ただ一人――――水野悠のためにつくられた設備だ。奴は既にこの先でお前達を待ち構えている。さあ……』

――――あの怪物を喰らい尽くせ。

◇◇◇◇

なんで急にゴール数増えてんだよ巫山戯んな。いっつも１００だったのに倍にしやがって。

もう何度繰り返したのか分からないブルーノ処刑ゲームは、慣れたもので最初から最後まで作業ゲーと化していた。正直一本目で飽きていたが、労働なんてものは楽しい楽しくないの次元の話では無いからな、多分。

３０分近く経過し、ちょうど身体が温まって来たところで２００ＧＯＡＬが終了した。若干盛り上がってきたところで強制終了させら

れ、不完全燃焼もいい所だが、終わったものは仕方ない。汗は特にかいていないし、いつも通りにストレッチして適当に過ごそうと思い、いつもの扉から出ようとすると、真逆の位置にある扉が開いた。

あれ、なんかいつもと違うな……もしや、ついに脱獄出来るのではっ!?

必要な労働量をこなし終えた、ってことかぁ！　だから今日はいつもより多かったのかよ～、先に言えよォ！

そう思ったら、扉の先の光が外からの太陽光に思えてきた。俺はスキップしてしまいそうになる気持ちを抑え、ルンルン気分で扉をくぐった。

【3人1組でチームを作って先へ進め】

……ん？

ん～～～……。

何言ってんのこいつ？

誰も居ねぇのに作れるわけねぇだろ。

……寝よ。

っ

びっ!!!??

びっくりしたぁ……。ビルから落ちる夢見た……。

全身を震わせて目が覚めると、そこには何人かが集まっていた。いや結構な数だな。しかも俺を離れた場所からチラチラ見てきてる。うわぁ、ビクッ！　ってしたところ見られた？　それとも寝相？　恥ず……。

両手で顔を抑えたい衝動に駆られていた所を、横から肩を軽く叩か

れたことで停止させ、そちらへとまだ少し眠たい目を向けた。
「相手居らんねやったら、僕と組まへん？」
勧誘を受けた。誰この人？
視線を向けた時に少し肩を震わせていたのが見えた。こいつ笑ってたな？　俺がビクッ！　ってなったとこ見てたな？　まあ俺が寝てたせいだけども。
改めて相手の顔を見る。男……男？　男だよね？　男っていう体で話進めるけど、アンリさんしか女性は見てないから男だよね？
目の前の女の子……失礼。男はそれはそれは可愛い顔をしている。お寧様界隈でこねくり回されそうな顔だ。しかも『僕』属性持ってやがる。破壊力高ぇ。
そんなことは置いておいて。
謎の指令【3人1組】を達成するために声をかけてくれたのだろう。なら、断る意味は無い。いい子そうだし、二つ返事で了承しよう。後、名前は名乗っとかないとな。礼儀として。
「よろしく。水野悠だ」
差し出された手を掴んでそう言うと、相手は少し意外そうに目を見開いてこちらを見てきた。なんぞや。
「僕は氷織羊、よろしゅうな。いや、意外やったからつい」
「意外？」
「もっと高圧的に来ると思てたから」
こいつの中で俺はどんなイメージなんだ？　初対面ですが？　目付き悪くないと思うんですが？
というか、俺はお前らと違って犯罪者予備軍じゃな……はっ!?
コ・イ・ツ！　忘れてたがここにいるヤツら俺以外全員犯罪者予備軍じゃねぇか!!　ってことはこいつ……いや名前教えて貰ったのにこいつは失礼か。氷織も犯罪者予備軍……てこと!?
み、見えない……なんて巧妙な。周りにいるヤツら見たいにピリピリしてないのが逆に強者感がある。
いや、しかし罪状はなんだ……？　線は細いしパワー系じゃない。見た目も可愛らしい感じで恐喝とかではなさそう。もしろお姉様方

に愛されるような……はっれ？
マ・マ・活!!　氷織ママ活やってんのか!!
恐らく、氷織は最初はお姉様方に意図せずお金を貢がれていき、回数を重ねる毎に自分からするようになってママ活にハマってしまったのだろう。くっ、これが可愛いの代償かっ！
罪状はわかったものの、根は良さそうなこの子、比較的仲良く出来そうだ。うん、この子と組んだのは正解だったな。
一人内心で頷いていると、氷織から「どないしたん？」と小首を傾げながら心配の声を向けてきた。
魔性属性持ちだと……!?　グハッ、
込み上げてきた血流を喉の奥に押さえ込み、「大丈夫だ」と声をかけ、平静を保つ。この子はあれだな、天然だな。計算されているとは思えない。俺、人を見る目はあると自負しておりますから。
「ほな、あと一人どないする？」
あ、そういえばもう一人必要だったっけ。てかなんのための三人一組なんだ？　デスゲームでも始まるの？　囚人同士で殺し合いさせるとかまじあいつカッパの異常者だな。革命家なんかせずに家できゅうりの浅漬け食べてろよ。
「すみません。僕もチームに入れて頂いてもいいですか？」
少し辺りを見渡していると、右から声がかけられる。まずい、僕属性が被ってやがる。俺だけ『俺』は不味い。キャラ変する？　と思いつつそちらへ顔を向け……激震が走った。
長い髪は黒いマリモのようで、目元を完全に覆っている。視覚機能してる？　と聞いてみたくなるようなヘアスタイルを見て、俺はすぐに閃いた。
こ、こいつは……。
「二子一輝です」
天才ハッカーきちゃあああぁぁぁぁ!!!
「どないしたん水野くん!?」

水????
僕が２ｎｄ　ステージに辿り着いたのは中間くらいやった。入るのが遅かったのもあると思うけど、二桁番台やったからおるわけないと思ってたけど、彼は一人座ってた。
肩には【００１】の文字。やっぱり、絵心さんが青い監獄の頂点と言ってただけの事はある。けど、なんでまだこんなとこに残ってるんか。それは、すぐにわかった。
水野くんは寝てた。多分、早く終わりすぎて暇やったんやと思う。それもあって、自分から声をかけてない。周りにおる人間は、水野くんの【００１】にビビって声かけようとしても実際に行くやつはおらん。そんな感じやった。
（ほんなら、僕が貰うで）
誰も彼に近づかんから、僕は一直線に彼の元へ向かった。でも、寝てる彼を起こすのはちょっと忍びないな、と思っていたら、ピクっ、と身体を震わせて目を少し開いた。
起きた。ほんなら遠慮は要らんなと、周りからの視線を無視して彼の肩を叩く。
こちらをゆっくりと振り向いた彼の目は、少し細められていて、品定めするような目を向けてきた。
威圧的に見えたその表情に、少し身震いしながらも臆せず勧誘する。
意外やったのが、普通に挨拶をしてくれたこと。
ここにおる連中は、上手いやつに限って癖の強い奴が多い。しかも上から目線で高圧的なやつばっかやから、彼もその枠組みに入ってると思ってた。
実際の水野くんは、顔の印象通りの好青年、て感じやった。同い年やったこともあって普通に話せたし、同じチームになった二子くんも年下やったけど気まずい空気にはならんかった。
三人で先に進んで、割り振られた部屋に向かって最初に自己紹介や

ら得意なことやらを話し合った。
サッカー以外の話もして、水野くんの趣味がゲームやったこともあって僕と話が弾んだ。二子くんとも趣味があっていて、三人でめちゃめちゃ盛り上がった。何故か、二子くんにＰＣ関連のことを興奮気味に重点的に聞いていて、二子くんは若干引いてたけど、問題はなかった。
密かに、僕はこのチームを【オタク同盟】と命名してた。
そっから、結構な時間喋って、ようやくサッカーの話題に入った。とりあえず、各々の特技やらプレイスタイルやらを話していくことにした。
「じゃあ、水野くん」
「その前に、いいか？」
僕と二子くんが話終え、あとは水野くんだけとなったところで、今まで聞き手に徹していた水野くんが軽く右手を挙げて僕らの様子を伺って来た。なんかわからんところでもあったんか？
「どうしました？」
二子くんがそう投げかけると、水野くんは軽く腕を組む。
「ずっと思ってたんだけど……なんでサッカーしてんの？　俺ら」
「え？」
「え？」
突然彼が意味のわからないことを言い出し、僕と二子くんの呆けた声が被り、水野くんも僕らのリアクションに戸惑っている。
なんとも言えない空気が流れ、数秒膠着し、二子くんが言葉を絞り出す。
「えっと……それはどういう……？」
「だって、ここ監獄だろ？」
「……ん？」
「囚人にサッカーやらして何がしたいのあの河童。見世物にでもしてんの？」
「んんん??」
ますます意味がわからなくなってきたが、水野くんは至って真剣に

疑問を投げかけてきた。それに対して、僕は二子くんに顔を合わせる。目線だけで会話をした。
『氷織くん。これは……』
『とりあえず、僕に任せとき。なんやおもろい空気になってきたで』
『お願いします』
そこからは、二子くんには聞き手になってもらい、僕が水野くんに色々と質問をしていった。怪しまれないように言葉を選んで尋ねていくと、おもろいことがわかった。
この子、勘違いしとる。それも盛大に。しかも周りにバレてない。
聞けば、『犯罪者予備軍』、『自称革命家の河童』などと聞き覚えのない言葉がつらつら。『自称革命家の河童』辺りで二子くんは吹き出してた。
ようやくすると、ここは『監獄』で、僕らは『犯罪者予備軍』として収監された。水野くんは身に覚えが全くないから、無実を証明するために動いているが、やらされる労働がサッカーばかりで疑問が絶えない、と。
それを聞いて、僕と二子くんの心は一致した。
おもろっっっ。
もう一度、二子くんと視線を合わせる。
『これは僕らだけの秘密にしよ』
『ですね。あと、彼にはこのままで』
『当たり前やろ、こんなおもろい話逃されへんで』
そこからは、上手い具合に話を肯定し、他の人にはそう言う話をしてはいけないことを伝えた。理由は適当に、僕ら以外は攻撃的なやつが多いからとかいうよく分からん理由にしたが、水野くんは納得してくれた。チョロい。
そして、脱獄を目指そうと、三人で誓い合った（願ってるのは一人だけ）。
なお、参考までに僕らの罪状を聞いたところ、水野くんは僕がママ活で、二子くんが天才ハッカーだと聞いて静かに僕の腹筋が崩壊した。

その後、僕と二子くんで対戦相手を探し、結構すんなりとマッチアップが決まった。やっぱり、水野くんがいることを隠してたのが正解だったようやった。

水野くんは、得意なことは特にないらしい。その代わり、キーパー以外やったら大体できると言っていた。

この子、もしかして自分の実力すら勘違いしてたりするんやろか、と思ったが、流石にそこまで重症では無いだろうと思う。つまり、パスもシュートもなんでもござれ、ということなのだろう。

とりあえず、僕らは水野くんを主軸にしてサポートし、狙える時は狙っていくというスタンスで試合に臨んだ。

試合直前、相手は水野くんを見て怖気付いていた。が、すぐに噛み付くような視線を彼に向ける。生で彼のプレーを見たことがないから、彼を叩き落とそうとしてるんやろな。伊達に一次選考を生き抜いたことはある。けど、そんな態度も開始のホイッスルが鳴った直後に正される。

僕ら先制から始まった試合は、水野くんのシュートで幕を上げた。試合開始僅か一秒。緩んだ相手の位置取りを見て、水野くんは初手からシュートを放った。

凄まじいスピードで美しい弧を描くボールは、そのままゴールの右角へと吸い込まれた。形だけブルーロックマンが飛び込んで止めようとしていたが、そんなものは意味を成さなかった。

ゴールの合図となる笛の音と表示される点数を見て、相手は全く動くことができなかった。それに対して、水野くんは澄ました表情で数歩下がり、相手チームへ視線を向けた。

それだけで、相手が諦める要因には十分だった。

あとは水野くんにビビってパスを回し続ける彼らからボールを奪う簡単な仕事。その後水野くんが二点、水野くんのアシストにより僕と二子くんがそれぞれ一点ずつ決めてその試合はあっけなく終わっ

た。
呆然と膝を着いて俯く彼らを見ることなく、水野くんはコートから出ていこうとする。それが更に彼らを締め上げていく。多分、彼らは「俺達は水野にとって眼中に無い存在なんだ」と認識したと思う。多分実際は試合終わったからはよ部屋戻りたいだけやと思う。相手チームから一人奪うこの試合のシステムも理解してないんちゃうかなあの子。
青森のメッシこと西岡を仲間にして、水野くんの背を追うと、予想通り「なんでそいつ居るの？」ていう顔してた。ほんまおもろい。
３ｒｄステージは、相手選びに難航した。水野くんが同じチームってことが知れ渡ってたし、もしかしたら『青森のメッシ』のせいかもしれん。ていうか『青森のメッシ』って名誉かもしれんけど若干恥ずいな。誰がつけたん？
もちろん、西岡くんには水野くんの真相は教えてない。これは僕らだけの秘密やから。
数日かけて、ようやく対戦相手を見つけることができた。知らん相手しかおらんから、別棟の奴らなんやろう。
試合が成立するまでに四人で練習をしてたが、そこでも水野くんのバケモンぶりを感じた。
ドリブル、パス、シュート、ディフェンス、オフ・ザ・ボール。
「逆に何が出来へんの？」と声を上げたいほどにはバケモンやった。
水野くんからボールを奪えたことないし、意味わからんくらいの隙間にパス通すし、シュートレンジ長いし、マッチアップしたら抜かれへんし、気づいたらどっかいってるし。なんやこいつ。
味方やったら頼もしすぎるが、相手からしたらたまったもんやない。心底勧誘して良かったと思う。
しかもめっちゃ丁寧に教えてくれるし、それが分かりやすいし、僕のこと口説いてんの？　ってくらい。お陰様で僕らの技術は短期間ながらに上がった気がする。実際上がってるやろ。
そして最後の試合が始まったが、内容は特に言うことは無い。
強いて言うなら、相変わらず水野くんが暴れてたくらい。僕と二子

くんと西岡くんが一点ずつ決めて、水野くんが残り二点決めて呆気なく僕らは勝ち進んだ。
途中、というか二点目くらいから相手の目に光は無かったし、息も信じられないくらい上がってた。
水野くんのプレッシャーでも感じたんか、まあ勝つ気のない奴らやったからこの結果はなんも不思議に思わん。
正直、誰も選ぶ気が起こらんかった。
「なんか、あっさり終わりましたね」
「んー、せやね」
うちのチームは誰も汗をかいていない。試合時間が短すぎたのもあるし、試合運びがスムーズだったのもあるだろう。
僕ら、相手も含めて、全員が水野くんに支配されてた。王の道を開けるように、パスコースが開いてた。水野くんは、空間の把握能力と支配力がずば抜けてる。異常なまでに。
彼とするサッカーは気持ちがいい。理想的なパスが飛んでくるから、いつも以上に調子が良いし、僕が居て欲しいところに彼はいてくれる。心の底からサッカーが楽しいと感じられたのは、何時ぶりだろうか。
「あのさぁ」
奪う相手を考えているところで、水野くんが声を上げる。転がっているボールを右足で踏み、倒れ伏す相手チームを見下ろす。
声を投げかけられた相手はビクッと肩を揺らし、恐る恐るという様子で水野くんを見上げる。
水野くんは、恐ろしいまでに無表情で彼らを見下ろす。
(……なんや嫌な予感がするなぁ)
「お前ら、なんでサッカーやってんの?」
「ブファッッ!!」
『なんでお前らみたいな雑魚がサッカーやってんの? 早く辞めろよ』。そんな副音声があの子らの耳に流れたと思う。というか、多分西岡くんもそう聞こえてると思う。若干顔が青い。
でも、内情を知ってる僕らは彼が言いたいことが分かる。

水野くんの言葉でトドメを刺され、パクパクとしか口を動かさない彼らには申し訳ないと思いながら、僕と二子くんは後ろを向いて爆笑した。

ネッシー?・ああ、良い奴だったよ。

二次選考を危なげなく突破した水野達一行は、三次選考である「世界選抜戦」を目前としていた。

世界でもトップクラスのストライカーを集めた最強集団（ドリームチーム）と試合をすることが出来ることに心が昂ると共に、少なくない緊張が全身を駆け巡る。

『青森のメッシ』として、高校サッカー界では有名な西岡をして、身体が小刻みに震えを見せる。それは武者震いなのか、はたまたテレビで見てきた選手を前にする緊張なのか、それとも恐怖なのか。

「水野くん」

「ん？　何？」

【３ＲＤ　ＳＥＬＥＣＴＩＯＮ】と書かれた電光掲示板の下に、青い監獄のマークが刻まれた重厚な扉が置かれている。その扉を潜れば、『世界選抜』が既に揃っているのだろう。様々な形で揺らいでいる心を制するため、準備運動などをそれぞれが行っている中で、氷織が水野へと声を掛ける。ストレッチを継続しつつ、水野は氷織の方へと顔を向ける。

全く緊張などしていないというような水野の顔を見て、氷織は少しの苦笑を零しながら水野にだけ聞こえる声量で話す。

「一応確認するんやけどね、今から何するかは分かってるん？」

「あー……なんか外国の人とサッカーするんだよな？」

「いつも通りで安心するわぁ」

「何が??」

「いや、なんもないよ……てか、相手が誰かは知ってるん？」

「昨日見た奴らだろ？　まあ、そうだな……どっかで見た気がしないこともない」

「どっちなん??」

「テレビかなんかで見たことある気がしないこともないんだよなぁ」

と、頭をかきながら口篭る水野はストレッチを終えて後ろにいるチームメイトを見渡すと扉へと向き直る。

「行くぞ」
「……はぁ」
氷織と話していた時とは打って変わり、低く圧を感じる冷たい声音を放った水野の声に、西岡の身体が先程までとは違ったベクトルの震えを見せる。過去のトラウマがフラッシュバックしたかのような反応を見せた西岡と、そんなことを気にしない（気づいてない）水野を見て、二子は嘆息する。
（無自覚なのが尚更タチが悪い……）
二次選考の最後に放った、『なんでお前らサッカーしてんの？』事件。その時のことがトラウマになっている西岡と、そんな意図は一切ない水野との温度差に風邪をひきそうになりながら、先程まで緊張していた自分が馬鹿馬鹿しく思えてくる現状に、身体の震えを投げ捨てて水野達の後ろへと着いていく。
「氷織、二子。あの髭には気をつけろ」
「「っ」」
コートに入り、すぐに目に入ってきたのは五人の超人。
今までテレビの中でしか見ることのなかったようなスターが目の前にいる事実が現実味を帯びる。
こちらを品定めするように眺め、そして笑いながら英語で何やら言っているシウバ――――の横に立つ、腕を組んでいるアダム・ブレイクを見て、水野は今まで聞いたことの無いような真剣な声と眼差しを見せる。
警戒していることがわかる水野の瞳と声を聞き、二人は思わず強ばってしまう。世界の最前線で活躍するストライカーをひと目見るだけでその危険性が認識できる水野の実力と、そして今まで見てきた、自分達の遥か上に君臨している青い監獄ＮＯ．１が警戒している相手とこれから試合をする事実を受止め、これからの立ち回りを頭で反復しようとして、
「あいつ……マフィアだっ!!」
思わず水野の背中を蹴った自分は悪くないと、二子と氷織は自分に無罪の判決を落とした。

◇◇◇◇

どっかで見たことあるなとは思ってたが……あいつ、マフィアだったのか!!

あの筋肉の付き方、鋭い目付き……なんてやつを寄越してきたんだ、あのクソカッパがっ!!!

『ブハッ！　こいつらもヒョロヒョロだな！　またクソ面白くねぇ試合になるんじゃねぇの！』

『どうでもいい。こんな仕事さっさと終わらせて、昨日ヤリ損ねた日本人女性と着物で×しに行くんだよ』

発言からしてやべぇ奴らの気配が凄いんよ。あの髭はマフィア。テレビに映ってたマフィアはあんな感じだったから間違いない、そうに違いない。

隣で爆笑してるチリチリは……ストリートファイターか。それも無差別に襲って身ぐるみ剥ぐ系のやつ。一番タチが悪い。

昨日、あいつらの映像見ながら、ええっと……『青森のネッシー』？ん？　東谷だったか？　……まあどっちでもいいや。途中から何故か俺らのチームに混ざっていたやつが説明してたのを思い出した。確かあのチリチリ、『重戦車』とかいう異名があった。もう完全にパワー系のステゴロですやん。サッカーどこ行ったの。あいつサッカー出来んの？

あと、さっきからソバカスの子の挙動がいちいちウザイんだが。頬を膨らませてムッてしていいのは可愛い女の子だけなんだわ。アンリさんでも可。

あんな激ヤバ集団にこっちから関わりに行こうとは到底思えない。もしこの場面であいつらに話しかけるような奴がいたら多分そいつは下まつげバシバシなイカレ野郎だろう。偏見だけどね。

『まあまあ、話はこれくらいにして早く試合を終わらせよう』

お、あの中では比較的優男に見える金髪の奴が仕切り出した。あいつはあれだな、自分こそ正しいとか思ってるタイプだ。多分性格が終わっているんだろう。そんな感じがビンビン伝わってくる。よく分からんビルとビルの間の溝に溜まってるドブを１０倍濃縮したような腹黒さを感じる。

あ、こっち来た。

『ごめんね、待たせちゃって。でも安心して！　すぐに試合は終わるからねっ！　君達が点を入れられる訳ないし！』

ナチュラルサイコ爆誕してやがる。満面の笑顔でやべえ事言ってんなこいつ。日本勢は英語が得意じゃないのか、あいつの言ってる事が理解出来てないっぽいな。氷織はちょっと聞き取れてそうだけど。めっちゃ目細めてるし。

聞き取れてない奴らも、なんとなくはあいつのサイコ加減が分かったのか、言語が分からないなりに表情が堅い。

……少し、イラッとした。腐っても、俺はストライカーではある。点を取れないストライカーに価値はない。俺は今、あいつに全てを否定されたようなもんだ。あのどこのナチュラルサイコかも分からないようなやつに。

「――――殺すか」

「「っ!!」」

おっと、思わず殺意が漏れた。でも、俺は悪くない。百歩譲って、緩んだ俺の口が悪い。百歩も譲る気は無いが。全部あいつが悪い。あのクソみたいな笑顔で毒を吐くサイコが悪い。そうに違いない。そうとしか言えない。

試合開始の準備をするようにアナウンスが流れる。それに従い、俺は元々決められていたポジションに着こうと後ろを振り返り、なんかめっちゃこっちを見ているヤツらに気づいた。どしたん？

え、引いてる？　ちょっと引いた目で見てるよね？　ネッシーなんか、目が合った瞬間めっちゃ足ガタガタいってるんだけど。お前、それでもＵＭＡか。

氷織と二子からも軽く引いた目で見られて若干心に傷を負いなが

らも、試合開始の合図とともに、謎の激ヤバ集団との試合が始まった。

『試合続行不可とみなし、青５６番、退場』

ネッシ――――――――ッッッ!!!

あんのクソマフィアッ！　やっぱりあいつがまともにサッカーするとは思ってなかったんだ！『どけ』っていいながらネッシーにタックル。ネッシー死す。吹っ飛んでいくネッシーがシュールすぎて５度見したわ。しかも、ファールとは言えない絶妙なプレス。あいつ……出来る!!

しかもワンプレー目。ゴール前のボールで競り合ってそのままクソマフィアが一点目を勝ち取ってた。ネッシーはピクリとも動かなかった。屍のようだ。く、クソっ！　あんなに優しいネッシーを……優しい……優……ん？　あんまあいつの思い出無いな。てか喋ってないし。ああ、ネッシー？　良い奴だったんじゃねぇの？　知らんけど。　犯罪者予備軍だけど。

まあそのおかげもあり、奴らの手口はだいたいわかった。ファールにならないギリギリで身体的にこちらを壊していくんだろう。ネッシー、お前の犠牲は無駄じゃなかったぜ。

この状況を見て高らかに笑っているであろうクソカッパの顔面にシュートしたい。

「想像以上やなぁ……ただでさえ向こうが格上やのに、人数でも不利なってもうた」

「ヤバいですね……どうしますか？」

ネッシーがマフィアに消されて４対５。しかも見た感じ、割と上手い。

さっきのプレーで三人は僅かに萎縮してるな。それほど動いてないはずだが、僅かに汗が見える……緊張か？

さっきのクソゴミカスマフィアのプレーの善し悪しは置いておくとしても、場の空気はあれで完全に向こう。それは向こうも分かっている。あいつらの目、態度、仕草は、こちらを格下だと嘲笑って脅威なんて微塵も感じていない、そんな馬鹿にしたようにも見えるものだ。

実際、それは正しいのかもしれない。体格は向こうが上、技術もまあまあ高い。連携に関しては即席と感じられるようなものだが、まあ及第点。

奴らの方が総合力では上であり、モニタリングしている河童は高らかに笑う。うん、絶対笑ってんなアイツ。

「とりあえず、俺が点を取る」

「「っ」」

確か、この試合は五点先取。なら、容易に逆転は可能。時間制限もない。

状況の整理。ネッシーが消され、人数不利。相手が一点リードしていて、流れも向こう。こちら側は完全では無いものの、僅かに精神的にやられている。体格は向こうが上、ファールギリギリの接触を狙ってくる鬼畜っぷり。技術もまあまあって……こちらを見下してる。

ボールをセンターマークに置き、上から踏みつける。横には氷織、少し後ろに二子。左サイドには名前を知らない誰か。え、誰？

前を見れば、ニヤつきながらこちらを見るチリチリ、欠伸をしながら目元を擦るソバカスに、気持ち悪い笑顔がデフォのナチュラルサイコ。そして年齢が近そうで、比較的まともそうな坊主に、タックルしてくるマフィア。態度はそれぞれ異なるが、総じて同じことは、こちらを敵とすら思っていない、言うなれば『獲物（カモ）』とでも思っているんだろう。

とりあえず、ぶち殺し確定なのはナチュラルサイコ、次いでマフィア。チリチリもいっとくか。

強者に許される余裕、とでも思っているのだろうか？　まあ間違いでは無いのかもしれない。あいつらの出身がどこか知らんが、海外ではその考えが主流なのかもな。

せっかく日本に来てくれたんだ……ひとつ、覚えて帰って欲しい。
お前らが今してる態度。
その、相手を微塵も恐れず、格下だと信じて疑わない舐め腐った瞳。
それは――――『慢心』って言うんだわ。
電子音のホイッスルと共に、氷織へとボールを渡した。

水????
水野くんがパスを要求してくる時と僕がパスを出そうと思う時は、大抵一致する。
視線を向けられるわけでも、そういった合図がある訳でもない。なんとなく、「水野くんにパス出さなきゃ」っていうタイミングが自然と分かった。
たったのワンプレーだけで力の差が分かるほどに、世界選抜は遠くにおった。
ただでさえ実力差があるのに、西岡くんは負傷して、人数もこっちが不利。正直、「勝てんわ」って思った。悔しいとも、あんまり思わんかった。
心のどっかでは諦めてたんかも知らん。相手は世界で、しかも今も活躍してるプロで、テレビ越しでしか見れんかった、天と地ほどの差があるストライカーで……
「とりあえず、俺が点を取る」
でも……なんでやろな。
相手は世界の中でも指折りのプロで、僕らは高校生で。
勝てるなんか、考えることも無駄や思てたのに。
あんな、アホみたいな勘違いで自分のこと囚人や思って、周りを振り回すような態度を無自覚に振り撒いて。
アダム・ブレイクのことマフィアなんか言うてるような、アホ惑星から来たアホの子やのに。
水野くんやったらいけるんちゃうかって、思ってしまった。

（こういう時は、頼もしいこと言うんやなぁ）
それは二子くんも感じてて。もう一人の……えっと……え、誰？
まあそれは置いといて。
今までは、アホみたいなことばっか言うてた水野くんやけど。
内情知ってからは、どんな行動もアホらしく見えておもろかった水野くんやけど。
今回は、初めて水野くんの真面目なサッカーが見れるんじゃないかって、場違いにも心踊った。

『どうした？　笑顔忘れてんぞ？　あの気持ち悪ぃ顔はどこいった？』
『筋肉しか能のないゴリラが、俺も吹き飛ばせないんじゃただの能無しだろ、雑魚』
『見下してたやつに見下ろされる気分どうだ？　教えてくれよ、なぁ』
『お前、ソバカスだけで一番空気だぞ』
『速いな……うん』

ネイティブすぎて聞き取れなかったが、世界選抜の表情から感情が抜け落ちてるの見て、またあの子はなんかしたんやろなぁ……と、氷織と二子は遠い目で顔を逸らした。

お前がピカチュウに勝てるわけないだろ世界のピカ様舐めんじゃねえぞお前とじゃあ生物としての格が違うんだよ比べることすら烏滸がましいぐらいの差があるんだよ身の程を知れよクソが龍とノミ位の差あるんだよ分かっ

『抜いてみ――――』

『邪魔』

さてさて、氷織からのパスでスタート。相手側の一点リード、こっちはネッシーが湖にこんにちはしたから四人。人数的不利と、見るからに身体的（フィジカル）不利。

デカブツが三面、小さめ二人。バランスがいいのやら悪いのやら。

右からなんか来た気がするが、どうでもいいので無視する。ぶち殺し確定な三人をどう調理するか。

『へぇ、結構やるね君』

来たな、ナチュラルサイコパス。

左にいた坊主は外側から自陣のゴール前に走ってる。氷織と俺の間辺りに陣取ってシュートコースを無くす気か。いや、氷織へのパスを潰して随時俺へのヘルプに来れるポジショニングをする気か。割と脚速めだな。

重戦車（笑）とマフィアはあまり動いてない。自分達の所まで来ないとでも思ってんのか……完全に舐めてやがる。

右にいたソバカスは……すまん普通に抜いてたわ。影薄いなお前。もうちょいキャラ濃くした方がいいぞ。

氷織と二子は俺よりやや後ろのライン上、氷織へのパスは必然的に排除、状況に応じて二子へとパスを出してワンツーで抜いていく。

て、思ってんだろうな――――甘ェよ。

二子へと視線を向けることなく、ナチュラルサイコパスへと突貫する。パスを出すものだとでも思っていたのか、わざとらしく驚いた様

子を見せたあと、謎に歓迎するような、それでいて見下すような笑みでこちらを見る。
分析しろ。ナチュラルサイコはフィジカルこそ俺たちよりも一回りは大きいが、それは海外ならでは。そう捉えれば、むしろ細い方だろう。それに、筋肉の付き方がパワー系ではなく、テクニック系。なら、俺がすることは限られてくる。その中でもできる限りアイツの血管が爆発しそうな手段を取る。
――――よし、決めた。
加速はしない。周りからは遅いと思われるも、遅すぎない程の速度で走る。
俺が遅いからか、サイコはパスを疑う。ん～、サイコパスだなぁ。
抜きはないと判断はしてないだろうが、僅かにでも意識を外に向けた……いや、元から俺達のことは格下だと慢心している。穴を突くのは、容易が過ぎる。
一定の間合いを開けてからのファーストタッチ。予備動作無し（ノールック）で股へとボールを潜らせ、加速する。加速と言っても、六割程の速度。油断して股を抜かれたとしても、サイコはすぐに振り返り俺の体へと腕を伸ばして妨害する。当たり前だ、追いついてもらうために速度を落としているのだから。
二回目。踵蹴り（バックチョップ）で迫るサイコの股下にボールを通す。ここで、一瞬相手の思考は停止する。抜いたにもかかわらず、わざわざ後ろへと戻す、しかも股下を抜くリスクを取る意味が分からないだろう？　生産性のない、全くの非効率、非合理的なプレイの真意を捉えようとしてるんだろう？
もちろん、こんなプレイに意味なんてものは無い。わざわざ後ろに下げるような真似をしなくても、一回目のまた抜きの時点で抜き去ればいいだけの話。それをしなかったのは、単純に、お前の股にボールを通すことだけが目的だから。
速度を落としていた俺とは違い、相手は俺を止めるために一歩を大きく踏み出している。急には止まれない。俺はすぐに切り返し、サイコの背後……相手からすれば、初期の位置関係へと戻る。そして、こ

ちらへと振り返ろうとした相手の股下へと、三度目のボールを通す。
『足開きすぎだろ……誘ってんのか？』
『は？』
今度は加速、相手を完全に抜き去る程の速度で駆け抜ける。本当なら後二回くらいやっておきたかったが、まあ粛清対象はこいつだけじゃない。また何回か抜いてやるさ。
テクニックタイプの相手を倒すのは、同じく小手先の技術で倒すに限る。その中でも最も俺がイラッとする行為、それは連続また抜き。
一度だけなら、相手が上手かった、たまたまだ。そんな反省でもなんでもないものが脳によぎる。しかし、それを2度、3度と繰り返されればどうだろうか。
抜かれた本人はこう思うだろう。『どうしてあの時足を閉じなかったのか』、『下手すぎじゃね？　俺』と。まあ個人差はあるだろうが、少なくとも俺はそう思う。されたことないけど。
まあ、一回の連続また抜きだけで心をへし折れるとは思わないからあと二、三回はやるつもりだが。後ろから迫る様子は無いことを見るに、割と効果はあったらしい。
『生意気な小僧が』
『止めます』
「――――”ロック”」
パスは無いと判断したのか、したところで止めに入れると踏んだのか。左にいた坊主、そしてマフィアが俺の前へと立ち塞がる。重戦車(笑)は少し後ろに控えているが、いつでも飛びかかれる位置取り。悪くない。まあ、関係ないが。
後ろの情報をカット。俺よりも前の選手、ゴールのみに意識を集中。目に映る全てが止まっているような感覚。ゲーム中にメニューボタンを押した感じに近いそれは、無数の白い光が俺の足元から伸びていき、ゴールのあらゆる場所へと向かっていく。その中でも一際輝く光をなぞるように右足を振り抜き、シュートを放つ。
放たれたボールはマフィアの顔の横を通り、強めにかけた回転によって、急カーブを描いてゴールの左上へと突き刺さる。ブルーノっ

ぽい誰かが飛び込んでいたが、届くはずもなく、ボールはネットを揺らし、勢いを失いゆっくりとこちらへ向かって転がっていく。
得点を告げるホイッスルが鳴り響くだけの無音の空間が出来上がっていた。え、なんで？　氷織と二子、喜んでくれないの？
ちょっと引いた感じでこっちみてるんですけど。
「えぇ……やばぁ」
聞こえてるっちゅうねん。
涙が込み上げてくるのを我慢して、自陣へと戻ろうと振り返ると、こちらを見つめる視線が二つ。
別にもう興味も何も無いが、真顔でこちらを見つめるサイコは少し面白い。俺は努めて表情を消して、すれ違い様に小さく呟く。
『どうした？　笑顔忘れてんぞ？　あの気持ち悪い顔はどこいった？』
ピシッ、という音が聞こえた気がする程に、サイコの方が震え、額に青筋が薄らと浮かび上がる。割と効果あったな、と思いながら歩みを進めながら、俺は思っていたことを思わず口にした。
『居たんだ、お前』
『……は？』
『お前、ソバカスだけで一番空気だぞ』
あ～、そんなに力強く拳握っちゃって。イラついてんのか？　ソバカス増えるぞ？　良かったな、もっと増えればキャラ濃くなるかもな。
面白いものを見るような目、真顔でこちらを見つめる目、そして怒りに燃える目と、味方からは純度１００％のドン引きを頂戴しながら、ゲームは続行された。

氷織、二子、そして名前は知らない誰かは、味方ながらに水野のぶっ????

壊れ加減にドン引きしていた。
有言実行。点を決めるといった水野はその言葉通りにゴールを決めたものの、過程がえげつなかった。
世界を相手に戦っているプロを相手取り、遊んでいるようにさえ見える程の、圧倒的ドリブルセンス。
速くはない。決して追いつけないスピードでは無いと、客観的に見ていた三人は感じていた。それと同時に、その速度すら抑えているものだと実感する。
抜こうと思えば、いつでも抜ける。そんなドリブルを見せつつ、三回もまた抜きを見せたのは、単なる煽りだろうと分かった。そして聞こえてくるネイティブな英語。聞き取ることは叶わないものの、氷織と二子は確信する。
(嗚呼、知らないところで勘違いが加速してる気がする)
それは、感情が抜け落ちたルナを見て察した。それと同時に顔を背けた。間違っても標的にはされたくない、と。
「自分の撒いた種は自分で処理してや」
「ん？　ああ。ボコボコにへし折るつもりだけど。パス出していくからな」
「ごめん今のは僕の言葉足らずやったあああああ始まってもたァァ!!」
カバソスがロキへとパスを出す。その前に水野が割り込みロキのドリブルが止まった。
チラリ、とロキは視線を横へ向ける。カバソスのパスコースは塞がれているが、後ろはその限りではない。そこには、無表情でこちらを見つめるルナの姿。
「パスを寄越せ」そんな言葉が聞こえてくるほどに、ルナはブチ切れていた。それをロキは感じ取り、苦笑を浮かべながらも視線を切る。それは、その要求を断ることにほかならない。
(あんなプレーを魅せられたんだ。滾るに決まってる)
ストライカーとしての性質。油断していたとはいえ、途中から本気を見せたルナを抜き去るドリブル力に、コート上の情報を瞬時に整理し、最適なプレーへと繋げる速度。そして、正確無比なシュートセン

スと、限りなくゼロに近い予備動作。そんなものを見せられて……魅せられて、血が騒ぐというものだ。
ボールを僅かに動かし相手を観察。睨み合っているだけに見えるそこには、幾重もの攻防が繰り広げられている。数秒のフェイントの数々、そしてそれに対する水野の反応。それらを総合的に評価し、結論を落とした。
（隙がない）
ならば、と。
深く、深く腰を沈める。それはさながら短距離走選手の走行準備（スタートフォーム）。ロキから見て右サイド。数メートル空いている位置。水野は僅かにゴールのある中央寄りを警戒しているのが見える。
『速さで押し切る――――』
小細工は必要無い。
神童と言われたロキの武器は初速から最高速度（トップスピード）へと繋げる爆発的初速と、その速度を維持する持続力。ロキが一度相手を抜いてしまえば、誰も追いつくことは叶わない。
軽く蹴られたボールに向かい、全力の踏み込み。天性の速度は、まさに神速。驚きを顕にするように、水野の双眼が見開かれ、ロキは水野の右側、ラインスレスレを駆け巡り、そして抜き去って――――
（ボールが消え――――）
『速いな……うん』
『なっ……!!』
そこにあるはずのボールの感触を感じることは叶わず、その速度を表すようにコートを滑りながら急停止する。振り向いた先には、ボールを持った水野が既に氷織へとパスを出して駆け出していた。
唖然とし……そして高揚が全身を駆け巡るロキを他所に、水野達は前線へと走り出す。カバソスが二子のカバーに入る。
「貴方たちと1VS1する訳ないでしょ。あの勘違い野郎（バカ）と一緒にしないでください」
「聞こえてるよ？」
即座に氷織へとパスを出し、水野へと警戒が向かっていたことか

ら、氷織は空いたスペースへと駆け上がる。
しかしアダム・ブレイクが珍しく動き出し、氷織の前へと立ち塞がる。といっても、フォローに入りだしたばかりで、まだこちらとの距離は十分にあった。
「――うん、そこやね」
ゴール前、こちらを一瞬だけ向けてきた瞳。それだけで自身の役回りを理解する。
迷うことなく、氷織は正確なキック精度を用いて、ゴール前にいる水野の頭上少し前へとパスを出す。
「!!」
『撃ち落とすぜっ！　ヒョロヒョロがっ！』
（こいつ、意外と分かってる）
ゴール前に残るシウバが水野とのポジショニングを争う。ただの重戦車（筋肉ダルマ）（笑）と思っていたが、その技術が割と高いことに驚嘆する。
速度よりも精度を優先したパスは緩やかに弧を描きながら二人の元へと向かっていく。
（身長はほぼ同じ……腰を落とせ。重心をズラす。十分な踏み込みをさせないように――簡単な事だ）
『チッ!!?』
下へ、下へ。シウバよりも低く、伸し掛るような姿勢を維持させて、相手を仰け反らせ。
上へ、上へ。跳ぶタイミングも、位置も、身体も。全てを相手よりも上へと置いて。
高さはいらない。もとよりそういう勝負ではない。ただ、相手を飛ばせなければそれでいい。
力はいらない。重心の位置を、呼吸を、タイミングさえ掴めれば、あとは技術だけで事足りる。
跳べない。そんな、ありえない事象にシウバが舌を弾く。見下し、見下ろしていた相手は、自分に反して空中へと舞い踊る。
直接のゴールは狙えない。その点は水野はシウバを評価する。しかしそれだけ。

ヘディングでトラップ。そのまま着地することなく、脚を振り上げて、シウバの体を利用して身体を反転。ゴールへと視線を向けることなく、右足を振り抜きゴール右下へと叩き落とした。
キーパーは動くことなく、ゴールを告げる電子音が鳴り響き、体勢を崩したシウバは手を付き尻もちを着く。
瞳が揺れた。
本来なら有り得ない。こちらを見下ろすということを成し遂げた日本人。空中戦ならば無類の強さを誇るシウバを打倒して見せた青年は何を思い、どんな表情を見せるのか。
――”無”。
喜びも、興奮も。どのような感情も感じさせない無色の瞳は、ただただシウバを見下ろす。
ただ視界に入ってるから見ているだけ。そう捉えることが出来るほどに、その青年はシウバへの興味を全く持っていない様子を見せた。
『見下してたやつに見下ろされる気分どうだ？　教えてくれよ、なぁ』
ようやく色を見せた青年の口から発せられたことばは、少年の好奇心のようなそれ。純粋に、気になったから聞いただけ。そんな言葉は、シウバの胸にスっと入り込み、腸が煮えくり返る様な屈辱となって拳をにぎりしめる。
いい回答を得られないと悟った水野はそれ以上一瞥もせずに自陣へと戻り、煽られたと感じたシウバは殺人鬼のような視線を水野に向けた。
もし、そんなシウバの表情を水野が見ていれば、「やっぱり!!」と興奮したように氷織たちの元へと向かい、頭をはたかれていただろう。
「何となくしか聞き取られへんかったけど……水野くんは、あれやね。人の心持った方がええよ」
「道徳の教科書要ります？」
「お前らほんと遠慮無くなってきたよな」
「「えん……りょ……??」」
「ただひたすらに怖い」

リスタート。
世界選抜からのボールは、水野を避けることはせずに、水野との真っ向勝負を持ち込む。ストライカーとしてのプライドが、矜持が。決して逃げることを許さない。
もちろん、水野を避けてパスを出せば容易に勝てるこの試合。
点を決めれば追加報酬で莫大な金が手元に入り込むが、彼らには既にそんなことは頭になかった。
『徹底的に……潰す』
表情を見せないルナが、一人で水野へと走る。シザース、ルーレット、エラシコ。様々なドリブルで応酬するも、絶妙な距離を保つ水野を抜く決定打にはなり得ない。ただし、ルナの狙いはそこではない。
揺さぶり、揺さぶり、揺さぶり……激しくも無音の応酬の最中、水野の足が僅かに開いたことをルナは見逃さない。
やられたのなら、二倍、三倍返し。ルナは、また抜きをすることに神経を注いだ。
もちろん、それまでに抜くことが出来れば抜いていたが、少しも隙を晒さない水野を抜き去ることは叶わず。
（……なんでこんなあっさり隙を見せた？）
『単純すぎて悲しくなる』
足元を一切見ることなく、自身の股下を通り抜けたボールをそのままに、クロスエラシコでルナを抜き去る。
それを待っていましたと言わんばかりに、ロキが水野のマークへと着く。心做しかどこか嬉しそうだ。
水野はパスコースが既に塞がれていることを確認。ロキを抜くことを決める。
（速さでは勝てない。抜いた後もこの距離ならすぐに追いつかれる……なら、抜き続けるだけだ）
一回目。ノーモーションから動き出し、ロキが反応する前に抜き去る。僅かに前に出た瞬間、すぐ様腕を体の前へと塞ぐように突き出してくる。左手で弾き、一度速度を落として距離を取る。

二回目。空中エラシコでロキの頭上を通す。そのまま水野は完璧なトラップで前に踊り出ようとするも、ロキの反応が早く、僅かにボールに触れて水野の動きが止まる。
三回目、四回目、五回目……
『ハハハッ!!』
「え、怖」
一進一退の攻防の中、ロキは嬉しそうに笑い声を上げて口角を上げ、水野はその突然の豹変に普通に日本語で引いた。
抜いて、崩し、抜いて、崩し。互いに決定打に欠けるプレーが続く。
(足が速いのは相性悪いな、こいつ苦手だ……まあ、それ相応の対応をするだけだ)
中央へと切り込み、今度は水野の方からロキを牽制。並走する形を取った。子供が玩具を見つけたような、無邪気な笑みを浮かべるロキは額に僅かな汗を滲ませながら楽しそうに追随する。
『調子に乗りすぎだ、小僧』
『ちょっ、僕の番ですよ!』
(うわ、マフィア)
ロキと挟むように、アダムが向かってくる。
(こいつは見た目通り筋肉ダルマ。ネッシーが湖に帰るくらいには威力ある。普通の力勝負じゃ勝てない)
同じように並走してきたアダムは水野の近くまでやってくると、何をするのか察したロキが不満げな顔を浮かべながら水野から距離をとる。
ブルーロックの変態的なピチピチのボディスーツがアダムの筋肉量を如実に表し、膨れ上がった筋肉は水野へ向けて放たれる。
ただの接触。それだけで並の選手は吹き飛び、地面へと熱いキスをすることだろう。
アダムが感じたのは、異常なまでの手応えのなさ。触れたはず、いや、実際に触れているだろうにもかかわらず、当たった手応えが全くなかった。
「ま、受け流すに決まってるわな」

力の行き場を失ったアダムは僅かに揺らぐも、すぐに体勢を整える。しかし、その僅かな時間は、決定打となってゴールを揺らすこととなる。

『させないよ』

離れていた距離を一呼吸のうちに消し、右足を構える水野の元へとロキが現れる。今まで水野が打ってきたのは右足のシュート。当然、ロキは右利きであることを理解し、右足の前へと躍り出る。

スライディングは不要。そんなことをすれば水野はすぐに対応してフェイントを挟むはずだからだ。

止めた。完全に。そう確信したロキは、次に水野が行動を起こす前にボールをカットするべく足を伸ばして。

『……は』

振りかざした右足は前に、踏み込むために使われる。左へと軽く押されたボールはそのまま水野の左脚によるシュートが放たれ、今まで以上の速度のシュートのキレを見せる。

当然、ブルーロックマンは反応することは出来ず。最早、故障しているのではないか。そう思えるほどに微動だにしないキーパーを置き去りにして、シュートは深深とゴールに突き刺さった。

『両……利き……』

『いや、ただの左利き』

『は……』

『青い監獄、暇だから右足使ってた。それだけ』

理不尽。ただひたすらに強すぎる。ロキは率直にそう思った。

今まで、ロキは世界を見てきた。ドリブルが上手いやつ、フィジカルが強いやつ、様々だ。それを捩じ伏せて、ロキは今ここに立っているほどの実力を示してきた。

でも、水野悠は違う。そのどれにも当てはまらない。そのどれにも、当てはまる。なんと形容していいのか分からない。全てにおいて圧倒的すぎる。速さはロキが2回りほど分がある……それ以外の全てが、圧倒的だった。

その上で、感じた。

水野悠は、ノエル・ノアを越えうる……いや、既に超えているのかもしれない、と。
『筋肉しか能のないゴリラが、俺も吹き飛ばせないんじゃただの能無しだろ、雑魚』
そして、すれ違い様にアダムへと吐き捨てた彼は、やはり最高に、エゴイストなのだと実感し……喜びが全身を支配した。

◇◇◇◇

「――――うそ」
辺り一面をモニターで囲まれた一室。その全ては、今現在まで行われていた試合をあらゆる角度から映し出されていた。
今しがたボールがネットを揺らし、試合終了の笛が鳴り響く。
コートに立つ選手達は、まるきり対極的だった。
ブルーロック側は、ほとんどが汗まみれで、緊張からか膝から崩れ落ちて深く息を吸っている。
世界選抜側は、汗こそ流しているもののそれは僅か。肩を揺らしている様子は見せず、体力が有り余っているように見える。
電子板に表示される点数は、二度ほど同じものを見たことがあった。……もっとも、今回の結果は、それらとは真逆のものだったのだが。
胸に携えた紙の資料を力なく落とし、落としたことに気づかないままにアンリは呆然と呟き、目の前の数字が信じられないもののように思えていた。
そして、諸悪の根源である河童……絵心は、クツクツと心底可笑しそうに笑い、ズレた眼鏡を指で抑えて正した。
「さぁ、エゴイスト共――あの怪物に喰らいつけるか？」
ブルーロック側、唯一汗ひとつ見せず悠然と佇み、静かに世界選抜の方へと体を向けて、特に感情的に顕にしないままに告げた。
『半端者が――――俺の前に立つな』

世界選抜　ＶＳ　ブルーロックス
１対５
――――――ブルーロックス、圧勝。

早く逃げるぞっ!!!

「水野くん、これなんて訳すん？」
「ん～『ウンコの大きさをいちいち報告してくる男は超一流の会社に勤めているエリートだ』」
「どういう状況??」
「水野くん、これはどう訳しますか？」
「『俺は道徳心の欠けらも無い勘違いクソ野郎だ』」
「いや自己紹介は要らないですよ」
「訳した結果だわ」
よく分からん外国人煽りクソ野郎集団の尊厳を踏みにじった俺たちは、今英語の勉強をしている。何故かって？　知らん、俺が聞きたい。
試合終了後、いつものように部屋に戻ろうとした俺たちはその途中にあるなんか広い部屋に呼び出され、そこには河童がモニターに映し出されていた。案の定爆笑している河童は手を叩きながら「おめでとう」やら「素晴らしい」やら謎の賞賛を浴びせてきたが、相変わらずのガンギマリの目つきに一周まわって少し心配になった。ガリガリじゃねぇか、飯食え。
河童の隣に立つアンリさんに同情して黙祷を捧げていると話のほとんどが終わっており、なぜだか英語の習得を命じられた。なんで？

まさか、海外からの刺客が続々と現れるというフラグ？　いや、海外のガチガチ刑務所に移転する……とか。いや待て、落ち着け。俺は何もしてない。善良な一般市民だ。流石にやべぇ奴の集まりでもある海外の刑務所に入れられるなんてことある訳……いやダメだ、あいつ自称革命家だったわ。何するかわかんねぇ。く、クソっ……!!　読み切れない……だと!?
「急に頭抱えだしましたよこの人」
「そういう時期なんやろ。ほっといたり」
幸い、英語なら普通に使える。つまり英語習得のために設けられた

どれだけかは分からない期間、俺は自由に行動できる。そこで暴く、暴くんだ。奴の意図を!!

用意された勉強机を四人で囲いながら、俺はこれからの方針を頭の中で組み立てる。あ、ネッシーは帰ってきてない。多分湖に沈んでそのまま底に着いてしまったのだろう。さらばネッシー、お前のことは忘れないよ。特に印象ある訳でもないけど。

勉強と言っても、俺は英語を話せるので基本的には教える側な訳だが。渡された教材もペラペラめくってポイしたし。把握。

分からないところを聞かれたら答える。発音やら、文法やら、和訳やら。まあそれも時々だから、やることも無く暇を持て余した俺はスマホを適当にいじっている訳だが。

そんなこんなで一時間ほど暇な時間が続いていた頃で、氷織が話題を振ってきた。

「水野くん、英語ペラペラやなぁ。世界選抜戦の時も凄かったし」

「本場の人みたいな発音でしたよね。ほとんど聞き取れませんでしたよ」

「しかもサッカーも上手……えー……サッカーもしてるし。逆に何が出来へんのって感じ」

「人の心を読むこと」

「あー、それや」

「なんでその流れで俺罵倒されたの？」

失敬な。人の心を読むことなど容易いことよ！

「高二で英語ペラペラとかスペック高すぎやろ。凄いな」

「凄い……??? 何が??」

「いや……高校生でそこまで英語話せる人なんて居ませんよ。専攻な訳でもないでしょうし」

「???」

「何その「何言ってんだこいつら」みたいな顔」

「何言ってんだこいつら」

「ほんまに言いおった」

本当に何言ってんだこいつら？　英語が話せることが凄いって

……何？

いやいや、え？　どういうこと??　どこも凄くないだろ。だって。

「勉強したんだから……話せるのは当たり前だろ？」

「……はあ？」

何を当たり前のことを聞いてんだこいつらは。勉強したんだから英語を話せるようになるのは普通のことだろ？　だってそうだろ。覚えようとしたんだから覚えられる。話すための勉強をしたから話せる。他の言語も同じことだ。日本語を話せることを疑問に感じるのか？

サッカーも一緒だろ。

練習したからリフティングができるし、シュートの練習をしたからゴールが決まる。

試合の展開を想定した練習をしたからこそ、試合でミスをすることはないし。キーパーはやったことないから出来ないけど、練習すれば誰でも出来るだろう？

練習したから。勉強したから。

だから……出来るということは、ごくごく普通のことだ。

誇ることなんて一切ない。ただ、当たり前のことが出来るだけ。何も難しいことは無い。普通のことを普通にできる。ただそれだけだ。

二人が英語を話せないのは、話そうとしなかったからだろ？　だって、勉強をしていたのなら、英語が話せないなんてこと、有り得ないんだから。

そっと息を呑む二人を他所に、俺はスマホへと視線を戻す。ん？『糸師　冴』？　へー、あいつと同じ名前じゃん。苗字知らねぇけど。元気にしてるかねぇ、あいつ。相変わらず敬語使えないんだろうなぁ。開口一番の「誰だテメェ」には痺れたね。

それから数日。と言っても一日二日だが、勉強タイムは割と直ぐに終わりを迎えた。革命家の河童からの招集を受けて、俺たちは今、何時もなら勝手に開いてくれているであろう重厚感のある自動ドアの前に立たされている。いや開けよ。

あ、ネッシーはまだ帰ってきていない。よっぽど湖の奥深くに潜っているのだろう。浮上するのに時間がかかっているらしい。知らんけど。

言われた通りに扉の前に立たされて数分。飽きた。

「帰るか」

「帰るな」

来た道を戻ろうと振り返る俺の肩と顔面をそれぞれが鷲掴みにして来た。最初は抵抗した俺だったが徐々に戻っていく体がロボットのようで少し惨めになったので大人しく前を向く。いや力強っ。マフィアのタックルより強いんじゃね？　お前ら人間じゃねぇ。

そんなやり取りをちらほら。全く扉は開かない。まじで帰っていいか？　どういう嫌がらせだよ、小学生でももうちょいましな嫌がらせ思いつくぞ。

「――今日は天気が良いな」

「ここ室内やで？　窓なんか無いよ？」

「話題が無くなって気まずくなったあとの一言やめてください」

そういえば、ここに収監されてから、久しく空を見ていない。というか太陽の光を浴びてないんだが。時間感覚がバグりそうた。人間って日光浴びないと死ぬ呪いとか無かったっけ？　早く外に出せよ。海外でももうちょいまともだぞ。

そういえば、俺はここで俺達を監視している奴らをカッパとアンリさんしか見たことがない。あの外国人達も雇ったのだとすれば七人だが、その可能性は低いだろう。あいつらは一時的な雇用だと見ていいと思う。なら、今実質的にこの施設を運営しているのは二人だ。

あの日。俺が無実を証明すると誓ったあの場所には３００人近い人間がいた。あれが全て犯罪者予備軍だと仮定し、全員がここに収監されているとする。

二人で３００人の管理。

あいつら死んだわ。

あー。だからあんなに目がイッてるのか。納得納得。過労死手前か？　日本人の鏡だねえ。少しカッパに同情してしまった。まあ俺

も謎の労働（サッカー）してんだから許せ。
『それではラスト。７ｔｈクリアチーム、入場してください』
　両手を合わせ目を瞑り、二人から引かれたところでアンリさんの声で放送が聞こえてくる。『７ｔｈクリアチーム』？　誰それ。何言ってんだあの人。そんなのいいから早く扉開けろや、真剣に帰るぞ。
「ほら、行きますよ」
　二子に背中を押され前のめりになる。するとタイミングを図ったかのように、今までうんともすんとも言わなかった扉がウィーン、とロボットのような音とともに開き、奥の景色を見せてきた。
　まさか……二子……!!
「ハッキン――――」
「早く行け」
　二人に蹴り飛ばされた俺は、キレてもいいかもしれない。ダメか？
　ダメか。

　ブ?????
　ブルーロックのストライカー達は、世界選抜戦を経験し、語学学習に励んで数日、二次選考通過者が中央ジョイント・ルームへと集められた。
　クリアチームはのべ７チーム。３００人……いや、３０１人いたストライカーは、現在では３５人にまで減少。
　見知った顔、知らない顔。まだ見ぬストライカーが集結し、潔　世一は一喜一憂していた。
　６ｔｈクリアチームの入場において、國神の敗退が告げられ、士道と一悶着起こり、遂には暴力沙汰に発展するというところで、残された最後のクリアチームの扉が開いた。
　今までまばらだった視線が一点に集中する。それはその場に居るもの全ての関心がラストチームに向けられた故。
　それも当然か。居るはずのストライカーが、未だに姿を現していないのだから。

扉が開いて行く。異様な程にスローペースで開いていく扉の中央に見えてきたのは、ユニフォームの中央に大きく書かれた【1】の数字。

両手をポケットへ入れ、俯きながらゆっくりと進んでくる男。

潔　世一が、この男を生で見るのは二度目。しかし、一度目は眠る彼の姿しか見ていない。故に、彼の現在のチームメイト以外にとって、これが初顔合わせと言えるだろう。

扉が完全に開き、彼のチームが全員入場を果たす。そのチームに二子がいることに僅かながら驚きと喜びを感じながら、潔をはじめ、その場は無音の時を過ごす。閉じていく扉、そして西岡の不在を伝えるアナウンスでさえ、彼らの耳には入ってこなかった。

目が、離せなかった。

世界選抜のような、わかりやすい圧があるようには思えない。ずば抜けて身長が高い訳でもないし、筋肉が発達している訳でもない。にもかかわらず、彼から目が離せないのは、ストライカーとしてここで生き残ってきた彼らに付随的に備わった第六感のような何か。

その時、ブルーロックスの認識は一致する。

――――コイツはやばい、と。

「水野、悠……」

思わず声が漏れたことにも気づかない潔の声が耳に届いたのか、水野はチラリと視線を向ける。ただ向けられただけなのに、全身がブルりと震えたものの、それは一瞬のこと。興味なさげに視線を外した水野は全体を見渡したあとにため息をひとつ零す。

ブチリ。

潔は、隣から血管が切れたような音を耳に拾うと、案の定と言うべきか、糸師　凛は青筋を大きくさらけ出しながらドスの効いた声で「あ”?」と呟いていた。

「狭くね？　てかカッパ何処だよ。帰っていいよな？　いいよね？　よし、帰ろう」

「めっ。まだ此処に居なさい」

「もうちょっと待ちましょうね」

「あれ、俺今煽られてる？」
「今周りを煽ったのは貴方ですけどね」
「見てみ、あのイケメン。凄い顔して……ブハッ！」
ボソボソと、離れたこちらには聞こえないような声量で会話をする三人。会話の内容が気になりはすれど、先程の溜め息が頭を過ぎる潔は水野を注視する。と。
「ヤッホー、ＮＯ．１♡」
見ているだけしか出来なかった中、潔の近くに居たはずの士道が身を乗り出して駆ける。先程の煽りに触発されたのか、脚力を活かして大きく飛び跳ね、水野の顔に向けて右足で横薙ぎの蹴りを放つ。士道の身体能力の高さを実感している潔は思わず手を伸ばしてしまうも、それは無用の心配で終わった。
後ろから迫る士道の蹴りに視線を向けることなく、頭を下げて回避した水野はそのままに空中に漂う士道の体を掴みあげると、勢いそのままに地面へと叩き落とした。
背中から地面へと叩きつけられた士道は肺の空気が全て漏れだし、口を大きく開けて空気を欲する。上手く空気が入らずに悶えながらも視線だけは獲物へと向けようと本能のままに水野を見やる。
「……首輪くらい付けとくんだな」
士道には一切視線を向けることなく、いつの間にか画面に映っていたカッパ……絵心に向けて口を開く。
面白可笑しそうに歯を見せて口角を上げつつ、両手を上げて落ち着くように促した。
「そいつはこの中じゃお前を満足させられる可能性を秘めている一人だ、水野悠……今は相手にならないだろうがな」
「――――コレが……？」
大して大きくはない、呟くような言葉。しかし、この空間にはやけに響く冷たい声音はストライカー達の警戒度を上げるもの。
視線を初めて士道に向けるも、その瞳に温度はなく、道端の石ころを見るようにたまたま目に入ったとでも言える瞳の色。
そして視線を外すと、もう一度後ろに控える潔達へと今度は品定め

するような目で見渡すとすぐに興味をなくしたように視線を切った。
「話にならないな」
「――――どういう意味だ」
　水野の後ろで肩を揺らす二人とは対照的に、他の囚人（ストライカー）達から剣呑な空気が滲み出す。その中でも、比較的沸点が低い凛が一歩踏み出した。喧嘩を売られていると感じた凛に対し、水野は「そのままの意味だ」と返す。
「俺は眼中に無いってか？」
「それ以前の問題だろ」
「言ってろやクソが……屈服させてやるよ、暫定一位」
　持ち前の身長から、見下ろす形になる凛の眼圧に対しても、水野の対応は変わらず。全く引く様子の見せない両者が睨み合うこと数秒。さすがに待ったをかけた絵心はこれからのスケジュールについて話していく。舌打ちを零しながら一歩引いた凛に合わせ、水野も数歩後ろへと下がり絵心の話を聞く姿勢をとる。
「絶対あの人――――って思ってますよ」
「間違いないな。ほんま飽きひんわあの子」
　予定していたスケジュールを繰り上げ、Ｕ２０日本代表との試合を組んだことを告げ、それに向けての方針を話す。
「今から名前を呼ぶ６名を中心に青い監獄はチームを形成する」
　総合評価のＴＯＰ６の選手を呼ぶ。ハングリー精神の強いストライカー達……特に潔はその中に選ばれたいという欲を見せ、絵心からの発表を待つ。
「まずは総合ＮＯ．１――――水野悠」
（水野……やっぱりアイツがＮＯ．１……!!）
　青い監獄の中でも異質な待遇を受けていたことから予想はしていた。しかし、同じチームとなった凛のプレーを見ていた潔は、凛が一位になるのではないかという予感も秘めていた。しかし、呼ばれたのは言うなれば予想通りの水野。舌打ちを零しながら睨む凛とは対照的に、水野は何も驚いた様子を見せずにただ悠然と佇んでいた。
「あの人多分なんの順位かわかってないですよね」

「どうしたらいいかわからんからとりあえず黙っとこ見たいな立ち方おもろっ」
そしてその以下は順に凛、土道、烏、乙夜、雪宮となった。
ＴＯＰ６が発表されると、６位に選ばれた雪宮が順位の選定基準について問う。
「上位３名は世界選抜戦でそれぞれゴールを決めている」
あとは一次選考からの得点数と世界選抜からの個人評価に基づいたものだと言う。納得の色を見せる雪宮が下がると、今度は凛が画面に映る絵心へと鋭い声で問いかける。
「俺とＮＯ．１（ナンバーワン）との差はなんだ？」
それは凛にとっては当然の疑問。彼らは水野のプレーを生で見たことは無い。更には映像越しに見たのも入寮テストが終わり、数日してからの一度きり。それもダイジェストであったため、いまいちその差が理解出来ていなかった。
凛の鋭い目を受けた絵心は可笑しそうにフッ、と笑いが込上げる。それを受け、眉間に皺を寄せる凛に大したアクションは見せない。
「長く話しても面倒だ。結論だけ言おう。納得しなかったら水野悠の世界選抜戦の映像を見てから文句を言いに来い。モニタールームに各チームの世界選抜戦の映像を置いてある。自由に見ろ」
そして一呼吸。静まり返ったルーム内には僅かに混乱しながらも絵心の言葉を待つ選手。そして、ニヤリと笑って絵心は口を開く。
「糸師　凛、土道龍聖が世界選抜戦で決めたゴール数はワンゴール。そして――――水野悠は、ファイブゴールを叩きだし、世界選抜に勝利している。以上だ」
「なっ!!?」
「嘘だろ!?」
絵心から告げられた内容に、全員の思考が停止する。数瞬の後、ようやく噛み砕いて理解した彼らは、一様に水野の方へと顔を向け、驚愕の表情を浮かべた。
潔は思い出す。今まで感じたことの無い壁。それを体験した。世界の広さ、高さ、圧倒的な力。諦めてすらいた程の力量差。

油断をついた凛のワンゴールでも凄いと思った。その後は蹂躙と呼べるものだったが、その経験は今でも……生涯忘れることの無い強烈な思い出。

あの凛が、目を見開いて驚愕を隠していない。それにも納得してしまう強烈なインパクト。

自分達では本気を引き出すことも出来ず、ただ遊ばれてバイト感覚で試合をされた屈辱的なまでに強いあの5人を相手に。

どれ一つとっても勝っている箇所が思いつかなかったほどに圧倒的だったあの5人を相手に。

アイツは、勝利したのである。

（水野悠……アレを、越えないといけないのか……!!）

冷や汗が頬を伝う。思わず笑いが込上げる。

しかし、そのような理不尽で怖気付くような弱腰はここにはおらず。

最高の獲物を見つけた狩人が如く。

ストライカー（エゴイスト）達は、水野を標的に定め、好戦的な笑みを浮かべていた。

「絶対、俺が喰うッ!!」

ゾワリ、と水野に悪寒が走った。

◇◇◇◇◇

【悲報】俺、貞操の危機。
語尾に♡が浮かんでいそうなやつからの急襲をとりあえずあしらった後に事件は起こった。モニターに写ったカッパからの一言。
「そいつはこの中じゃお前を満足させられる可能性を秘めている一人だ、水野悠……今は相手にならないだろうがな」
その言葉の意味が、最初は分からなかった。アイツは何を言ってんだ？　満足？　なんの話？　監獄に娯楽品なんてあるわけないし、サッカーは労働っていう形になってるし、他にそんなもの……。
……まさか。
突如脳裏に過ぎった一つの可能性。いや、待て、落ち着け。そんなことあるはずがない。流石に有り得ない。あのカッパが性格終わってるカスだとしても、そんなわけないだろ。
そんな――――「性的に満足する」、なんてこと。
うん、有り得ないな。だってこいつ、敵意バチバチだっただろ？　だから蹴りに来たんだろ？　ねぇ？　そうだよね？　なんか言えよ？　語尾に♡着いてそうだったとはいえ、流石に……。
というか、俺はノーマルだし？　全然お断りですし？　別に否定するつもりは無いけど、押し付けられるのはちょっと困るし？　普通に迷惑だし？　まじで僕は違うんです。
そういうことで、無理です。そもそも土俵に上がってないので。
「話にならない」ので！　たとえ俺の事気絶させてから美味しく頂こうとしてる奴がいたとしても、僕はノーマルなので!!
ん？　なんか来た。
「俺は眼中に無いってか？」
オワッタ
「絶対、俺が喰うッ!!」
ヒェッ
氷織、二子!!!　早く帰るぞ!!!　ていうかなんで笑ってんのお前ら!!!

ゾワゾワッッッッッ

暇つぶしにボールを足で玩ぶ。なんてことは無いリフティング、ドリブル、シュート。ただ決めるだけでは面白味も無いので、ゴールポストに当て続ける。毎回同じ場所に当てるのではなく、角度を変えて、ボールの落下地点をランダムにしそれを予測して先回りし、また別角度からポストに当てる。なんてことは無い。やろうと思えば誰でも出来る遊びだろう。

左もたまには使うが、利き足では無い右で基本蹴り続ける。何故か動く障害物や、いつぞやのブルーノも参戦してきていた。連続殺人鬼に慈悲は無い。顔面スレスレでゴールに突き刺した。ビビれ、犯罪者が。

どれほど経過しただろうか。大して息が切れた訳では無いが、気持ち的にため息を零す。用意していたタオルは、汗ひとつかかなかったことから不要となり、残念そうにくたびれているように見えた。

――――嗚呼、まただ。

視線を向けようとは思わない。向けたら負け、というか襲われる。僅かな警戒心と貞操の危機を感じながら視界の隅に映る野獣に意識を向ける。

双葉のようなアホ毛を晒し、そのチャームポイントを全消しするほどに鋭い眼光。まるで獲物を前にした肉食獣が如く、俺(尻)を見て口角を上げている(見てない)。

まじでヤバい。

普段の食堂などでは大してそんな反応を見せないのに、俺がボールを扱っていると決まってあいつは現れる。あれか、汗も滴るいい男ってか？　まじでやめて欲しい。お前のフェチは聞いてない。

双葉が居ない時も別のやつが俺の事を見てきやがる。あの褐色サイコが飛びかかってきた時は本当に死を覚悟した。主に俺のケツの。今の俺のオアシスは二子と氷織のみ。一生そばにいて欲しい。

先日謎のチーム分けをされ、問答無用で高身長な肉食獣と組まされ絶望していたところに、追い打ちをかけるように双葉も俺のチームに

加わっていた。救いは氷織。二子、なぜ俺を見捨てた。肩が震えていたことを俺は見逃していないぞ。次試合で当たったらボコってやる。
視線が合う度に俺を睨みつけてくる下まつげと、俺の尻を追いかけてくる双葉。なぜこうなってしまったのだろうか。
あと少しで試合が始まってしまう。なぜ急にチーム分けをしてサッカーをさせるのか検討もつかないが、問題はあの双葉がチームメイトということ。下まつげは恒常なので諦めは着いたが、双葉の瞳のギラ付き方は群を抜いている気がする。憂鬱だ。誰か助けて欲しい。
はぁ、とため息を短くこぼす。目をつぶって双葉が視界に入らないようにしつつ、ちょうど足元へと戻ってきたボールを今までよりも強めにポストへと当て、ボールが集められているカゴへと戻した。
「氷織。背中は任せた」
「ん、背中？　……ああ、そういうことね」
なんで一試合目から双葉が来てんだよマジで。氷織という名のセコムがいなかったらマジで試合放棄も吝かではなかった。
「刺されへんように気ィつけや」
「おいやめろ、変な想像させるな。ヒュッてなったぞ」
氷織の言い回しは悪意があるような気がしてならない。双葉の根っこが俺の難攻不落のお城にこんにちわってか？　笑えないぞマジで。お前は肩揺らして笑うな？
あと、相手チームもクセがすごいんよ。
俺の顔見て、非凡非凡って連呼してるやべぇ奴と、触覚と褐色の黒ギャル男Ｖｅｒ．。めっちゃニヤニヤしてるのが怖くて仕方がない。
あとは、一応味方チームの下まつげ殺意バシバシが横にスタンバってるが、さっきから無言でこっちを眺めては舌打ちの嵐。生きてて楽しいんかこいつは。一瞬視線を向けて目が合ったから直ぐに逸らしたら殺意ましてやがるし。
何より、背後から突き刺さってくる視線が痛いし痒いし気持ち悪いからやめて欲しい。特に双葉。目ガンギマリだぞ。
「何点先取だっけか」
「五点やね」

「おけまる」
「頼りにしてんで水野くん」
「氷織もな」
　軽くやり取りした後に、氷織はポジションへと戻っていく。本当なら一生隣にいて欲しいまであるが、まあしゃーない。横にいる男前からの視線は無視してできるだけ関わらないでいたい。
「おい」
　無理でした。
「その余裕そうな面、直ぐに剥がしてやるよ」
　どゆこと？
「お前のプレーも、ボールも……何もかも、俺が喰いつくしてやるよ」
「……お前が？」
　いや、いやいやいや。急に「美味しく頂きます（意味深）」宣言すんなよ。股間が寒くなるだろうがよ。そういうのは双葉でお腹いっぱいなんだよ。いやあいつにも喰わせねえけど！　俺は！　ノーマルなので!!
「その前に、後ろ気にした方がいいぞ」
「あ？」
「俺を喰う前に、お前が喰われるだけの話だ」
　見てみろ、お前。双葉の奴、俺だけじゃなくてお前にもアッつい視線向けてやがるぞ。警戒しろ、マジで。こんな閉鎖空間で男同士のヤリトリなんか需要ねぇから！　俺を巻き込むな！
「……舐めやがって」
　舐められそうになってんのお前だから!!　物理的に！
　氷織！　爆笑してんの見えてっからな！　「ブフォッ」ってやめろ！
　あ～、マジでこの空間から早く出なければ。一応サッカーコートということで広さはあるが、四方八方を囲まれた閉鎖的空間は、そういうことにはもってこいのやっべぇ密室となっている。
　五点決めたら出れるんだよね？　よし、一点もやらねぇよお前ら、時短だ時短。

試合が始まる。俺へと渡されたパスを、誰に渡すでもなく真っ直ぐに走り出す。
「うっそォッ!?」
笑顔で飛びついてきたガングロギャルを無視して抜き去り、なんかヌルヌルした動きで駆け寄ってくる誇張した関西弁野郎が伸ばしてきた腕を難なく振りほどき、止まることなく進み続ける。
後ろの情報はカットしていい。前方三人。これで全部。後方の二人は俺に追いつく脚力は無いから放置していい。左に氷織、パスを意識させるために一瞬視線を氷織へと向ける。俺の視線に気づいた相手の一人が動きをとめ、パスを警戒しヘルプへ飛び出せる位置をキープした。これであと二人。
長髪サラサラのお嬢様みたいなやつは筋肉の付き方的に脚に自信があるのだろう。だから俺はあえてそのお嬢様がいる方へと走る。少し遠目の位置にいる相手はやはりスピードタイプであり、あの時の坊主と同じく一歩の歩幅が大きいタイプであり、大げさに右へと切り返すと相手は一歩で追いすがろうとする。
「〝ロック〟」
歩幅が大きい……それ即ち、股下からボールを通す選択肢が強く当てはまる。右に切り返した俺についてこようと、相手が足を開いた瞬間に、右足のアウトサイドで回転をかけながらシュートを股下に放つ。
目を見開いて股に視線を向け、ボールを追うように視線を後ろへと向けた相手の姿を見ながら、シュートを放ったのだからゴールが決まるという当然の結果をゴールネットを揺らす音とホイッスルがコートに響くのを聞き取り、特に喜びの感情をうかべることなくスタスタと自陣へと帰る。
視線が痛い。双葉と殺意まつ毛からの視線が怖い。すんごい見てくるやばい助けて欲しい。俺は救いを求めて反対側にいた氷織へと駆け寄った。
「相変わらずえっぐいことすんなぁ」
「氷織助けてまじであいつらこっちめっちゃ見てくる貞操の危機」

「はいはい。僕にもパスちょーだいな」
ていうかリスタートおっせぇよ!! 早くボール用意しろやブルーノ!! てめえ何サボってんだよぶっ潰すぞッ!!! こっちは貞操かかってんだよ!!!

◇◇◇◇◇
俺たちは、考えが甘かったのだと再認識された。
モニタールームで何度と繰り返してみた、世界選抜戦。
最後のチーム……つまり、水野が属する、ブルーロック側唯一の勝利チーム。
震えた、恐怖した、歓喜した。
俺たちが弄ばれることしか出来なかった世界選抜を手玉に取る、圧倒的プレー。当然のように行う神がかったシュート、ドリブル、ディフェンス。
あんな奴が同世代にいることに恐怖した。そして歓喜した。俺も、そのステージにあがりたいと。そんなやつと、サッカーができることに喜び、滾った。
ああ、そうだ。俺は水野のことを何も知らなかった。
映像を見ただけで全てを知ったつもりでいたんだ。
……今なら、俺がどれだけ楽観的な考えだったのか、死ぬほど理解できる。
「……クッ、ソがッッ」
ゴールネットを揺らし、無情にも響く電子ホイッスル。映し出されたモニターの数字がまたひとつ、加算されていく。
凛が、歯を食いしばり殺意の籠った視線を向ける。その凛には、疲れた様子はなく、汗ひとつ見えていない……それは俺も同じか。
汗をかくのは相手チームだけ。俺たちは文字通り、何一つさせて貰

えていない。
――俺たち、チームＡの三点目の得点は、やはり水野のゴールで決まった。
「――――ははっ」
ああ、面白い。なんだあいつは。ここまで差があるのか。
俺達が全く必要とされていない。というか、あいつについて行けるヤツがいない。凛でさえ、水野が見る景色を見れていない。
パスが回ってこない……当然か、その必要が無いから。むしろボールを奪われるリスクの方が大きいのだろう。
何も出来ない。自分を主張する機会さえ与えられない。極論、寝ていてもこの試合は勝つ。そう、勝てるんだ。
「……ふざけんな」
自分に苛立ちが覚えた。俺は何も出来てない。必要じゃない。だから俺はひたすらに水野を見て、見て、見て。そして出した結論は、『理解不能』。
チームＢの誰一人として水野を止められない、眼中にすらない。水野がボールを持った瞬間、ゴールが確定するような理不尽な錯覚を覚えるほどに、あの怪物は俺たちの常識の外側に位置していた。
分からない。何が凄くて、何をしてるのか。どんなテクニックを使ってるのか、なんでコート上の情報を把握出来てるのか、どうして視線を向けずにパスを受け取れるのか。
人間、理解ができない存在を前にすると、恐怖というか、怯えというか。形容し難い気持ち悪さに身体が震えるのだと学んだ。
今の俺に……いや、水野以外のストライカーに、何が出来る？
既にここは水野の独壇場だ。凛でさえ、踏み込むことの出来ない舞台が出来上がってる。水野が一人踊り、舞い、魅せられるのを俺たちは指をくわえて眺めているだけ。
俺はこの一回のチャンスで俺というストライカーをアピールしなければならない。それが日本代表と試合をするメンバーに選ばれる条件。このまま何も出来なければ、選ばれる確率は格段に下がる。
俺に何が出来る。水野をもっと観察……いや、無理だ。あれは無理

だ。あの埒外のバケモノをこの短時間で読み取ることなんて不可能だ。無理なものに縋るな。
探せ、探せ。ヒントを探せ。他に何かないのか。なんでもいい、誰でもいい。いや、このコート上には既に水野以外に目立ってる選手が居ない。誰もが水野に呑み込まれてる。ダメだ、見つからない、鍵が、光が何も無い。強すぎる光に全てが意味をなさない。
「……いや、待て」
ぐちゃぐちゃになった思考に、淡い光が差し込んできたようにかんじ、ハッと頭をあげる。そこに移るのは、疲れた様子も見せずなんということのないように立つ水野……の、隣。
「ナイスパス。眼の使い方上手くなってるな」
「アイコンタクト以外で周り見いひんキミに言われてもなあ……」
水野や二子と同じチームだった……氷織。
そうだ、氷織だ。あいつだけが水野の動きについていけていた。正確なパスも出せたし、何より、氷織のことを相手は止められてない。
水野という圧倒的なまでの光に照らされて存在感を薄めていた、超重要ファクター。
試合が再開される。見ろ、見ろ。水野に着いていける唯一の存在である氷織に着眼点を向けろ。氷織は水野を見てる。けど、意識してる程度だ。水野に合わせてるようには見えない。
あいつと俺の何が違う、何をしてる、何を考えてる。
あと二点だ。この一点で鍵を掴み取れ。じゃないと俺は何も残すことなく試合が終わる。
瞬きさえ無駄だと、氷織のプレーに集中した俺は瞬きという行為を放棄する。
読み取れ、俺のゴールまで導く指標。度肝を抜け、ここにいる全員の思考を越えろ！
見て、見て、見て、見て……そして。
「――――あ」
俺は、ゴールの方程式が生まれようとしている予兆を感じ取った。

「氷織と二子はスタイルが似てるな」
「いや、僕の方が細っちいで」
「髪型も違いますしね」
「いやそのスタイルじゃなくてプレイスタイルね」
　試合相手が見つからず、自然と練習時間が増えていた、そんな彼ら3人での練習での一幕。
「二人とも、『眼』が良い。それは武器になる、けど使い方が惜しい」
　今までも、何度もアドバイスを水野から受けてきた二人は水野の言葉を噛み締めるように聞きの姿勢に入る。
「中心視野の割合がちょい多いな。周辺視野を9割9分にするくらいの意識にして欲しい」
「周辺視野って、あれか」
「ぼやけた外側の部分、ですね。まあそれが理想なんでしょうけど」
「ムズいわなあ」
「でも、それが出来たら常に最適解を叩き出せる。相手の綻び、理想のプレーを求める選手の行動を予想出来れば、パスカットは楽勝だ」
　そう言いながら、水野は指で自分の目を指しながら言葉を続ける。
「二つの目だけじゃ賄いきれない情報もある。常に更新し続けろ。誰が何をしてるのか、何をしようとしてるのか。穴は、危険な場所は、味方が求めるコースは、自分が気持ちのいいシュートが打てる地点は何処か」
　そして、足元にあるボールを指さす。
「ボールに意識を奪われるな。コート上で1番存在感のあるものはボールだ。他者が持ってる時は意識を向けつつ周りを見て、自分が持つ時はボールは無視しろ。足元に目を向けるな、平行よりも上を向け。ボールなんか、勝手についてくる」
　壁に当たっていたボールがちょうど水野の後ろへと転がってくる。それを見ることも無く、足を軽くあげてボールをすくい上げ、両手で

抱えると人差し指の上で回転させた。
「俯瞰しろ。自分を含めて、コート上にいる全ての人間を操る第三者になれ。試合を動かしているのは自分だと自覚しろ。お前の理想のプレーを実現するには何が必要なのか、どう動けばいいのか、誰を利用すればいいのか、考え続けろ。お前らには、その『頭』がある」
「なるほど……」
「水野くんは、そんな膨大な作業をしながらプレーしていたんですか……」
　考え込み、そして納得の色を見せる二人は今後の方針を定め、その難易度の高い作業を何食わぬ顔で行っていた水野に感心を見せると、水野はキョトンと二人を見つめ、首を振る。
「いや、俺はまた別のやり方だけどな」
「へぇ、どんなことやってんの？」
「頭の中で試合を進める」
「ほー……ん？」
「まず、最初に全員の選手のある程度の実力とか癖とか予想して、パラメータを作るだろ？」
「「ん？」」
「んで、そいつらが動くであろうルートとかを頭で組み上げて、リアルタイムで試合を頭で進める。視点は上からな」
「「ん？」」
「まあ細かいミスとか、不規則な動きは随時更新して、現実と脳内での試合を近づける」
「「……」」
「あとはまあ色々やってるけど……ん？　どした？」
「「キッショ……」」
「どストレートだな、おい」

◇◇◇◇

（いやあ、おもろいわ、この眼の使い方）
一点に囚われることなく、首を振って視界に入る全ての情報を取り入れる。周辺視野を利用し、氷織はコート状況の全てを把握しながら最善手を模索し続けていた。
（まだ慣れへんからめっちゃ疲れる……情報過多で頭爆発しそうにリアルで感じたのこれ使い出してからやな）
情報を更新し続ける。俯瞰するだけではなく、自分のプレーも全うする。
水野からパスが渡る。それを受けとり、極力ボールに意識をさかれることなく、さらに情報修正と最適化を施す。
体よりも頭が疲れている感覚が新鮮で、こんなサッカーは過去にはなかったと、柄にもなくはしゃいでいる自分に苦笑する。
（サッカーなんか、僕にとっては鎖でしか無かったんやけどな。サッカーが楽しいなんて気分、何時ぶりや）
親からの期待と重圧。何処か諦め、親から逃げ、サッカーを辞めるために来たブルーロック。
もはやサッカーをするのに理由なんてなくて、楽しむなんて気持ち、失っていたと思っていたのに。
（……こんなん、辞めれるわけないやん）
楽しさを知ってしまった。親からの避難所としか思っていなかったブルーロックで、生き残る理由を見つけてしまった。鎖に繋がれた腐ったゴミ箱から、拾い上げてくれた光が居た。
ああ、彼のせいだ。彼によって、自分は今までとは真反対の自分にまで変えられてしまった。もう戻れない、戻ることなんてできやしない。彼のせいだと、自分を正当化して、氷織は進み続ける。
水野のように、完全にボールを見ないプレーはまだ出来ない。どうしても少し意識をさいてしまうし、気づけば視野が狭まっている。
難しい、楽しい、心地いい。
簡単なゲームは、氷織にはあわず、ハードな初見殺しのような、クリアできるかも分からないギリギリの難易度が性にあっている。
「……ふはっ」

本当に楽しい。ここに来てから……彼にあってから、大嫌いだったサッカーが楽しくて仕方がない。彼とするサッカーが、これほど楽しいと感じてしまうとは思わなかった。

氷織の不完全なゲーム掌握。しかし、氷織が描く理想のプレーのルートには、必ず彼が居てくれた。

待っている、彼がパスを待っている。今まで両親に向けられてきた『期待』と似通った『期待』なのに、嫌な感じが全くしない。

（ああ、応えないと）

パスを出す。弧を描いたそのパスは、密集地から難なく抜け出した水野へと吸い込まれる。必要じゃないのに、顔を氷織へと向けた水野は、軽く頷きを見せてすぐに前を向く。

（あ～……気持ちいいなぁ）

どうして、彼とするサッカーはこんなにも心地がいいのだろうと、氷織はふわふわとした心持ちで考える。

ラスト一点。四点目は氷織が決め、それ以外は全て水野が決めた。相手チームからは一点も奪われることなく、試合は最終局面へ。

汗を流し、ギラついた目で水野を追う相手を、氷織は面白そうに流しみる。予想通り、誰も水野を止めることなんて出来なくて、数の暴力とでも言うように水野の進路を塞ぐ。

（予想通り、やな）

右サイドで足を止めた水野を見て、氷織は水野へと視線を向け続けて前へと走る。ぽっかりと空いたスペースは氷織が思い描いたシナリオ通り。水野と同じ道筋を見ていると信じ、終着点が自分であることを疑わない。

（水野くんやったら一人でも決めれるけど、今の場面はフリーの僕が決めるのがベター。これが最適解で、水野くんも分かってるはず）

さあ、来い。そう瞳で訴える氷織へと水野は視線を向け、視界が交差した直後に水野は右足を振り上げる。早すぎるパス選択に相手は動くことは出来ず、パスの軌跡を眺める。

「最高やで、水野くん」

口角が歪む。嬉しさが駆け巡る。彼から必要とされてることが何

より嬉しい。
期待されている。見てくれている。普段の馬鹿みたいな彼からは想像つかない頼もしさに「これがギャップ萌えか」と馬鹿みたいな思考に陥る。
「――何勝手してるんや、氷織ィ」
「っ、まじか」
自身へと向かうパスを待ち構える最中、不意に耳へと流れ込んだ聞きなれた声にビクリと肩が震える。
「烏……!!」
「見やん間にこんな非凡なってるなんてなあ……でも、詰めが甘いわ」
やられた、と想定を覆されたことに驚きを隠せないままに、気配を消しきった烏が意識外から氷織へと追いつく。眼の使い方を教わったとは言え、技術面に関しては水野からの指導があれど一日二日で急成長するものではなく、純粋な技量では烏に勝てないことを理解していた氷織は舌打ちをこぼす。
ダメだ、この状況を覆す一手が浮かび上がらない。最後の最後にしくじってしまったことに、氷織の顔が歪む。この一本を取られたところで勝ちが揺らぐことは無いものの、氷織からすれば自分の描いた勝ち筋を覆され、否定された。何より、水野からの期待を踏みにじってしまうことに、苦虫を噛み潰したような表情をうかべる。
なにかないかと、じき迫るボールへと視線を向け……違和感を感じとった。
（高い……僕も烏も届かん……僕じゃ、無い……？）
あの水野がミスをするはずがないと思いながら、明らかに自分へ向けられたものでは無いパスに首をかしげ、唖然とボールが向かうであろう位置へと視線を向ける。
「……は？」
そこに居たのは、同じチームになっていた潔世一。彼はギラつかせた目でボールを収めると、トラップすることなく直接シュートを放った。狙いすませた位置取りにより放たれた正確なシュートは真っ直ぐにゴールの角へと向かい、ブルーロックマンの飛び込み虚しく、

ゴールネットを深く揺らした。
「潔、くん……？」
ゴールを決めたその男に、呆然と見つめる。潔自身、今のプレーに驚きを隠さず、自分が行ったことを手や足を見ながら言語化しようとしていた。
何かを掴み、喜びを浮かべガッツポーズを取る潔と、何も出来ずにフラストレーションが溜まるばかりの機嫌が悪い凛。
振り返る。何故か荒くなっている息を整える暇なく、氷織は水野がいた右サイドへと視線を向ける。
当の本人は、潔の様子を見て、何処か面白そうに微笑を浮かべると特に何をするでもなく、扉へと向かった。
「……あ、え」
視線を向けられなかった。今までのように駆け寄ってこなかった。体にどデカい虚空が出来上がったような感覚を氷織は感じ取る。
「僕じゃなくて……潔くんを、選んだ……？」
それは、最適解だったのだろう。冷静な頭の氷織であれば、烏に付かれていた自分よりも潔に出した方が理想的だったことに氷織は気づけただろう。
しかし、今の氷織は違う。脳が正常に作用しておらず、アドレナリンの栓が外れたようなそれは、氷織のテンションをバグらせた。
結果。
「――――――――は？　」
一時的に、やっべぇメンヘラが爆誕し、水野の背筋が凍りついた。

お、双葉いい位置取ってんじゃん。
流石に氷織と俺だけの試合みたいになっちゃったし、氷織もまだ眼に慣れてないなぁ。なんかヌメヌメした殺し屋みたいなやつが氷織に迫ってる。おら、受けとれぇい！

試合終了のホイッスルが鳴り、双葉へと視線を向けると、ギラギラしてた目はどこかへ行って、なんか子供みたいにクリンクリンな瞳が嬉しそうにガッツポーズしていた。うわ、初めて見たかもしれない。

二・重・人・格!!

な――ーるほど、試合中は『もう一人の僕!』が暴れ散らかしてしまうのか……今の双葉は初めて見たかもしれん。つまり今の奴は安全、近寄ってよし！　オモロ!!

よしっ、まつ毛からの視線は変わらないし、さっさとかーえろっと。

ゾワゾワッッッッッッッッッッッッ

今世紀最大の悪寒を感じた気がした。気の所為？　あれ、氷織どこ行った？

癖が多い友達ってキャラ濃いよね

青い監獄（ブルーロック）――――なかなかに面白いことをやってんなと、パスポート更新のために帰国していた俺は関心を抱いた。

世界一のストライカーを生み出すために大多数を犠牲にして最強の1を生み出すプロジェクト……頭がいかれてる俺好みのものだった。

何やら、日本のU－20代表とブルーロックが試合をする、そこに日本代表として参加してくれと、フットボール協会の銭ゲバから勧誘が来たとマネージャーから聞いた。

全くそそらなかった。日本代表のストライカー達を見ては見たものの、はっきり言ってクズの集まりだ。大した実力を持たず、何より熱を感じない。ゴミ以下、ストライカーとして持つべき最低限の資格を持ち得ない連中に、俺はパスを出さない。出す価値がない。

ブルーロックの連中と……何より、あいつと試合ができるからと招集に応じはしたが、こんなクソみたいな舞台であいつと踊りたくはなかった。

……そうだ、アイツだ。ブルーロックの連中のデータや映像を眺めていた時、アイツの姿が見えた時、俺は柄にもなく目を見開いて止まった。

その時の衝撃はどんなものだっただろう……いや、思っていたよりも驚愕はしなかったのかもしれない。ただ……そう。

――――やっと見つけた、と。

「フォ……FWが気に入らないんだね糸師　冴くん？　だったら誰か新しく招集していいよ？」

ちょうど断りを入れにわざわざ狸がいる場所へと足を向け、辞退の旨を伝えると、太ったジジイがそんなことを言ってきた。

「……誰でもいいんだな？」

俺の返答に、狂ったように肯定してくるジジイを見て、俺は僅かに口角を歪めた。

――――本当は一度、お前とは敵として試合してみたかったんだ

が。
――――こんな舞台も用意されてねぇところで踊ってもつまんねぇよな。
――――凛も、少し興味が湧いたあの触覚も、呼んだところでお前とやり合うには役不足だ。それこそ、世界トップの連中じゃねぇと、話になんねぇ。
――――じゃあ、こうするしかないよな。
俺は望む選手の名を口にすると、銭ゲバ狸は少し不満気な表情を一瞬うかべるも、俺の機嫌を損ねないように気色の悪いにやけヅラを見せながら手を叩いて了承の意を見せてきた。
嗚呼、懐かしいな。
レ・アールからの誘いを受けて単身スペインに行って、世界の広さを思い知ってなお、のし上がってやろうと躍起になっていた時の俺の前に、突然現れた同じ日本人。
『誰だてめぇ』
『純粋無垢な紳士で清楚なジェントルマアアアアアンですが？』
『は？』
一年少しと、暇な時はサッカーをした数少ない友人。
俺が、俺のパスで王にすると決めたストライカー。
――――俺が『世界一のストライカー』の道を諦めることを決めた決め手。
「――もう逃がさねぇよ」
なんの断りも入れずに俺の前から消えたんだ。
――――俺が何しようが、文句は言わせねぇぞ、クソ勘違い野郎が。

◇◇◇◇
「へっくしゅん」
「え、何その棒読みなくしゃみ」
「いや、なんか噂されてんなと思って」

「それは自然と出た後に言うセリフでしょ？」
特にすることの無い、しかし時間的に昼飯を食べようということで食堂へと向かうと、氷織がいたので同じ席で食べることにした。
そして突然「くしゃみをしなければ」という使命感に駆られた俺は、出るはずもないくしゃみを言葉で再現したところで、俺を見捨てた二子が久しぶりに姿を現した。
「あ、裏切り者」
「開口一番それですか」
トレーを俺の前に置き、二子自身も席へと着く。どうやら生姜焼き定食のようで、タレのいい香りがこちらへと届いて食欲が湧いてきた。なんで監獄でこんないい飯出てくんだ？
「なんですか、人の食べ物ジロジロ見て。あげませんよ」
「要らねえわ……いや、やっぱ欲しいかも」
「あなたの方が豪華でしょう……え、伊勢海老？　なんで？」
「知らん。勝手に出てきた」
何故か俺の料理は他と比べて圧倒的に豪華であり、かつ取りに行こうとした時には既に用意されている。待ち時間もなく、常に出来たての料理を食べられるのだ。いや、怖いわ。なんでいっつもすぐ出てきて高級食材並んでんだよ。俺も生姜焼きとかでいいんだが。
というか何が怖いって、俺の行動を把握しているかのように出来たてがノータイムで出てくるのがこっわい。作り置きでも無さそうだし、四六時中俺の事見てるようにしか思えな……はっ!?　こ、これはまさか、「四六時中お前のことを見ているぞゲヘヘヘ」というカッパからのメッセージであり警告なのでは……!!　こういう地味な行動で私生活を見張られているという精神的苦痛を与え続ける気色悪いことこの上ない作戦をとってやがるんだっ！　ちっ、日の光を浴びたことの無い河童が生意気なっ!!　結構ダメージ来てるぜ！　のり弁食わせろ！
「あの」
「ん？」
今もこちらを観察しているであろうクソ河童に内心中指を立てて

いると、食事を始めたばかりの二子が箸を止めてこちらを見ていた。
いや、俺と氷織を見てんのか？
　何やら言いにくそうな、戸惑っているような微妙な声をこちらにかけてくる。
「いや、勘違いかもしれないんですけど」
　なによ。
「……なんか、二人距離近くないですか？」
「何言うてんの二子くんそんなことないやろ？」
「「早っ」」
　なんてことないかのようにいつも通りの表情でそう返答する氷織のあまりにも早すぎる口運びに俺と二子は思わずつっこんでいた。すげえ、表情変えずに口だけ動かしてたから余計にその速さが際立っている……赤ちゃんなら見逃してたね。
　二子から言われ、俺は右隣にいる氷織へと視線を……いや近っ。なんか食ってる時にたまに肘当たって申し訳ないなぁとか思ってたらお前が近寄ってたんかい。自然すぎて気づかなかったわ。
　と、俺の視線に気づいたのか、氷織がこちらを見上げ首をこてんと傾げながらキョトンとして目で見てくる。猫か。いや犬か……どっちでもいいんだよ。
「どしたん？」
「いや、確かに近いなぁ、と」
「？　……あ、ほんまや」
「結構時間かかってましたね」
「それある！」
「気持ち悪いんでその返事二度としないでください」
「すんません」
　髪で目が見えずらくとも、雰囲気でガチドン引きしてるのがわかる二子の返しに少し悲しみを覚えつつ、いつもより距離が近く食べずらいこともあり、椅子を横にずらし距離をとると俺の右腕を凄まじい速さで氷織が掴み……いや、握りしめた。力強っ！
「なんで僕から離れようとするん……？」

「「怖っわ……えぇ……」」
目がキマッていた。なにか不穏な空気を感じる。握る力は衰えることなく増すばかりで、ドロドロの闇を内包した瞳は瞬きすることも無く俺の双眼を射抜き、何故か口元が歪な形をしていた。もう一度言おう。怖っわ。
骨が軋む音を聞きながら、助けを求めるように目の前で俺と同じ恐怖を感じていた二子へと救いを求める子羊のような潤んだ瞳で訴えかけようとした。二子は生姜焼き定食を食べ始めていた。おい。
「他人アピールすな」
「他人ですから。自分で蒔いた種は自分でどうぞ。うまっ」
「俺も被害者だろ。誰だよ氷織をこんなのにした奴出て来いや。うわその玉ねぎ美味そっ」
「自覚無し、と。最低のたらし野郎ですね、刺されても知りませんよ。玉ねぎうまァ」
くそっ、美味そうに飯食いやがって……!! 俺もご飯食べたい！
でも腕使えない！ 本気で離してくれないかな。ていうか氷織なんでこんなになっちゃったの？ 双葉と同じ二重人格なの？
「おっ、二子、隣いい？」
「うわっ、面倒くさくなりそうな予感」
「酷くねっ!?」
悲鳴をあげる腕にしがみつく手を引き剥がそうと強行突破を決めたところで、オフモードの双葉が二子の隣……つまり氷織の前へと腰掛けた。
お、今日はそっちの双葉か！ 話わかる方な！ 俺のケツ狙わない方な！ よしっ、安全世一くん！ 助けてください！
「えー、と。どういう状況？」
俺と氷織を見て困ったように頬を掻きながら双葉……潔（オフモード）が疑問を二子へと投げかける。問いを受けた二子はどういう判断をしたのか、席を立たないまでも、少し椅子を下げて俺たちから距離をとる。逃げるな卑怯者！
「えと……水野、と氷織……で、合ってるよな？」

「ああ」
いやほんとごめんね？　分かんないよねこの子？　俺も分かんないの助けてほんと。トリセツトリセツ。
「あ、名前わかんないか。俺は」
「知ってる。潔世一だろ？」
そう言うと、潔は何故か驚いたように目を丸くしてこちらを見てきた。いや、お前ほどインパクトのあるキャラしたやつ忘れるやつの方がいないだろ。二重人格だぞ二重人格。しかも落差激しいやつ。
「あの試合で一番印象に残ったのがお前だからな」
「うわ顔っ」
俺のケツに狙いを定めてギラついた目を見せたかと思えば、急に動きが良くなって「サッカー楽しいっ！」て感じのサッカー少年の姿も見せてくるキャラぶれぶれなやつがいればそりゃ頭に残るわな。
前にいる二子がびくりと肩を揺らしこちらを非難気味に見つめてくるのを感じながら、俺は努めて右に視線を向けないように試みる。いや、だってなんか黒いオーラ感じるもん。なんでか知らないけど箸が悲鳴をあげてる音聞こえるもん。ほんとなんでか知らないけど見ない方がいい気がした。あー、海老味噌ウマー。
不気味で重苦しい圧を感じつつ、海老の身の甘みと味噌の苦味のハーモニーを口内で大演奏していると、潔が何やら少し浮ついた声でこちらに話しかけてきた。
「俺、実は水野が一人で練習してるとこ何回か見てたんだけどさっ」
知ってる。
「俺も一緒に練習してもいいか？」
「ぐっ……巻き込まないでくださいホントにっ！」
遂に耐久に限界が来たのか、プラスチック製であろう箸が無惨にもへし折れた音を右耳が捉え、席を立とうとした二子の足を踏みつけてその場に留めようとすると珍しく焦ったように早口にこちらへと非難の声を向けてきた。
「ご飯を食べ終わってから席を立ちなさい」
「今食欲無いんでというか食べてる余裕無いんでっ」

「ちなみに俺は食べ終わりましたご馳走様でしたさようなら。潔、練習ならいつでも来てくれていいぞ。あ、お前が来いよ？　あっちは要らないから」
「マジかっ！　よろしく頼むわっ！」
「逃げるな、卑怯者ッ!!」
「あっちは要らない……僕は、イラナイ……???」
「違いますからいつも通りの解釈でいいのになんで変なスイッチ入ってんですかこの人ダルッ!!　氷織君、それ部屋戻って冷静になってから羞恥心で悶えますよっ!!!　戻ってきてくださいっ！　元凶は僕が頭叩いときますからっ！」
　それ以上この場にいてはいけないと、本能が全身に避難勧告を告げてきたために自然な動きで席を立ち、食器を戻しに行く。
「潔……潰す……お前だけは１００％殺す」
「エッ!?　なんで!?　俺なんかした!!?」
「氷織君、それキミのセリフじゃない気がします！　あと早いです時期がっ！」
「お前も何言ってんの!?」
　あー、今日は気分がいいなぁ。なんだか体が軽い気がするし。アイツらも仲良く出来そうで良かった良かったぁ！
　後ろから聞こえてくる氷織の殺意の籠った呪言、潔の戸惑いの声、そして二子が頭を抱えて苛立ちの声を向けてきているのを正確に聞き取りながら、しかしあくまでも他人のフリをしてスタスタと歩みを紡いでいく。
「……チッ」
　途中ですれ違った下まつげ殺人犯から強烈な舌打ちを頂いたので、下まつげが似ている冴を脳内でボコボコにしておいた。反撃を食らって頬が痛い。まあ想像だから痛みはないんですけどね？
　３チームに別れて総当りの試合を何回か繰り返すという意味不明な儀式が終了した。とりあえず全勝しておいた。なんかくれるんかな。

試合中に下まつげが苛立ちと殺意と憤怒やらが篭もりに籠ったギラッギラの目を向けてきたので、何回かアシストで点を入れさせたら、その度にさらに殺意を膨らませて遂にはヨダレを垂らしながらサッカーをし始めた。シャブシャブしてんじゃねぇよ。

そして、儀式が終了して数日。俺は何故か、諸悪の根源である河童から呼び出しを食らった。いや、放送の声はアンリさんなんだけどね？　裏にあいつがいる気配プンプンなのよ。

潔と二子、氷織達との練習を切り上げ、二子からの救いの表情をガン無視しながら廊下を歩く。空調が行き届いていることもあってか、今は季節的にも肌寒いだろうに、この監獄は気温変化が全く感じられない。

というか、全部屋自動ドアって、何？　どこに金使ってんだよバカか。ちょっと近未来的な開き方するし、モニターとかＡＲ完全が否めない。ちょっとテンション上がっちゃいました。

そんなこんなで妖怪のいる部屋の前に到着。さて、どんな煽り文句を言われるのやら。なにか装備を持ってきた方が良かったかね。男色の趣味があったら俺の身が危ういからな。アンリさんという女性がいながら俺たちを見てニヤニヤしているのはきっとそういうことなのだろう。革命を起こすとはつまり、性差をぶっ壊すということなのかもしれない。やり方間違ってるぞ。

さて、入るかというところで異変に気づく。部屋の中の気配が三つ。三つ？　河童とアンリさん以外に居たっけか、看守かなんかか？

直前でとめた手にセンサーが反応し、意図せず扉が開く。そこに居たのは高そうな椅子に深深と座り込み、足を組んで両手を顎の下で交差させる変態と、その傍にタブレットを携えて佇むアンリさん。そして……

「――――待ちくたびれたぞ」

外の気温を感じさせるように着こなしているコート。髪は赤に近い焦げ茶色で、バッシバシな下まつげをつけたデフォルトで表情が死んでいるイケメン。身長は俺より少し低く、しかし何故か見下ろすよ

うな姿勢を保っているのはもはや才能だろう。
あと、尻フェチ。
「あ、冴じゃん」
海外で1年少ししか交流しなかったにもかかわらず、俺の中に多大なインパクトを残した敬語を知らない男（俺より年上）。
サエサエがそこに居た（苗字知らない）。
何故、こいつがここに居るのだろう。冴、日本嫌いとか言ってなかったか……いや、日本自体は好きなのか。日本のサッカーが嫌いとか言ってたな。厄介ファンってやつだ。あいつと日本チームが出てるサッカーの試合は見たくない。罵倒の嵐だろう。
さて、あいつがここにいる理由だが……なんか直ぐに思い浮かんでしまって悲しくなってきた。
ポケットに手を突っ込みながらこちらに近寄ってくる冴の肩に優しく手を置き、耳元で囁く。
「口悪すぎて捕まっちゃったのか。ドンマイ！」
「……今の一瞬で現状が理解出来た。相変わらずの馬鹿で安心した」
深く溜息をつき、本当に馬鹿を見る目を向けてくる。失礼なっ、人並みに賢いわっ！　全国模試満点だぞッ！
先程までピリピリしたオーラを纏っていたが、今の一瞬で何故かそれらが霧散し、いつものサエサエに戻った。
「その呼び方やめろっつってんだろ」
キッショ、なんでわかるんだよ。
「んで、要件は？」
一歩離れた位置から動かない冴から視線を外し、後ろに控える河童に視線を向ける。河童は俺が視線を向けるまで何やら驚いた表情を浮かべていたのか、一瞬だけその色を見せるも、次は何やら深刻さを押し隠したように取り繕った態度を見せる。
「そこにいる日本の至宝様からのご指名だ」
「お前……自分のこと至宝とか言わせてんの……うわぁ」
「殺すぞ」
親友のイタい性癖を垣間見ても、俺は理解のある方だからとドン引

きながらドン引きした。てか、ん？
「指名？」
謎のワードに戸惑い首を傾げる思いで日本の至宝様（笑）に問いかける。どこか引っかかるのか、額に青筋を浮かべるそいつは相変わらずの死んだ魚の目を向けて来る。あ、ちょっと新鮮になってる。
不意に、ポケットに突っ込んだままの手を抜くと俺の胸あたりに拳を軽く当てて来て、俺の目を真っ直ぐに見つめてくる。
あ、なんか嫌な予感。
「チェンジで」
「もう逃がさねぇよ」
話聞けや……新手のＩＬｏｖｅＹｏｕかよ……。
「お前は、俺の隣を走れ」
……。
「ごめん……俺、ノーマルなんだ」
「だから勘違いすんなって何回も言ってんだろうがクソ野郎が」

人間不信なりそう

以前とは打って変わり、外の世界はどうやら冬に差し掛かっているようで肌寒い気温が続いている。

謎の仮釈放を受け、冴って権力者なのかっ!? とテンションが上がっていると深いため息をつかれて心底バカを見る目で見られたことに疑問を覚えたのは記憶に新しい。

そして、冴と二人で乗せられたリムジン的ななにかに連れていかれること数時間、辿り着いたのはこれまた謎の施設。そして連れられた謎の部屋。その部屋で待っていたのは謎の人物達。向けられるは謎の警戒心と何故か見下す目。謎が多くて吐きそうだった。

「私がこのチームの監督だ!」と意気揚々と言ってきたおっさんに反応する暇もなく、冴が俺の前に躍り出てメンチを切っていたのを後ろから動画を撮影したことくらいしか印象に残っていないが、どうやら俺はここにいるヤツらとチームを組むことになったらしい。なんで？

冴からは深く考えるなと言われた。いや、全然あの人ら歓迎してないじゃん。髭生やした人めっちゃ睨んでんじゃん。腕サムズアップしてんじゃん。え、この人ら２０歳以下？ 嘘つけ、明らかヤベェやつら何人かいるぞ。今にも「ナマステ」とか言いそうなやつとか、噛み付いてきそうなやつとか、目が点な奴とか。

「ハッ、ハッ……ッァ」

こいつらはあれか？ 前いた監獄のライバル監獄なのか？ 貫禄はそれ相応だが……いや、アイツらの方がやばかったな、うん。殺人鬼に美人局にハッカー、ママ活パパ活果てには二重人格。触覚ＢＬと、属性を盛りすぎた場所だった。あれに勝てる監獄はないだろう。

あそこに居たことが要因となっているのかは定かでは無いが、最近インスタに外国の人からフォローが二件来た。一方からは謎の熱烈なラブコールが届いた。やれ『素晴らしい時間でした』やら、『また一緒にシましょう』やら……明らかに男からのＤＭだったため、とりあえずブロックしておいた。

もう一方からは、『殺す』『潰す』『ぐちゃぐちゃにしてやる』。とりあえず通報しておいた。
「で、まだやんの？」
シャバの空気を吸い始めて数日。現在俺は、目の前で膝に手をついて荒く息を整えようとしている男から誘われて室内サッカーコートへと足を踏み入れていた。
程よいダンディな髭を生やすオッドアイの男の名前は愛空。Ｘ時代に俺が愛用していたキャラと同じ名前だったのでとりあえず着いてきた。色んな女に手を出してそうな見た目と軽薄さを持ち合わせていたが、まあなんとかなるだろう。
「ッ……ダァー！　降参だ降参！」
限界が来たのか、遂に膝から崩れ落ちるようにして地面に腰を下ろし、両手で上半身を支えながら天井を見上げている。向こうから終了を告げられたために、消化不良を感じながらも俺は足元にあるボールをフワリと上げ、ゴールポストへ向けて蹴りだし、その跳弾でカゴへと入れた。
謎の施設へ連れられた初日に外面フレンドリーに話しかけてきたこいつは、しかし内面はその場にいる誰よりも警戒や疑念を抱き接触してきた。そして品定めをするような目線を晒し、今日ここへと呼ばれ、ミニゲームを提案してきた。
単純な１ｏｎ１。具体的なゴール数は決めず、向こうが納得のいくまでゲームを続けるという制約の元、俺は蹂躙を始めた。
結果、相手は汗をダラダラと流し、呼吸も乱れ、短時間で蓄積するとは思えないほどの疲労を与えていた。
「ははっ……バケモンかよ」
苦し紛れの笑顔を見せながら、俺の目を見てそう言ってくる。失礼な、なんてやつだこいつは。上ＢでＴＥＮ・ＣＨＵ☆するぞ。
「んで、何がしたかったんだよ」
「言い方は悪いが、品定めってやつだな……上からの指示とはいえ、急に入ってきた訳分からん奴をすんなり受け入れるのは出来ないんでね」

ほーん。何言ってるか全然分からん。
「天才君が選んだストライカーとは聞いてたが、一応、な……結果はこの通りだが」
天才君……冴、そんな異名あったのか……日本の至宝といい、あだ名多いなあいつ。今度さりげなく呼んでやろうかな。多分無言×真顔×マジ殴りで来るだろうな。
「俺はあんたのお眼鏡にかなったってことでいいのか」
「くっははっ……かなったかなった！　想定以上……ていうか、バグだろ。お前みたいなやつが居たのかよ、日本に。まじで怪物だな、ナニモンだよ」
「ただの高二だよ」
「お前みたいなやつが普通なわけないだろ、馬鹿が」
愛空とはまた別の声が聞こえ、振り返るとそこにはボールを蹴りながらこちらへ歩いてくる、ジャージを着た天才くんだった。
「天才君じゃん」
正解は、無言×真顔×顔面マジシュートでした。とりあえず避けるのはあれかなと思ったので、軽く跳躍して肩でトラップする。うわ、舌打ちつきでした。
「二度と呼ぶなよ」
「怒んなって、日本の至宝様」
どこから取りだしたのか、2発目の顔面シュートを繰り出してくる。いや殺意高いなこいつ。まじでどっから取りだしたんだそのボール。腰にベルトあんのか？
手で受け止めるには痺れそうなので、足を振り上げて足裏に吸い付かせるようにボールを止め、足元へ落とす。2つあっても意味は無いと判断し、うち一つを軽く蹴りあげてカゴへと直接放り込んでおいた。散らばったら後々だるいからね。
「相変わらずきっしょい身体してんな」
「毎回罵倒から入らないと死ぬのかサエサエ」
「うぜぇ……」
今度はボールは飛んで来ず、顔を歪ませるだけで済んだ。嫌そうに

しながらも、サエサエは許容している感じからもツンデレ加減が見てとれる。本人に言ったらまじ殺しが来そうなために絶対に言わないが。

「お前ら、まじで知り合いだったんだな」

そんな俺たちのやり取りを見て、ようやく呼吸が整ってきた様子の愛空が少し驚いた表情を見せながら俺たちを見渡し笑みを浮かべる。疲れすぎて変なテンションになっているのか、どこか面白そうな笑みだ。今にも手を叩いて笑いだしそうで怖い。

「ああ。尤も、この馬鹿が何も言わず勝手に消えたせいで鬱憤は溜まってるがな」

「相変わらず目死んでんなあ」

「会話も出来ねぇのかお前は」

いやいや、本当に目死んでるんだもんしょうがねぇだろ気になったんだから。

帰国に関してはまじでごめんとしか言えないんだよなぁ。「そろそろ帰国するぞぉ！」って親に言われて一時間で荷物まとめて空港向かったもんなぁ。仕事の関係とはいえ、突然過ぎて冴に伝える暇がなかった。連絡先知らんし。まあリムジンの中でスマホ強奪されて交換した訳だが。

「ハハッ！　仲良しかよ！」

「声太いミッキー居たぞ今」

「お前はもう喋るな」

冴からの辛辣なツッコミに大ダメージを受けた。普通にショック。

気分が下がりながらリフティングで暇を持て余していると、冴から「おい」と王様的呼び掛けを受けた。へい、なんでい！

「消化不良だろ。俺が相手してやるよ」

なんてことないように言いながらジャージを脱いでいく冴はいつもと変わらない様子でありながらどこかワクワクとした雰囲気を醸し出していた。

なるほどなぁ。向こうでは週2、3回はサッカーを一緒にしていたし、それが冴的には割と楽しかった思い出だったわけで。帰国してか

ら今までやってこなかった反動が来ちゃってるわけか。んだこいつ可愛いなおい。
　でも、俺はそれを指摘したりはしない。俺は人の気持ちが分かるタイプなんでな。冴はその思いを隠しているのだろう。もし俺が察していることに気づいたら恥ずかしい気持ちになるのかもしれない。だから俺は知らないフリをしてこう言おう。「冴とサッカーすんの久しぶりだな」、と。
「チワワとサッカーすんの久しぶりだな」
「殺す」
　やべっ、言葉間違えた。愛空のやつ隣で爆笑してやがる。もっと虐めてやろうかなアイツ。
　この後1時間ぐらい戯れた。久々に汗かいた。

◇◇◇◇
　Ｕ２０日本代表戦に向けた、レギュラー選抜戦が終わりを迎え、生き残ったブルーロックのストライカー達がセントラルルームに集められていた。
　そして、様々な気持ちを胸に佇むエゴイストたちの前に、ブルーロックプロジェクトの説明となる最初期以来の登場である絵心　甚八が姿を現し、緊張が走る。
「水野くん居らんなぁ……トイレ？」
「迷子じゃないですかね」
「お前ら水野の扱い雑すぎんだろ……」
　期間を置いたことで冷静になり、メンヘラ属性が無くなりつつある氷織と、水野の師事を受け急速に成長した潔、そして練習の度に胃を壊していた二子が固まる。その疑問の声に答えるものは居らず、絵心からの日本代表戦に出場する１１人のレギュラーが発表された。
　チームの先頭を駆け抜けるストライカー。主軸となるＦＷは……二人。
「糸師凛……そして、潔世一。このツートップで試合を壊せ」

「ッ!!」
潔を凛の最良のパートナーとするのではなく、あくまでも二人がそれぞれチームのメインとなることを告げられ、凛の表情が歪み、潔は好戦的な笑みに口角を上げる。
そして氷織、二子の両名もレギュラーに選ばれ……水野の名前は呼ばれることは無かった。
レギュラーに選ばれ昂る者、名前を呼ばれず、口を噛めしめるもの。それぞれの感情が入り乱れる中、しかし水野の名前が呼ばれない不可解な事実は共通の認識となり、それらを代表して雪宮が手を挙げる。
「なんで水野くんが入ってないんですか？　ＮＯ．１ですよ？」
ＮＯ．１ではなく、Ｎｏ．２と上位６名に入っていない潔が選ばれる。勝ちを狙うならば、水野のレギュラー入りはベターだろう。
頷く周囲を見渡し、絵心はその質問が来るのを想定していたのか、淡々と説明を続けようとし、しかし顔色は少し青い。
雰囲気が変わった絵心を見て、潔達は目を見張り、そして絵心からの説明へと意識を向けた。
「水野悠の実力は青い監獄の中においてずば抜けている。それは世界選抜戦にて５ゴールを奪い取ったことからも明らかだ。奴はまず間違いなく、世界の頂点（ワールド・ワン）に最も近い存在と言ってもいいだろう。俺ももちろん、今回の布陣は水野悠をワントップとしてメンバーを決めていた……が、状況が変わった」
絵心の声色が明らかに下がる。
「ＪＦＵからの電話が入った。内容は、糸師　冴が日本代表のＦＷに不満を持っており、糸師　冴の条件を呑まなければ試合は中止……青い監獄は自然消滅となるということだ」
その場にいる誰もが声を出せず、予想される内容に冷や汗が流れる。
「その条件はただ一つ――――水野悠を、Ｕ－２０代表に加えること。糸師　冴はここにいるお前らではなく、水野悠を選んだ」
「――――は？　」
メンヘラ爆誕である。

「……加えて、どうやら糸師　冴は水野悠と過去に関わりがあったらしい。お互い、かなり砕けた様子だった。即興のペアだとは思うなよ」

「――――は？　」

ブラコン爆誕である。

（あ～……あの人、今度あったらまじで鼻先殴ってやる）

瞳孔が開き、吹雪が周囲をチラつかせる隣にいるメンヘラを横目で捉え、二子は一人拳を握り脳裏で笑う怪物へと拳を振るった。

そして、数日後。

Ｕ－２０日本代表ｖｓ．青い監獄（ブルーロックイレブン）１１傑。

世界を変える怪物が誕生する激戦が、幕を開けた。

寒????

寒い寒い、サブリナ！　どうも水野悠だよ！

ジャージじゃ足りないのでダウンも着させて頂きました、もう真冬です。目の前で走り回っている人達は風の子なのでしょうか。俺も早く走って暖まりたい。

気が付けば、諸悪の根源たる監獄に向けて出発していたため、俺は騙されたのかと冴に非難気味な視線を向けたら無言でチョップされデコピンされ背中にアルミ製の冷たい何かを当てられた。理不尽が過ぎるんよ。

どうやら向かったのは本当にあの監獄のようで、「黙って着いてこい」と明らかに格好つけたクサイセリフをサエサエから頂戴し、ついて行くとそこは監獄に囲まれた巨大なサッカーコート。テレビで見たことあるような巨大ステージには既に所狭しと観客が詰め込まれ、日本コールが鳴り止まない。なんで？

反社に対して処刑でも始めるの？　俺反社じゃねぇよ？　えぇ……囚人候補に厳しすぎだろこの国やっべ。まだ高校生だぞアイツら。遠慮してやれや……あ、俺のケツ狙ってたヤツらは干して大丈夫ですよ。あと河童。

河童の公開処刑が始まるかと思いきや、河童は何やらタブレットを持ちながら悠々とベンチへと深く腰を下ろしていた。まるで監督のようだ。アンリさんもその横にダウンに身を包んでちょこりと座っていた。可愛い。

どうやら今からサッカーの試合が始まるようだ。そういえばそんなこと言ってたな。監獄とバカボコするとかなんとか。俺はサエサエと同じ愛空側のようで、相手は潔達だ。なに、革命家の新しいビジネスでも始めんの？　サブスク？　イカゲームサッカー版でもやるつもり？

どうやら俺はベンチスタートのようで、冴はレギュラーなので、ちょうど入口から選手たちが入場してきた。相変わらずつまらなそうな目をしている冴の横には殺人鬼。しかし並んでみるとやはり似ているなぁ。兄弟だったりするのか？　身長的に冴が弟かね？　また後で聞いてみるか。

見知った顔がどんどん見えてきて、氷織と二子がこちらをガン見してきたから目を逸らした。いや、だって可笑しいだろ。氷織の目は結構やばめにガン開きしてたし、二子は殺意やら何やらこもって握りしめた拳が悲鳴をあげていた。なんかごめん。身に覚えは無いです。

試合が始まった。寒い。室内で見たい。中継してないのかな、帰っていいですか？　ダメ？　ダメでした。

「……うん、使い方上手くなってるな。やっぱ空間認識能力はあいつらの中じゃ頭ひとつ抜けてる」

潔が二点目のゴールを決めていた。まだ完全とは言えないが、俺が言ったことはだいたいクリア出来てるらしい。

ただ、今までとは世界の見え方が変わっていることによる全能感にも似た何かの影響なのか、歯止めが効くのか気になるところではある。要約すればテンション上げすぎて倒れそうで怖い。

その後、パスを出したＦＷがシュートを決められなかったことに分かりやすく機嫌を損ねた冴が一点決め返し、殺人鬼と凪が一点ずつ決めて前半終了。４－１で三点差から後半を迎えることになった。途中、ベンチ前を通った二子からすごい目で見られたけど気にしない。

反対側にいる氷織からすごい眼光を向けられたことも気にしてない。だからこの身体の震えはただの寒さから来るものなのである。

◇◇◇◇

『希望的観測だが、水野悠は後半から出てくるはずだ』

それは、試合が始まる直前に行われたミーティング。

『あちらは青い監獄を潰すために動いてる。糸師　冴からの要求とはいえ、青い監獄の理念である水野を使うことを嫌うだろう』

そう言うと、絵心は右手を前に突き出し、親指を折り曲げる。

『四点……最低でも3点は差が欲しい。前半、水野がいない相手チームから3点奪え』

俺達に与えられた指示はシンプルなものだった。

前半に引き離し、後半で逃げ切る。

与えられた最低条件である3点差をつけることに成功し、イガグリが唾を撒き散らして喜んでいたのを思い返す。でも、俺は全くと言っていいほどに余裕も安心もなかった。

そして、後半戦が始まろうとし、選手達がフィールドに姿を現した。

「……やっぱ、来るよなッ」

前半では見えなかった顔がそこにはいた。

緊張した様子は見せず、ただ立っているだけで伝わる強者の覇気。

ブルーロック最強。糸師　冴が選んだストライカー。

水野悠が、そこに居た。

「ハッ。ビビってんのか、潔」

水野の姿を眺めていると、隣にいる凛がこちらを見下ろしてくる。

「うっせぇ。なわけねぇだろ」

水野から眼の使い方を教わり、改めて俺はあいつの凄さに気付かされた。常にフィールド全体を見渡し、最適解を導き出す、まさに神の視点……超越視界（メタ・ビジョン）。

『……厨二病属性もあるのかよ』

そう名付けた俺のつぶやきを聞き、水野が何かを言っていたが、そ

れは置いておく。
　前半はフル稼働とは言わずとも、ほとんどをその眼で進めていたが、やはり消耗が激しすぎる。体力は簡単に着くことは無いので、今の俺ではフルタイムで使うことはまず不可能。しかし、水野はこれを日常的に使っている。怪物だ。
　味方としては、この上ないほどに強力で、頼もしい存在だった。でも、それが今、糸師　冴と言うこれ以上ない相棒を隣に置きながら、敵として目の前にいる。
「お前……弟に身長負けてんのかよ……まあ、うん。ドンマイ」
「何回続けんだよこのやり取り」
「飽きるまで」
「飽きた」
「やめた」
「きめぇ」
　恐怖は……思っていたよりも無い。それよりも感じるのは、自分がどこまで通用するのかという挑戦的思考。
「サエサエ、もうちょい感情増やせよ。アンリさんを見習え」
「知らねぇよ。誰だその女」
　多分、糸師　冴も俺と同じ視界を持ってる。前半で感じたあいつの動きがまさにそれだった。糸師　冴だけでも、怪物。
「河童の隣にいるだろ。監獄の管理者側唯一の良心。ちなみに管理者側は河童とアンリさんしか知らん」
「……ああ、あの無駄にデカい胸か」
「黙れ尻フェチ」
　そこに、遥かにやばい怪物が加わるんだ。前半の比じゃない。糸師　冴も、前半は様子見だろう。後半からは、本気の怪物が牙を剥く。
（楽しみだ）
　そう感じてる俺は、とっくに狂ってるのかもしれない。
「あ～……悠」
「何？」
　もう笛がなる。待ちきれないとばかりに俺の心臓が鼓動を早める。

口角が上がり、歯がむき出しになっているだろう。
「おい、凛」
「あ？」
相手ボールからのスタート。必然的に水野がボールを保持して始まるだろう。全く展開が予想できない。常に眼を使え。この試合が終わってぶっ倒れてもいいから、だから。
「簡単に置いてかれるんじゃねぇぞ」
「ハッ……お前の方こそ、着いて来やがれ」
凛の好戦的な笑みを見て、俺は眼に意識を集中し、世界を数式化した。

「……あの女、ハニトラだぞ」

「潰すか、あの監獄」

ゾクリと、殺気が肌を刺激されたのを感じ、糸師　冴がパスを出し水野ボールから後半戦が始まった。
表情をなくし、ロボットのようにも見える水野が駆け出す――――。
「――――は？」
意識を切り替え、目の前に迫る怪物に集中する。隣から聞こえてきた掠れた声を聞き、俺はようやく水野に抜かれたという事実に気づいた。
（え、は？　なん……俺と凛の間を、ただ走っただけで抜いたのか!?　つーか、あの速さ……）
爆発的初速。弾丸のように止まらず突き進むその姿は、世界選抜戦において脅威だった、同年代の天才を連想とさせるフォームと速度だった。
（流石に最高速までは真似出来ないが、初速の出し方くらいは参考になった）

いつか見た戦闘狂の走りを思い出しながら、俺は怒りを感じながらピッチを駆け抜ける。
（ハニトラ……くそっ、完全に騙されたんだがっ!!　あの笑顔は嘘なのか……人間不信なりそう）
冴からのカミングアウトを受け、ショックを受けながらも、最終的にはとりあえず河童のせいにしといて結論を出す。
（あの河童マジで殺す）
「アカンっ、止まらんぞ！　囲め！」
事前に冴が一点目は一人で決めてこいとか寂しいことを言ってきたので萎えていたが、今では単独で蹂躙できることに喜びを感じる。河童に当てたら百点とかない？　ていうか点失ってもいいから当ててもいいかな？
まじで冴が後ろから一歩も動いていないのを把握し、俺は後ろの情報を全てカットし、脳内再生している展開だけで背後の情報を把握する。どうやら俺の足に着いてこれるやつがサイドにいるお嬢だけなようで、こちらに向かって走ってきているが、まあ問題は無い。
後ろで関西弁がギャーギャー言っているのもカットし、俺の前に集まる二子と髪の長いヤバめのやつとお嬢を捉える。
「俺、止める」
「行かせねぇよ！」
「まじでぶん殴る」
一人別の部分にやる気を出している奴がいたが、そこは置いておこう。後が怖い。
前から3人が俺を囲むようにやってきて、右側からも一人ニッコニコしながら走ってきている。ヘルプに着くのも時間の問題だろう……が。
五歩、遅せぇよ。
「〝ロック〟」
前三人が俺を囲み切る前に、ノーモーションから鋭いシュートを放ち、二子と髪長の間を貫く。
カーブを一切かけない、ただひたすらに最高速で真っ直ぐ突き進む

シュートは、前三人を壁にしたことでキーパーから俺の最低限のモーションさえも見ることは出来ず、突然湧き出てきたかのようにも錯覚する超速のシュートは相手に動く暇さえも与えずにゴールへと突き刺さった。

後半戦を告げたホイッスルの１０秒後に鳴り響いたゴールの音は、観客達を一瞬困惑させ、一拍置いた後に爆発的な歓声が響き渡る。

味方、敵、観客。冴以外の全てを置き去りにしてゴールを決めた俺は、振り返るとこちらを見つめる全ての視線を受け止めてため息を着いた。

「お前らはどうでもいいが……まあ、ただの八つ当たりに付き合ってくれ」

【傑物】は魅せ、【天才】は産声をあげる

「こ……後半開始、僅か１０秒!!　水野悠独走ッ、たった一人で”青い監獄”を抜き去り、ゴールをものにしましたっ!!」
「いや、いやいやいやヤバいでしょっ!?　あんな独走見たことないよ!?　誰、水野悠って。無名の選手でしょ聞いたことないよっ!?」
　後半戦を迎え立ち上る歓声は、ものの数秒でゴールへの大歓声へと変わる。実況席において、照朝熱人と夏木春太郎が目を見開きながら解説に勤めていた。
「前半戦に青い監獄が作り出した三点リードは既に二点差へ！　事前情報の一切が不明なダークホース、水野悠が魅せました!!　観客総立ちの大歓声です！　夏木さん、今のプレーはいかがでしょうか!!」
「えぇ！　わっかんないよ今の速すぎ！　糸師　冴が棒立ちしてたからそっちに意識向けられてて気づいたら決まってたよ!!」
「リプレイ流れます……これは、ＤＦの僅かな間を通す神業シュート！　等速では脚の振りが速すぎて全く見えません!!」
「ていうか、予備動作全くないのヤバすぎでしょ!!　なんで無名だったのこの選手!?」
「ええ！　水野悠を加えた後半戦は波乱の展開！　前半に圧倒的な実力を見せた青い監獄はあの謎のストライカーにどう対処するのか!!」
　場面は変わり、青い監獄側ベンチ。盛大な歓声が鳴り響くスタジアムで、この場所だけは異様な静けさを見せていた。
「は……いや、え？　チートだろ、あれ」
「中央突破のごぼう抜きって……つか、あのシュートやべぇって！　速すぎんだろ！　もう二点差だぞ!?」
　本来なら青い監獄側として力を見せるはずだった水野悠が日本代表側として、糸師　冴を上回る壁となる。暴力的なまでの圧倒的な実力に、前半ではお祭りムードだったイガグリを始めとしたベンチメンバーが驚愕に震えていた。
　タブレットを胸に抱き、目の前で繰り広げられた一瞬の蹂躙を目に焼き付けた帝襟アンリもまた、不安な様子を隠さず絵心へと口を開

く。
「絵心さん、これはかなりまずいんじゃ……」
「いや、想定内」
「っ……三点差が安全圏内なのは、楽観視しすぎていたんじゃないですか？　彼はあの世界選抜から五点もぎ取ってるッ……あと二点取られるのは、時間の問題ですよっ!?」
「そんなこと分かってるよ」
「絵心さんっ……」
「ねぇ、アンリちゃん」
　絵心だけは唯一、今のスーパープレーに驚きは見せず、むしろ当然だと腰を深くおろし、足を組んでタブレットを操作する。その画面に映るのは、水野悠の暫定的な筋力や技量の数値。
「どうして水野悠が世界選抜に勝利できたか、分かる？」
「それは……単純に、水野くんの実力が相手五人を上回っていたからでは……？」
「浅い」
「あさっ……!?」
　バカにするような目で横目にアンリを見る絵心に、結構な言われようをされたアンリは仰け反って顔を歪めた。
「水野悠の実力は確かにあいつらより上だった。でも総力では流石に勝てないよ。５対１ならまず点差は変動すれど、世界選抜が勝ってた」
　タブレットの右上には小さく映像が流れている。それはいつかの世界選抜戦において、水野がロキを始めとした相手選手と１ｏｎ１を繰り広げる場面。
「世界選抜の奴らは、水野相手に一人ないしは二人でしか挑まなかったし、逃げることもなかった。水野に触れられないようにパスを回せば勝てていたのに、そうはしなかった。水野悠は最強だ、でも万能じゃあない。コート全域をカバーするなんて、そんな神の領域には踏み込んでないよ」
　多分、と。小さく呟いていたのを、アンリは聞き逃さなかった。

「三点差を安全圏だとは思ってないよ。アイツらが後半も点を決めまくってくれないと流石に勝てない。水野悠……いや、糸師　冴の二人にボールが渡った瞬間。まあ、９９％止められないだろうね」
「えぇ……じゃあ、どうするんですか……？」
「正直、俺はこの試合、負けてもいいとさえ思っている」
「え……えええ!?」
「うるさっ……」
「いや、いやいやっ!?　負けてもいいってどういうことですか絵心さんっ!?　負けたら青い監獄プロジェクトも水の泡ですよっ!?」
「いいや消えない。水野悠は青い監獄（俺たち）の理念の完成形だ。あいつの実力を全国……いや世界に見せることは、『世界一のストライカーを誕生させる』という目標の達成に他ならない」
　ポカンと口を開けるアンリは、少ししてから、あっ……、と思い至ったかのように声を漏らす。
「青い監獄は解体されるかもしれないが……この試合の後、水野悠は日本代表のエースとして世界に名を馳せ、次いで糸師　凛、潔　世一達が別ルートから名声をあげるだろう。そうなれば、実質俺たちの勝ち。月並みな言葉だが……意思は消えない」
　それは、水野悠が相手側へと移った時に脳裏で描いた勝利の道のひとつ。負けても勝つ。そんな唯一の道筋が、しかし一番成功率が高く、効果も絶大なものだった。
　実際問題、水野悠がどちらに付くかどうかでパワーバランスは容易に傾く。それほどまでの圧倒的な力。加えて、糸師　冴の存在が大きすぎた。
　とある時期から、急速にストライカーとしての才覚を見せ始めた糸師　冴はそのまま行けば新世代１１傑のＦＷは間違いないと言われるも、しかし周りからの期待を無視する形で、突然ＭＦへと転換した。
　糸師　冴一人でも手に余る現状、水野悠が加わってしまったことにより、勝ち筋はもはや無いに等しい。仮に一点取り返したところで、相手側からのスタートとなったボールは即座に水野へと渡され、一瞬で点をもぎとられることだろう。

「――――まあ、でも」
どれほど負ける確率が……いや、既に負けが決まっているとさえ錯覚してしまうほどの絶望的な現状で。
「アイツらは負けるつもりなんてサラサラないんだろうけどね」
ピッチに立つエゴイスト達の目は、ギラギラと迸るばかりだった。
「絵心さんには、この状況を破る秘策が……？」
期待を込め、身を乗り出しながら聞き出したアンリに対し、絵心はタブレットから視線を逸らすことなく「そんなのは無い」と即答する。
ええっ!? というアンリの叫びを無視した絵心は一人、誰に聞かせるわけでもなく声を漏らした。
「もし、あの二人に勝とうとするのなら、必要となってくるのは糸師凛、潔世一、そして……凪誠士郎の覚醒だ」

◇◇◇◇
『……ねぇ、水野悠。あんた本気だしてないでしょ。それでも勝てない。凄いや』
それは、適性試験における一幕。序列七位となった凪が二回参加することを許された、二度目の試合の終了後。
水野悠と対戦し、そして一点も決めることが出来ず、完膚なきまでに大敗した凪は地に伏しながら、汗ひとつかかずに佇む水野を見上げる。
『どうしてそこまで強くなったの？　何があんたをそこまで押し上げたの？』
突然話し始めた足元に転がるチワワみたいな何かに不気味さを覚えつつ、しかし呑気な口調から害意はないと悟った水野は話し相手になってやるかと見下ろす形で凪を見る。
『お前、目標とかあんの？』
『目標……潔を、倒したい』
『……お、おう。そうか』
急に様子がおかしくなった水野に少し首を傾げながらも、凪は水野

からの返答を待つ。その視線を感じとったのか、少し考える素振りを見せながらも、水野は真摯に答えを口にした。
『お前は潔を倒すために何をしてんの？』
『え……練習とか、面倒臭いけど、筋トレとか？』
『それは潔を倒すための最適な方法でやってんのか？』
『え～……分かんないや』
『……はぁ』
　ため息を零した水野は、またしても考える素振りを見せて少し悩んだ末、結論を出したのかもう一度凪へと向き直る。
『潔を倒したいってのは……サッカーで、って認識でいいのか？』
『え……うん。当たり前じゃん』
『あ、そう……なら、教えてやるよ』
『え？』
『潔に勝ちたいんだろ。なら、それ相応の練習に付き合ってやるよ。筋トレは指示した奴適当にやっとけ』
　どこから取りだしたのか、水野から投げ渡されたタオルで顔に流れる汗を拭い、首にかけて水野を見上げる。その返答が予想外だったのか目を丸くしていた凪に反応するでもなく、水野は話を続けていた。
『で、やるのかやらないのか』
　それに、凪は迷う素振りは見せなかった。
『うん、やるよ。よろしく師匠（マスター）』
『は？　……何その呼び方』
『教えて貰うってことは、水野は僕の師匠でしょ？』
『あ～……お前名前は？』
『凪誠士郎』
『ＯＫ、凪。二度とその呼び方すんな。ゾワゾワする』
『なんかごめん』
『んじゃ、今日からやってくか、弟子（my student）』
『え、発音良すぎ。ていうかキモっ、何今の？』
『さっさと戻れ、凪』
『え、うん……え？』

「爆発的な初速、どっかで見たことあると思ったら世界選抜戦の……ロキだっけ？　あいつの走り方に似てる。あれは流石に俺じゃ真似出来ないからパス。そこから囲まれる前に状況判断、すかさず最適ルートに最速のシュート。予備動作は全く見えなかったていうか実際に無い？　ドリブルは自分の走りを妨げないボールタッチと大きめの歩幅。視野は広くコート全体を見渡して……いや、後ろは見てないな」

自陣に戻る水野を見ながら、誰に語りかけるわけでもなく独り言のように音を漏らす。

「なんだっけ……そうだ、『毎秒溢れるインスピレーションに序列をつけろ』だ」

わずか数日とは言え、密度の高い指導を受けた凪はその内容を思い返す。

『実現可能な想像は誰でも出来る。ギリ無理な理想を実現出来る準備をしろ』。脚の再現は普通に無理だけどあの視野の使い方ならワンチャンあるか……？　いや、潔の視野を参考にするか。アレは無理。水野の眼が異常だ。あのコンタクトつけた状態で死角なしとかバケモンでしょ」

脳内で繰り広げられる自分が今出来得るであろうプレーの限界と、ギリギリ出来ないであろう理想のプレー。無限に湧き出るインスピレーションを場面に合わせて最適化し、序列化を図る。

「俺はドリブルが特段うまいわけじゃないから水野を越そうと思ったらやっぱりパスを受けてのファーストタッチしかない。トラップとフェイントでアイツの中の理想を超えるパフォーマンスが出来れば勝てる」

歓声が止むことなく、後半開始直後とは思えないボルテージの上がりようを見せる中、試合が再開されさらに歓声が沸きあがる。その中でも、凪は常に試合展開に合わせて情報の更新を続ける。

「コート上の全ての選手にパラメータを振り当てて常に更新し続けて

試合展開を先読み……出来るわけないでしょ馬鹿なの？　まだ無理、今こだわることじゃない。でも、俺がコントローラーを握るならこう動かすっていう予想はできるか」

僅かな短期間で、空間把握能力が高まる訳では無い。水野の視界に手が届くわけでもなく、かと言って潔達の視界にすら到達することはこの試合内では不可能。ならば、凪なりのやり方で未来予知にすら匹敵する展開予想をする水野に食らいつく。

「水野と糸師　冴にボールが渡った瞬間負け確の無理ゲー。かと言って２人だけに集中して数人で相手できるほど相手は弱くない特にＤＦ。個人技じゃちょい厳しいか。なら……ん～……もう一回くらい見たいかな」

血流が脳を駆け巡り、熱を帯びて沸騰するのではないかと錯覚するほどに頭を回す。今まで感じたことの無いほどにクリアになった視野、思考。羽のように軽い身体と、今ならなんでも出来るのではないかと思ってしまう故に無限に想像出来てしまうゴールピース。しかし、最後のピースが浮かび上がることはなく、全てを水野によって壊される想像しか出来ない。

「――あ、指南代、払ってないや」

瞬きすら忘れ、凪は走り出す。観客は視界に入らず、耳にも声は届かず、コート上の全てを感知する。

「ま、俺のゴールを魅せる、ってことで許してくれるかな」

【天才】は、【才能の権化】の指導を受け……僅かに、その領域へと足を踏み入れようとしていた。

潔のボールから再開された後半戦。日本代表は安易に飛び出る様子は見せず、冴と水野は一定の間隔を保ちながら漠然と周囲を観察する。

潔自身も個人技でのゴリ押しは選択肢になく、凛や凪、烏とパスを回しながら着実にゴールとの距離を縮めていた。

（水野に取られたらもう止められない。かと言ってそっちに意識を向けてたら糸師　冴がボールをカットにしくる……クソっ、人数足りて

ねぇよ!!）
潔にとって、厄介なのは三人。水野、冴、そして愛空。しかし裏を返せば、この3人以外は現状脅威ではなく、危なげなく避けられる障害物である。現に前半戦において四点のゴールを決められたことからもその事実は明らかだった。
しかし、その三人……いや、水野と冴がイレギュラー過ぎた。二人に勝てる存在はブルーロック側には居ない。人数で制圧すれば可能性はあるだろうが、それをするには他のマークが甘くなる。当然の事実ながらに、潔は奥歯を噛み締めて頭を回す。
溢れ出すゴールへの道筋。無限に作られていく軌跡は、しかしそのほとんどが道半ばで掻き消されてしまう。
（ダメだっ、強すぎる！　俺の想像があの二人に通用しない！）
凪へとパスを出し、ボールを奪いに来た閃堂を躱す。そして目の前に現れた水野を見やる。
明鏡止水。全くの乱れを見せず、思考が読めない。超越視界において水野の動きだけがノイズがかかり、先の展開が全く見えないでいた。
水野の眼は、潔を見ているようでしかし焦点は合わず、その先さえも見回しているのではないかという底知れない瞳の奥行きに恐怖を抱きながら潔は勝負を捨ててパスを回し水野から距離をとる。
水野にボールを触らせないこと。この鉄則は不変であり、共通認識となっている。
（凪の調子良さげだな。凛はなんか焦ってるか？　いやそのルートはまずい。烏いい位置、氷織なら抜けるか。いやここは蜂楽ていうか氷織なんだあの顔怖っ）
高速で回る思考。空間認識能力に優れた潔の視界に映る情報全てを取り入れ最適解を模索する。切り捨て、切り捨て、切り捨て……そして手元に残った僅かな手札で勝負を挑む。
凛にボールが渡ると潔は凛の周りを目立つように駆け寄り、敵にパスの選択肢を予感させる。一瞬の誘導により凛のドリブルで一気に抜き去る。凛から氷織へ渡ったボールはそのまま蛇来との１ｏｎ１

にもつれ込み、愛空のヘルプが来るのを見てからすかさず潔へとパスが渡りそして凛へ。
最終防衛ラインへと突入し、迎え撃つのは仁王、そして、糸師　冴。
潔、凛、凪の三人に対して相手は二人。愛空がヘルプに走ってきているが間に合わないことを察知し潔は短期決戦へとシフトする。
一気に抜き去り……いや、ここはシュートか。その二択が思考を埋めつくした中、冴は不意にボールを持たない凪の方向へと一気に走る。
「あえ、俺？」
仁王ですらその奇行とも言える冴の行動に顔を歪めるも、潔はその行動の真理を理解しようと頭を回す。
（ボール持ってない凪に付いた？　選択肢を強引に潰して仁王に任せたのかいやそれなら糸師　冴が残ってた方が勝算高いはず何が目的）
音は一切聞こえることはなく、むしろボールを失うことこそが自然かのように錯覚する。それ故に、後ろから迫ってきた傑物にボールを奪われたという事実に気づくのに、潔は二秒費やした。
（つか、狙いは凪じゃないのか？　あの感じ、凪を通り越す勢い――――）
「ゴール前だから油断したか？　言ったろ、初めは常に視界はコート全域を意識しろって」
「いや……は？」
潔よりも僅かに気づくのが早かった凛は驚愕に目を開きながらもすぐに水野からボールを奪おうと進路を塞ぐも、潔の体を利用して壁とし、凛の視界からボールが見えなくなった一瞬をついてロキの初速で抜き去った。凪は止められない事実を受け止め全速力で自陣へと走る。氷織が水野の元へと辿り着くもその前には既に中央ライン手前まで走っていた冴へと鋭いパスを出していた。
「お前もだ、氷織。視野が狭いぞ」
「ッ……結構な言いようやんか」
（てか、冴……自分で決める気ねぇな。あくまでも俺にパス出そうとしてんのかよ……謎なんだが）

本気の冴ならば既にペナルティエリアに侵入し、シュートの機会も増える頃合いだろうに、わざわざ相手側の選手との駆け引きを長引かせているあたり水野を待っていることが容易に理解出来た。
最高速はロキに及ばないながらも、爆発的な速度で水野がピッチを駆け抜ける。
「へいっ、フリー!!」
閃堂がゴール前で冴へと声を掛ける。しかし冴はチラリと視線を向けるとすぐに興味を失ったかのように視線を逸らした。
「ッ……おいっ！」
「熱の無いストライカーにパスなんか出す訳ねぇだろ」
「なっ……」
「死んでも御免だ。それなら俺が決めた方がマシだ」
右サイドを走る冴は烏の妨害をものともせずに芸術的なまでのドリブルテクニックで翻弄する。
（嘘やろっ!?　前半と比べもんにならん技のキレっ、本気ちゃうかったんかい!!）
餌をまかれ、本能的に前のめりとなった烏を華麗に舞いながら置き去りにし、時間稼ぎの成果もあってゴール前へと現れた水野に笑みを浮かべる。
「――最高だ」
放たれたパスは異次元なまでの曲線を描き、寸分違わずに水野が求める地点へと繰り出された。
水野は既にゴールの方程式が完成したのか飛び込んできた蟻生を無視する超速の超低空シュートを放とうとして。
――ねぇ。
視線を感じた。僅かな眼球の動きで捉えたのは右後ろでこちらを見やる丸い瞳。
――もっと見せてよ、師匠（マスター）。
止めに来る気配はない、止められる距離でもない。もはやランニングのような駆け足で凪はプレゼントボックスを前にワクワクを隠せない子供のように水野の一挙手一投足を観察していた。

「……はぁ」
飛び抜けて長い脚を伸ばし、長髪を靡かせながら蟻生が水野の前へと飛び込む。体のどこかに当てたら儲けものとでも言うように、自身のからだを壁として飛び込んだ。
脚の間は空白。予定通りの低空シュートを放てば得点は容易であった。
……だが。
「一回だけだぞ」
右サイドからの冴の鋭いパスに合わせてダイレクトシュートを放とうと、右脚を振り上げ、打つ――――的なトラップ。
「なっ……」
ボールの真下を掠らせるように振るわれたシュートは横方向の動きを完全に殺し、ボールを真上へと打ち上げる。それは水野の頭上からちょうど人が一人入るだろうかという高度。
「凪のトラップッ!?」
目を見開きながら蟻生は体勢を崩して地面に手を付き、ベンチに座る玲王は自分の宝物でもある凪の技が再現されたことに声を荒らげた。
初めて見る神業トラップに観客、実況が言葉を失っていた。
(……いや、止めれる!!)
そんな中、驚きを抑え二子が一歩を踏み出す。
(凪のシュートに比べてトラップが高い!! あれなら足元に落ちる前に二子が間に合う!!)
同じ視界を持つ二人だからこそ共有し合える認識。潔が読み取ったことを同じく気づいている二子は、水野との距離から到達時間とボールの落下を較べ僅かに此方に分配が上がると判断し、水野の足元へボールが到達する前に空中でヘディングによるカットを試みた。
凪だけは、観察を辞めることなく静かに水野の行動を追う。
脚を振り切り、ボールが上へと舞うのと同時に、流れるようにボールに背を向けた水野は、その勢いを止めることなく脚を振り上げて空中を舞い、上下を逆転させる。

「は？」
伸びた前髪により外からは見えづらい双眼が丸く開かれ、半開きとなった口から漏れ出すように弱い音が空気に紛れる。前へと踏み出した足からは自然と力が失われ、二歩目ではもう膝はたいして曲がらずに停止する予兆が感じられた。
理解不能の光景に時間が停止したように錯覚する中で、水野の周りは緩やかに時が進む。しかし我牙丸は水野とゴールに遮るものが全くなく完全に1対1のシチュエーションにより一か八かの直感による飛び込みを決意する。
（右、左、下、上？　いやど真ん中？　見ろ見ろ、分からん、直感信じろ！）
見て、見て、見て、見て……そして自分に対して右側へと飛び込んだ。
水野は、バク宙しながらも姿勢を崩すことは無い。まるで水野の世界だけが反転したかのように思えてしまう異次元の体幹。
水野はボールを一切見ることは無い。それは今回に関しても例外ではない。水野は我牙丸を観察し続ける。周囲に自身を害する存在がいないことは確認済みであるために意識をゴールのみに集中した。
そして、ボールに脚が触れる寸前、我牙丸が動く。それは奇しくも水野が放とうとしていた方向。野生の勘がシュートコースを察知しルートを塞ぐ。
水野は我牙丸が飛び出したのを目撃する。ボールに足が触れる寸前での軌道修正。脚を右へと振り横向きの回転をかける。そのシュートは後半戦一発目の直線とは全く別物の、弧を描き元々描いた道筋を否定するように我牙丸が飛び込んだ逆方向へと向かい、そのままネットを揺らした。
伸ばした脚は届かず、無慈悲に揺れるネットとまたしても沸き立つ歓声を耳にし、我牙丸は戦慄を隠す事無く水野を見やった。
『き……決まったァッ！　後半戦二点目、やはり水野悠ゥ!!　糸師冴からのパスに応える神業シュートを魅せました!!』
「二段式フェイク……頭上蹴（オーバーヘッド）!?」

後ろから走ってきていた潔は立ち止まるも、目の前で起きた異常なまでのプレーに脳が理解をしようとしない。
（トラップ高かったのはわざとなのか!?　いや、高くなったからオーバーヘッドに切り替えたのかっ!?　わっかんねェ！　分からないけど……）
「やり過ぎだろ……っ」
スタジアムの視線は、もはや水野に集中されていた。ダークホースは弱者に非ず、糸師　冴というビッグネームが霞む圧倒的存在感。既に、日本全国に水野悠の名前が刻み込まれ、『日本』コールと『糸師冴』を応援する声は、次第に『水野悠』一色に染まり、青い監獄への声援は掻き消えていく。
「なるほどね、そっちの方が早くボールに触れるし、効果的なのかもね」
そんな中。
「……うん、わかった」
白き天才は、傑物の神業を脳裏に焼き付け。
「凪……？」
「潔、俺にパス頂戴」
僅かに滲む汗をユニフォームで拭い、そのまま視線を自陣に戻りながら冴と拳を合わせる水野へと向ける。
「お礼……今度は俺が見せてあげるよ」
凪誠士郎が、産声をあげた。

【水野　悠】
誕生日　11月27日
年齢（学年）　17歳（高校2年生）
星座　いて座
出身地　不明
家族構成　父・母・姉・自分

身長　１８２ｃｍ
足のサイズ　２６．５ｃｍ
血液型　Ａ型
所属　青い監獄
利き足　左利き（右練習中）
好きな選手　特になし（怒られそうなので一応ノアって言っている）
サッカーを始めた歳　１２歳（中学入ってから）
二つ名的なもの　天才（アホ）
自分が思う自分の長所　人並みに勉強やら運動ができるところ（これを言うと毎回冴に殴られる）
自分が思う自分の短所　人並みにしか勉強やら運動ができないところ（これを言うと毎回冴に殴られる）
座右の銘『押してダメなら多分引き戸』
好きな食べ物　マグロ（美味いよねっ！）
嫌いな食べ物　わさび（お前は許さん）
ＢＥＳＴご飯のお供　納豆
趣味　アニメや漫画（時間が進むのが早い）
好きな季節　秋（気温が丁度いい。何より虫が少なく感じる）
好きなテレビ番組　手越がいた頃のイッテＱ
好きな音楽　ｓｉｓｔｅｒ，ｓ　ｎｏｉｓｅ
好きな映画　るろうに剣心（実写で成功しすぎだろ）
好きな漫画　「呪術廻戦」（もし転生したら十種影法術使いたいなああ！（　））
キャラカラー　水色
好きな動物　犬（吠えないタイプ）
好きなブランド　ミズノ（シンパシーを感じた）
得意科目　全体的にそこそこできる（全国模試満点）
何フェチ　太もも（なんかいいよね！）
されたら喜ぶこと　プレゼント
されたら悲しむこと　化け物を見る目で見られること（最近多い）

初めて告白されたエピソード　幼稚園かそこら辺
昨年のバレンタインチョコ数　袋二個分だから２個？
睡眠時間　８時間
お風呂で最初にどこから洗うか　前髪の生え際
きのこ派ｏｒたけのこ派　たけのこ
最近泣いたこと　タンスの角に小指ぶつけた時
サンタからのプレゼントは何歳まで　１２歳
サンタからのプレゼントで要求したのは　ＰＳ５（冴はキモイこと言ってたので鼻で大爆笑した）
地球最後の日に何をする？　テレビ壊してみたい
１億円もらったら何をするか　とりあえず震えて寝る
休日の過ごし方　ぼーっとする

【至宝の弟】は喰らいつき、【申し子】はピースをかき集め、【狩人】は時を待つ

もはや悲鳴にさえ聞こえるほどの大歓声がスタジアムを支配する。無名の選手だった水野悠は既に日本代表側のエースストライカーだという共通認識が観客たちの中で生まれている。

ＳＮＳのトレンドは『青い監獄プロジェクト』と『水野悠』に独占され、突如湧いて出たワールドクラスのストライカーの経歴を調べようとネットで検索するも情報が全く出てこないことに疑問を抱える者が後を絶たない。

沸き立つ歓声、水野悠の名前を叫ぶ声。それらが常人のそれよりも遥かに発達している聴覚が正確に聞き分け、悪意が混ざっていない純粋な賞賛の声だと判断すると、水野はこの大歓声が今自分が行ったプレーに対するものであると理解した。

「……気色悪い」

心底不気味であると眉をひそめ歓声をシャットアウトする。

今この瞬間、何もかもが不快だった。

こちらに向けられる好奇の目線、バケモノを前にしたような恐怖の瞳。そして、こちらを無遠慮に賞賛する何よりも多い声と色。冴が居なければ今すぐにでもここから出ていきたいほどには興味も関心もないほどに周りの視線に呆れ、不愉快極まりない。

ただシュートを決めただけ。

何も難しいことはしていない。相手の動きを読み、それ相応の対処をし、ゴールまで繋いだ、それだけの話なのに。

「おい」

極限まで周囲の騒音を遮断するも、至近距離からの声は耳が音の波を捉え、不遜極まりない俺様な声に視線を向けると案の定冴がいた。

「らしくねぇな。何イラついてんだ」

「河童」

「それは前からだろうが」

眉を顰める冴が片手をポケットに突っ込みながら相変わらずの瞳で水野を見やる。
「……この歓声は当然の結果だ。それだけの事をお前はした」
「違う」
いつもの巫山戯たような様子を見せず、冴の言葉に食い気味に否定した水野は自身に向けられる視線を一瞥すると色の篭っていない瞳を浮かべた。
「こいつらは『本物』を知らない」
その言葉は、この場で唯一冴にのみ伝わる意味を持つ言葉。その意図を正確に汲み取った冴は深くため息をつくとさらに水野を見つめる。
「あの人は別格だ。アレを引き合いに出したらキリがねぇぞ」
「そういえば冴、あの人にボッコボコにされてメンタルやられてたな」
「その後お前もぶっ倒れてただろうが」
そんなことあったっけ、とようやく調子を戻しつつあるようにケラケラと笑う水野はしかし息を吐くとマシにはなったとはいえ失望の色を含めた顔を浮かべる。
「犯罪者予備軍と年齢詐称の試合でここまで盛り上がるかね」
「ブレねぇな。今の時間返せ」
いつも通りの馬鹿さ加減に思わず笑いが込み上げてくる。少しは水野の中から苛立ちや失望の念が取り除かれたことに柄にもなく安堵するも、しかし水野の中での【天才】の定義が変わっていないことに僅かな焦燥を見せる。
(何やってやがる、凛)
後半戦が始まってからその存在感が全く感じられない弟へと視線を向ける。
有り得ないと切り捨てつつも、心の端では『もしかして』という期待を滲ませる弟は、見るからに苛立ちと焦りを表しており自分自身への怒りを隠せていなかった。
(———くそっ、クソッ、糞ガッ!!!)
前髪を右手でかきあげ、歯を食いしばりギシギシという音を響かせ

ながら凛は血走った目で地面を見つめ先程までの自分の体たらくに殺意を抱く。
未だ後半始まって僅か。故に汗ひとつかいてない自分の体は正常なのだということすら自分がたいして動けていないことの裏付けなのだと理解する。
既に二点。このわずかな時間で水野悠に二点決められている。それほどに濃密な時間が過ぎ去ったが、その中で凛が出来たプレーは僅かなものであった。
何も出来ていない。脅威とさえ捉えられていない。兄である冴の以前会った時と遥かに卓越したドリブルテクニックに触れることも抜くことも叶わない。
ブルーロック内のランキングにおける1位と2位。たった一つの数字の差。数字にしてみればただそれだけの些細な違いは、しかし何重にも重ねられた壁が両者の間には存在する。
――あの眼だ。
凛のことを捉えようとしないあの瞳。そこいらに存在している有象無象と同じ取るに足らない存在として見下してくるあの瞳が何よりも憎らしい。
（クソ兄貴の……糸師　冴が認めたストライカー）
かつての幼い頃、兄弟で同じチームに所属してピッチを駆け回った日々。その時に冴がよく見せていた表情が、今は別の人物に向けられていた。
「気取ってんじゃねぇぞ……ッ」
観客の声援、歓声は止まらない。鳴り止まない水野悠を称える声が黒板を爪で引っ掻いた音のように心底不快なものへと変わっていく。
『ここで青い監獄のメンバーチェンジです！　千切　豹馬、雪宮剣優と交代するのは御影　玲王、馬狼　照英。新たな風を巻き起こし、水野悠の独壇場となったこのフィールドを壊せるか!!』
何もしなければ肌寒い季節特有の気温が、まばらな観客の歓声が、頬を伝う汗が。そして何より、弱い自分自身が。
全てが憎い。不愉快極まりない。奥歯が砕けるほどに噛み締め、血

が出てしまうほどに拳を握りしめる。
（グチャグチャにしてやる）
思考が深くなる。まだ、歓声が聞こえる。
殺意が湧き出てくる。芝を踏む足音が聞こえない。
脱力。目標を設定。それ以外の全てを無視して完遂へと足を向ける。
歓声は聞こえない。

「おい。お前の弟どうなってんの？　やってる？　やっちゃってる？」
「あ？　あ～あれか。癖だ」
「やめさせろよ。なんか教育上宜しくないぞ。いつ職質来るか……いや、クスリ関連で監獄に呼ばれたのか……？」
「馬鹿言ってんなよ馬鹿が。まだまだ点決めろ」
「命名、『ベロりん』」
「お前の方がきめぇ」
「あいつめっちゃこっち見てるんだけど。なに、俺の事食べようとしてんの？　あんなにヨダレ垂らして。俺ノーマルよ？　一生分自分の好み言ってる気がするんだが」
「ご指名だ。相手してやれ」
「え」

試合が再開される。新たに馬狼と玲王を加えた青い監獄ボールからの再開。既に点差は1点に縮められ、それにかかった時間があまりにも少ない。慎重に、しかし確実に点が欲しい潔達は潔から凛へとボールが渡り、試合前に何回も繰り返されたパターン練習による攻め方を実行しようとする。
「はっ!?　おい、凛ッ!!」
明らかに様子の可笑しい凛は潔からボールを受け取ると、作戦を全て無視して一直線に駆け出す。その瞳には潔達は映っておらず、辛うじて二人、正確に言えばただ1人の全身を映し出し、破壊衝動に駆ら

れて突き進む殺人マシーンと化した。
「気ィ済むまで相手してやれ」
「おいこらチビ兄貴」
「お前と1センチも変わらねぇだろうが」
　冴が距離をとる。決して前へは進まない。ただ2人の攻防を邪魔せず、見届けられる距離へと下がる。
　舌を出し、ヨダレを垂らしながら突撃してくる凛を捉えて溜息をこぼしながら水野は大幅にアップした凛のパラメーターをこちらに向かってくる動作から正確に分析し、脳内で割り当てていたステイタスを更新する。
（トリガーが分かんねぇな。監獄にいた時も二回くらい見たし。お兄ちゃんしゅきしゅきだいしゅきで話せないじまいだからストレス爆発でもしてんのか？）
「まあ、どうでもいいか」
「コロスッ!!」
「おい刑務所行きだろこいつ」
　今にも殴りかかってきそうなほどに向けられてくる殺意を飄々と受け流した水野は全く焦りを見せず、いつも通りを遂行する。
　ボールとの間に体を潜り込ませ壁を作り、隙を見つけ出して抜き去ろうとする凛のドリブルを難なく止める。しかし冴から告げられた「気が済むまで」という曖昧な条件をとりあえず守るかとボールには触れることなく、初期位置から大して凛を前進させないことに努めた。
「邪魔すんなよ」
　明らかな手加減。取れたボールを取ろうとしない水野の姿勢に凛の殺意が膨れ上がる。ヘルプに入ろうとする日本代表のＦＷを冴が牽制し、凛と水野二人だけの空間を保つ。
　腕を伸ばし引き離そうとする凛の手を難なく掻い潜り、逆にこちら側から凛の体の前に腕を伸ばして進路を塞ぐ。
　後ろに控える潔は決してこのバトルに入り込もうとはしない。超越視界を手にしたとはいえ未だに未完成であり、個人の技量も水野の

短期間の指導で向上したとはいえまだこのステージに登り詰められるほどではない。
そして、他ならない未完成の超越視界による情報収集により、この二人の間に割り込むことが最善ではなく、起こり得るであろう事象に備える方がボール奪取の可能性が遥かに高いと計算していた。
素人目には、２人が繰り広げる一進一退の激戦。フィールドに集まる選手、控え達からすればこの攻防はもはや児戯のソレに等しいものであり、現存戦力で最も強く原因不明の強化が入った凛を苦もなく手玉に取る水野の圧巻のプレーに視線が吸い込まれる。
凛の殺意が留まることは無い。膨れ上がる殺意、苛立ち。それらは水野に……そして、いつまで経っても相手にならない自分へと向けられていく。
「気が済むまで、ねぇ」
今まで全くボールを奪う気配のなかった水野は、凛の瞳を見つめたままに足を潜り込ませていとも容易く凛の保持するボールを奪い取ると後退して凛と少しばかりの距離をとる。
呆気なく奪われたボール。それに放心することなく、凛は目の前にいる存在を駆逐するために目を血走らせて見開きながら獣のように走る。
「来い」
それに合わせて水野も駆ける……いや、そんな表現ではない。駆け足。とても相手と１ＶＳ１（デュエル）をしている人間の走り方とは言えるものではなかった。
遅すぎるドリブル。今まで見せてきた卓越したテクニックによる高速ドリブルとは違う誰でもボールを奪えてしまうようにさえ見える巫山戯たもの。
凛の血管が膨れ上がる。掻き立てた爪で水野を引き裂きたい衝動に駆られながらも、障害へと向けられる殺意を全てサッカーへと集約させて水野のサッカーを壊し、間接的に殺すことに全神経を注いだ。
（コロス、コロス、コロス、コロス、コロスッ!!）
叫び声なのか、奇声なのか。はたまたなにかの呪言でも発している

のか定かでは無い声を発しながら凛が水野と接敵する。既に足を伸ばせば届く位置。しかし水野のドリブルの速度が上がる様子は全くない。

走りも遅く、ドリブルも遅い。今までのものからすれば止まっているとさえ感じるほどの緩急。凛は容易にボールを奪い取り、手を抜いた水野を置き去りにしてゴールへと向かう、はずだった。

「取れ……ない!?」

閃堂の驚愕の声が空気に紛れて消えていくと同時に。

「……あ、エ……?」

凛の重心が疎らに揺れ、力が抜けたように膝から崩れ落ちる。

「――満足か?」

そう言って、地面に手を突く凛を見ることなく水野は冴へとパスを出した。

「もういいだろ」

こちらを一瞥する冴の存在にすら気づかずに、凛は前を向く水野を見上げる。

「這いつくばってろ」

立ち上がろうと立てた膝が面白いほどに折れる。力を込める腕がぐにゃりと曲がる。まるで全身がバラバラに砕け地面に散りばめられるような錯覚。

身体が動かない。起き上がろうとする行動の全てが強制停止される。既に水野は遠くへ走り、倒れ伏す自分の横を次々と日本代表達が駆け抜けて行く。

(――何してんだ、俺は?)

悪寒が背筋を走る。震える手を顔の前へと出して、自分の顔面を鷲掴みにした。

(アイツ(水野)に負けて……何をした?)

試合は尚も続いている。冴からのパスを受け取った水野は二人のDFを前にすると容易に抜けるにも関わらずフリーで中央を走り込んでくる閃堂へとパスを出し期せずして青い監獄チームの意表を突くという形となる。

ミシミシと頭蓋が軋む程に自身の顔を握りしめる凛の瞳は今まで以上に血走る。
（負けを、認めたのか？）
ボールを受け取った閃堂はそのままフリーの状態で突き進みシュートを放つと横から切り込んできた玲王がスライディングでシュートを阻みさらに冴の表情が歪む。
呼吸は荒く浅い過呼吸にも似た症状を発生させて水野に対して向けていた殺意の全てを先程の自分自身に向ける。
（こいつには勝てないと……折れたのか？）
ルーズボールは氷織へと微笑み、烏へと鋭いパスが渡る。コート全域の情報を常に取り入れ未来予知に迫る計算を続ける潔を狩るために馬狼は相手ではなく潔をマークし既に世界に対抗し得る武器を手にした潔に触発されて馬狼の才能が開花の兆しを見せる。
凪はこのプレーでゴールを決めるために潔の視界を参考にしようとするもしかしそもそものプレースタイルが違いすぎることからやり始めてすぐにコート全域を常に把握することができずに特定の選手の行動把握に全てを注ぐ。
誰よりも早く自陣への帰還を果たした水野が棒立ちで顔を握りしめる凛の横を通り過ぎる。チラリと横目に凛の様子を窺う。興味なんてない、ただの気紛れ。しかし水野は自己嫌悪に陥る凛の内側に秘められた潜在能力（ポテンシャル）の片鱗を捉えて僅かに目を見開く。
このワンプレー中に再起することはないと想定し、垣間見えた片鱗にパラメータの上昇幅を大幅に変更。成長スピードの予測、この試合中に至るであろう地点を定義するが現状最も脅威となるであろう凪へと意識を切り替えた。
????
ボールを保持した烏がセンターラインを越えようとしていた。
（――詰みか）
潔と凪が先頭を走り潔に追随するように馬狼が追う。
（――――あと3点欲しい）

高速で切り替わる攻防に観客のボルテージは後半戦の中盤とは思えないほどに跳ね上がる。観客席が揺れるほどの熱量はピッチにいる誰にも届くことは無かった。

焼き切れると錯覚するほどに脳を酷使している潔は情報分析をしながら勝利条件として必要になるであろう得点数を考える。

3点――――これは潔が想定する、水野が追加で得点するであろう最低点。残り時間とチームの状況。水野や糸師　冴に疲労が見られないことから最低でも3点は取られるであろうと考える。

陀来が烏へと付き、煩わしそうに顔を歪めるとすぐにボールを回して回避する。そのボールが潔へと渡ると後ろに控える馬狼の動きが活発化。

（馬狼は多分、『潔（おれ）を喰うこと』しか考えてない。絵心さんの指示だろうし馬狼本人のポテンシャルが最大限に発揮されるのがそれだ。だから、ここが突破口！）

潔はゴールに繋がるピースをかき集める。その障壁となるであろう二人……水野と愛空が最終防衛ラインに佇む。

（今の俺じゃ一人で愛空を抜くのはまず無理。だから俺は――）

愛空が潔の進路を塞ぎにかかる。潔の背後からは仁王がデフォルトの厳つい顔で挟みこもうとしていた。

愛空と潔の間に出来る空白。人1人は容易に入るであろうそのスペースを確保した潔は、攻めあぐねている風を装い自分の体の少し前へとわざとボールを放す。

瞬間、黒き狩人が二人の間を潜り抜け、味方であるはずの潔からボールを奪い取る。

（馬狼にボールを奪わせる）

「な――!?」

味方のボールを奪い取るという暴挙に愛空が唖然とする隙をついて、前半戦まるまる獲物をお預けにされ空腹状態の獣が牙を剥く。

ただの暴挙を行うだけでは無い、実力に裏付けされた本物のドリブルテクニックを発揮。パスを警戒する相手を嘲笑う独断専行に日本代表のＤＦの思考が乱れ混乱を誘発していく。

潔は馬狼を追わず、待つべきポジションへと向かい、凪に指示を出し時を待つ。
「こいつっ、パスの選択肢がねぇのか!!」
前へ、前へ。味方は視界に入らず、ただひたすらにゴールに飢えた狂犬は獲物を前に『待て』は出来ない。
あまりにも無謀。ゴールの確率が圧倒的に低いであろうほぼ真横からのシュート。強引に相手を振り切り放たれたシュートを見ることなく、水野は別地点へ駆け出す。
「舐めんなッ」
キーパーが馬狼のシュートに辛うじて触れ、ポストへと当たり不規則にボールが跳ね返る。苛立ちに叫ぶ馬狼を横目にそのボールが舞い落ちる『運』に恵まれたのは……潔　世一。
潔とゴールの間に光が差し込む。それは潔が当初から想定していたゴールビジョンのひとつ。緩やかな放物線を描くボールは潔の足元へと舞踊り、左足を踏み込みシュートモーションへと入る。
「――前半戦の時からそうだが。やっぱお前が一番危険か」
ビジョンが乱れる。ゴールへと繋がる光の道がノイズを走らせて掻き消えていく。スローモーションにも似た極限状態の中、現状最も危険な香りを察知した愛空が横から迫る。
馬狼の侵入を許した直後、馬狼のシュートが決まらなかった次に脅威となる存在へと真っ直ぐに走り込んできていた。
愛空は潔のダイレクトシュートを止められることを確信する。
「そりゃ、アンタなら来るよな」
それは潔も同様。メインプランが潰えたことで、用意されたサブプランが光る。
足元へと落ちてくるボールをトラップ。愛空に触れられないように体で壁を作り、待機させておいた凪へとパスを出す。
「まじかッ」
「待ってたよ」
凪自身が望む理想のゴールと自身を結ぶ角度、距離。凪のポテンシャルが跳ね上がる。凪の前方に備える陀来がシュートコースに割

り込む。振りかぶられた凪のシュートはそのまま止まることなく、スライディングで迫る陀来の脚に止められる……ことは無く、凪の脚がボールの下部分を掠らせてボールは宙を舞う。
「なっ――」
オリジナルは凪であるものの、先に水野のプレーを見ていた陀来含めた日本代表勢は水野と同等の神プレイを披露され驚愕に目を見開く。
宙を舞い僅かに右側へと逸れたボールの落下地点へと即座に移動し、凪が再びシュートモーションへとはいるもシュートフェイクによる時間経過により間に合った閃堂が背後から迫る。
二回目。再びボールの下を掠らせる神トラップに歓声が木霊する。ギリギリだったが故に飛び出し足を突き出した閃堂は体勢が崩れて次のシュートに備えることが出来ない。
「――俺、最強だ」
水野の真似事はしない。この距離でのオーバーヘッドは成功率が低いと判断するが、可及的速やかなシュートが求められることもあり飛び上がり足を振り上げて斜め上から下に振り下ろすようなシュートを放つ。
ボールの芯を捉える。現時点で凪が放てる、最速で最もシュート確率が高いであろう流れ。潔が求める結果以上のパフォーマンスを凪がみせた。
「自分に酔ったな、凪」
どれほど人間離れした神プレイを見せられたところで、シュートが決まらなければそれに意味はなく。
全てを嘲笑うかのように、影から死神が鎌を振るう。
「二度目のトラップ。あれは必要なかった。あの時点で、シュートコースはあった」
目を見開く凪。気配を完全に消していた死神の接近に今まで気づくことはなく、もうじきボールに接触するであろう脚の振り切りを止める手段を持ち得ない。
放たれた強力なシュート。凪の蹴りにより生じた音は刹那のうち

に別の音で掻き消され、長く伸ばされた脚により弾かれる。
馬狼の独断専行から始まった奇襲。その結末を読み切った水野が凪の成長を感じさせる一手を封じ込めた。
今のシュートに至るプレーは過去最高のものだと凪は自己評価を下し、即座に切り捨てられる。未だ届かない壁に戦慄を覚え表情が固まる。対する水野はゴールの危機を脱却するべくシュートを止めたにも関わらずその表情は苦い。
「ちっ……やっぱ詰みか」
潔がかき集めたピースにより完成しようとしていた盤面。そこにやはり不確定要素である水野の介入により穴が出来、潔が描くゴールビジョンが底をつく。しかし、さらにその先を見据える水野は既にこの攻防が詰んでいることを察知していた。
「貪るぜ――ッ!!」
盤外の一手が投入される。潔が描き、理想とした盤面を破壊する。進行を止めようとする相手を引き剥がしながら、運に頼らずに潔を喰らうことに全てを注ぐ狂犬が弾かれたボールを強奪する。
「馬狼?!」
凪で決め切る思考だった潔の予想外。水野を除き、全ての人間の意表を突く馬狼は引き締まった筋肉と卓越した技術によるシュートを放った。
開かれたシュートコース。そのラインに沿って放たれた黒き一撃。敵味方を問わずして喰らい尽くした獣の集大成は、ゴールという形で結果を残した。
「――ウラァァァァァァァァァッッ!!」
狼の雄叫びが鳴り響く。その声はスタジアムを揺らす大歓声に負けることなく空気を揺らし、電光掲示板に記載された数字をひとつ変えた。

青い監獄　ＶＳ　Ｕ２０日本代表
５対３
試合は加速する。

【至宝】の一撃、【悪魔】の胎動

青い監獄ＶＳＵ２０日本代表。新世代１１傑でもある糸師　冴を織り交ぜたこの試合は地上波で放送され、日本国民の話題をかっさらっていた。

そしてそれは、日本に留まる話ではない。

配信サイトを通じて、世界各国に配信されているこの試合。サッカー大国などからすれば小さな島国の国内試合に興味のそそられない者たちも多い。中には糸師　冴のネームバリューから少しの興味が湧く選手たちも居るだろう。

……世界を最前線で戦う選手は、世界を揺るがす選手の胎動を目撃する。

「ユウ……あハッ、ユウっ、ユウ!!」

将来有望とされる未だ若き少年は、かつて見た光景を思い出し頬を赤く染めながら画面に食いつく。

「……『ミズノ』、だと？」

世界一という評価をモノにしたストライカーは、画面上で圧倒的な存在感を放つ選手の名前を聞き、既視感を覚える。

「――素晴らしい」

一時帰国した青年は、数日前に感じたかつてない興奮の要因となった青年のプレーに目を離せない。

「あちゃー、詰めが甘いなあ」

飛行機の中でスマホを眺め、馬狼が点を決めた場面を目撃した才能の権化はケラケラと笑いながら水野のプレーを見守る。

そして、日本。

「ふふっ」

ソファに座り、ぬいぐるみを両腕で抱きしめながら目の前のテレビ画面を見つめる。右上には『ＬＩＶＥ』の文字、そして両者の点数と、一度ゴールが決まったことにより攻守が切り替わる間の時間に解説がリプレイを見ながら弾んだ声で水野悠の神プレーの数々を振り返っていた。

「真面目な顔……ふふ」
テレビに映る彼の表情は真剣そのものだったのだが、内情をなんとなく察している少女は笑みをこぼす。
美しい栗毛の髪は腰まで伸びている。画面に映る水野を見る少女の微笑みは万人を虜にしてしまう甘い甘い劇毒。
「頑張ってください、悠くん」
淹れたばかりであることから湯気が揺らめく紅茶の注がれたティーカップを持ち上げて口に運ぶ。ふぅ、と一息着いた少女の瞳は、慈愛のこもった眼差しを画面に映る青年へと向けていた。

「おい????
歓声がスタジアムを揺らす。ユニフォームを脱ぎさり観客を煽る馬狼の元へと青い監獄側の選手達が集まり覆い被さる。この1点は前半のものよりも価値があり、士気を向上させるのには十分すぎる起爆剤となっていた。
「あの時、なんでパスを出したんだよ」
愛空は流れる汗を拭いながら、好戦的な笑みを浮かべて青い監獄の盛り上がりようを眺める。仁王を始めとしたDF陣は馬狼を止めることが出来なかったこと、そして凪に出し抜かれた事実。閃堂は水野に齎された大チャンスをものに出来ない自分自身を強く責める。
汗ひとつ流さない水野は疲労から来るものでは無いため息を零し、こちらも疲労を見せない冴が不機嫌であることを隠さずに水野へと詰め寄る。
理由？　と小さく呟く水野は少し考える仕草を見せるとなんてことないように答える。
「ボール欲しそうにしてたしな」
「……はぁ」
一年という時間を過ごした事で水野の性格や思考をある程度は理解しているために冴はこれ以上の追求が無意味であり、水野が考えを

変えることは無いことを悟る。
「あのヘタレが外した瞬間、俺らの盤面は詰みに限りなく近くなってたんだ。決めれるゴールは自分で決めろ」
強引に行けば水野自身が決められた局面。水野との一年の交流、僅か一週間ながらに冴の記憶に刻まれた理不尽の象徴たる才能の権化との邂逅。それらを経て、冴のスキルは磨きがかかっており、水野が視ている世界に限りなく近いものを視ている。
故にこそ、決められたシュートを決めずに客観的に確率の高い閃堂へとパスを回した結果が失点に繋がったという事実を冴は認めたくはなかったのだ。
冴の叱責。それに全く反応を示さない水野を見ると珍しく考える顔を作っている。現状で水野が悩むこととといえばこれくらいだろうと、理解者である冴は正確に水野の思考を読み取った。
「『あの人』なら止められたってか？」
「キッショ。なんで俺の考えてること分かんだよ」
「俺からすれば、お前の思考は読みやすいんだよ」
上裸になった馬狼がイエローカードを貰い、所々から笑い声が聞こえる。青い監獄のベンチではアンリが表情を綻ばせて喜び、絵心は予定調和であることで気持ちを抑え、次の盤面を正確に見つめる。その背後で、褐色の悪魔のボルテージが高まりつつあった。
「凪のシュート。あの人なら弾くなんて愚行はしない。仮に弾くとしてもそれは味方にわたる最善の箇所にボールを落とすはずなんだよ」
先程のプレーの甘さに嫌気がさす。冴はあの人ならやりかねないなと考えながら眉をひそめて息を吐く。
(『あの人』の影響が大きすぎるか。悠の中での揺るがない絶対的な『天才』の定義。『天才』とはあの人のことであり、それ以外は全て『凡才』。自分と相手の実力を正確に把握出来ているにもかかわらず決して自分を『天才』だと認めない理由。あまりにも圧倒的な才能を見てきたが故に世界トップの実力を持っている自分自身でさえ有象無象だと思っている)
まあ、過度な勘違い云々はこいつの生来のものだろうがな、とシリ

アスな空気漂う水野の首元を右手で鷲掴みにして引き摺り自陣へと戻る。
ぐえっ、と蛙の鳴き声のような音が水野の口から漏れ出る。それを聞いても冴の表情は変わらず無表情でむしろ力を込めていった。
「またパスでも出す気か？」
「ケースバイケース」
「だろうな」
水野悠は青い監獄でも異質。こいつは決してゴールに飢えたエゴイストでは無い。気分次第でパスも出すだろうし、特に何も無ければ自分で決める。
ストライカーとしての矜持は持ちつつも、しかし絵心　甚八の望む究極のストライカーとは少しズレた位置に存在する別種の究極の一。
それを理解した上で、尚も冴は水野を王にすると決めた。この性格を矯正しようとは思っていないし、冴の中では水野は特別枠。肯定はしないが、否定もしないという少し歪な関係性。
まあ、そんなことは関係なく。
U―20日本代表FW陣の体たらく。既に冴の許容範囲を超えつつある失態の数々は、もう少しで爆発しようとしていた。

馬狼へと乗りかかる選手達から少し離れた地点。
凪は神がかったシュートを無理な体勢で放ったことにより体勢を崩し、尻もちをついた状態から今の今まで地面に座り込んだままでいた。
片手で口元を覆い、騒ぐ観衆の姿は映らない。
（あれが今の俺の最高到達地点）
文句無しのパフォーマンスだと思っていた。実際に今もあれ以上は無かったと感じている。しかし、師匠たる水野からの辛い指摘を受けて自身のプレーをフィードバック。
（1回目で穴……あったか？　いや。確かに今思えば無いとも言いきれないけど）
うっすらと見えた道筋。しかしそれはあまりにも細く弱く輝いた

道筋であり、わかっていてもそのルートを通せるかと聞かれれば、答えはノー。
当事者ですらないにもかかわらず、一瞬でゴールコースを見極める観察眼と、その無理難題を遂行出来てしまう技術。確かに踏み入れた領域には既に水野の姿はなく、姿が見えないほどに遥か先を歩き続ける男との距離は計り知れない。
「――潔には見えてた？　水野と同じ景色」
独り言のように呟かれた問いかけはいつの間にか隣に歩み寄ってきていた双葉のような癖毛が印象的なエゴイストの耳へと届く。凪からの問いかけに考える素振りも見せずに「いや」と言い自陣へと戻る水野の背中を見る。
「俺が見えてたのは凪のフィニッシュまで。水野の介入は完全に想定外だったし、なんなら水野は馬狼の強襲もわかってた風だった……てか、やっぱバケモンだよ、あいつ」
「え？」
「凪のシュートに間に合う脚力もそうだし。あれは本当に紙一重。体勢だって崩れながらのシュートカットだったのに……あいつは馬狼のシュートをあえて触らなかった」
きょとんと目を丸くする凪を置いて潔が説明を続ける。
「あいつは馬狼のシュートにつま先なら触れたんだ。でも、伸ばした足を止めて触るのをやめた。多分、キーパーの位置と馬狼のシュートコース。そして、仮に水野がボールに触れた時のシュートコースをあの一瞬で計算して最もゴールを防ぐ確率の高い手段として、伸ばした脚を止めたんだ」
コンマ数秒。ゴールが決まり充分な思考時間を与えられた今だからこそ気づけた異常に潔の表情は硬い。潔の説明を聞いて凪は驚愕を通り越して若干引いていた。
「え……やっば。ていうかキモっ。人間やめてない？」
「最初から分かってたことだろ。水野は既に世界トップクラスの化け物だ」
伸ばされた潔の手を取り立ち上がる凪は現時点での最高のプレー

を行ったことによる興奮状態から乱れる息を整える。
（ていうか、状況が厳しすぎる。俺の超越視界も完成して無いから試合時間フルで使えるわけないと思ってたけど。オンオフを切り替えてももう限界が近い。明らかに精度が落ちてきてる）
身体的疲労以上に、他の選手以上の眼の行使と思考加速による精神疲労がピークを迎えようとしていた。
（後半からとはいえ、俺以上の情報処理を行っているはずの水野がなんで疲労見せないんだよ。汗ぐらい掻け）
悪態をつきながら、視線を冴へと変える。
（一番予想外だったのは、糸師　冴が想定の遥か上をいく実力だったこと。まだ本気を見せてないだろうし、このフィールドで水野に限りなく近い視界を共有してるのはあいつ。ＭＦだからか、水野に拘ってるのか、積極的な行動は少ないから助かってはいるが）
要所要所で垣間見える冴の実力を考慮し、いつか見たはるか上の高みと比較した結論を下す。
（まず間違いなく――世界選抜の誰よりも、糸師　冴の方が強い）
潔からすれば、両者ともに数値化不能の実力者達。下から見上げることから高さの違いは明確にはできないが、どちらが優れているのかは自然と結論が出た。
冴本人がＭＦを強く希望したことにより、新世代１１傑のＭＦの座に冴は君臨したのである。しかし、本来なら世間の評価では冴はＦＷ……ストライカーとして新世代１１傑のエースに君臨する筈であった。故にこそ、冴はＦＷとＭＦ、二つの技量が世界トップレベル。
潔達が知る由もない、『あの人』との僅か一週間の邂逅と水野悠という運命との出会いが、冴を最前線で戦える選手へと昇華させていた。
試合が再開されようとしている。それぞれが任意の位置へと戻った辺りで、ようやく一名が動きを再開した。
深呼吸。そして一歩踏み出す。ただそれだけの動作で、遠く離れた位置にいる愛空は息を呑んだ。
「まじ、か……!!」
溢れ出る殺意、燻る闘争本能。自分の枷を外し、実力を数段階上へ

と跳ね上がらせるトリガーたちを、今は不要だと排除する。
「凛……だよな……」
深呼吸。内側に潜む己の天井を定める不純物を体外へ放つように凛の思考がクリアになっていく。
いつの間にかボールは足元に。そして隣に立つ潔の僅かに緊張している声を聞き、歓声に消えていくほどの小さな声で「……あ？」と答えると、前髪をかきあげてなんてことないように潔へと視線を向けた。
「他の誰に見えんだよ。俺は、糸師　凛だ」
凪の覚醒は点に繋がったとはいえ水野に届かず。第一の刺客は狩人の乱入により捕食された。
そして今。
本来ならば、まだ少し先で至るはずだった境地へと凛が到達。
第２の刺客が牙を剥く。
「おい、悠」
試合再開直前、不機嫌である様子を隠そうともしないワガママ王子こと冴からの呼び声を聞いた水野は能天気に「なんじゃい」と返す。
「ストレス溜まってしょうがねぇ。交代だ」
「なに、お前監督の権限も強奪しちゃったの？　おれ強制交代？　まあいいけど」
「ちげぇよクソボケが」
慣れたように言葉を返して首を鳴らす。
「一点俺に寄越せ」
「おけまる」
相変わらずの無表情で死んだ目つき。しかしストレスから怒りなどの感情が分かりやすく見える。
威圧感の籠った口調で命じてくる冴の様子をいつも通りの事だと特に狼狽えることもせず水野は軽くストレッチをしながら盤面を見据えた。
（あいつを入れてくるとしたら、あと二点決まったくらいか。まあ、どうでもいいが）

潔の隣に佇む凛の変貌を観察し振り当てたパラメータの調整を行う。
（ポテンシャルはあるっちゃあるが。まあ想定を超える程じゃない。正しく導けば伸びるが今じゃないな。冴もそれがわかってるからブラコンのくせに弟にだいしゅきホールドしに行かないんだろ）
ドーム状に囲まれているスタジアムなので風が吹くことは無いものの季節の肌寒さは感じる。ようやくその寒さがマシになってきたこともあり水野のボルテージが一段階上がった。
試合が再開され、水野から閃堂へとパスが渡る。冴ではなく自分へとパスが出されたことに驚きを顕にしながら切り替えてプレーを再開。冴と水野はあまり前に出ることなく本来の日本代表ＦＷ達主体に攻めに出る。
正確なパラメータ調整の為に一時的に場を俯瞰。パスが渡ったとしても一人攻めることなくまたパスを返しを繰り返す。
（だいたい掴んだ）
修正が完了したのは、凛が相手のパスをカットした時だった。
冴の機嫌が最底辺まで下がりつつあった。
ボールを受け取った凛は先程までの暴走を見せず、しかし想定よりも早いテンポに潔は苦しい表情で付いていく。
（――このぐらい付いてこい、って顔してやがるっ。相変わらずクソ生意気）
高速のパス回し。潔、凛、凪の三角形での陣形。その脇には烏や蜂楽が付随しており無限のパターンに対応する。
蜂楽がサイドから切り込む。高速シザースなどテクニカルなプレイで場を魅了し自由なサッカーで相手を翻弄する。
そしてその五人の連携の中に、異分子として組み込まれる馬狼。先程の暴力的なまでのプレーを見ている日本代表側は当然警戒。余程のことがない限り馬狼の選択肢にパスがないことは共通認識となっていた。
「先に行ってるぞ」
ディフェンスに回る選手達の中、タイミングを見計らった冴が飛び

出し、潔達の横を素通りして前線へと飛び出る。潔の中での計算不能の異分子である冴と水野。その行動を無理矢理そういうものであると定義して予測を行うも疲労からか精度が低下。

常に全体の情報を取り入れようとする潔の呼吸は早まる一方であり、アドレナリンの分泌により騙し騙しのプレーが可能となっているがいつ倒れてもおかしくはない。潔の眼の補助として氷織が控えるが一人付いていることから容易に動くことが出来ずにいた。

凛の覚醒――厳密に言えば成長過程だが――により広がるゴールへの選択肢。明確な一本が描けずとも可能性の見える道筋を虱潰しになぞっていく。潔へ、烏へ、凛へ。ボールが目まぐるしく回り、流石の日本代表ＤＦも対応が困難であった。

フリーの凪へとボールが渡る。潔のビジョンにノイズが走る。いち早く凛が察知して自陣へと振り返り走り出す。

「――え」

触れたボールに感触はなく、何かが横を通り過ぎる風をふわりと感じ取った凪は自然と足元へと視線を下ろすと、あるべきボールが無いことを確認。そして確信のないままに後ろを振り向けばそれが当たり前であるかのようにボールを保持する水野と、遅れて走り出す凛の姿。

さらに遅れて状況に気づいた潔が歯を食いしばりながら切り返し足を酷使させて戻る。

（いつの間にっ……つか、どこに居た!?　最警戒である水野の位置取りは常に把握するように動いてたのに！　真正面から突っ込んで凪が気づかない自然な足取り、気配の消し方が異常すぎる！）

僅かに後方に居た馬狼が止めに入る。水野は足元を全く見ないドリブルでルーレット。激しく変わるドリブルは、魔法のように馬狼の視界からボールを消す。

唖然とする馬狼を置き去りに前へと踏み出し、弧を描き馬狼の背中側へと落ちるボールを足に吸い込ませながらトラップし、速度を上げながら駆け出す。馬狼の足止めにより僅かに距離を縮めた凛だが障害物を無くし走り出す水野との距離は秒ごとに広がり、ドリブルをし

ている相手の方が速い事実に舌打ちを零す。
水野の味方である日本代表達も水野の驚異的な特攻に追いつくことは出来ず、前を走る冴は離れていることから水野単身で青い監獄の待つ敵陣へと突っ切る。
（寂しい）
後ろを見ずに前へ前へと走りパスを待つ冴の後ろ姿を見ながら場違いにそんなことを考えてみたり。
バックパスは凛達が潰すことを考慮して二人で水野を囲う。それに対し水野は誰も居ない左前へとボールを蹴りだし自身は右側から抜き去る。
あらぬ方向へと蹴り出されコート外へ出るはずだったボールは驚異的なスピンにより最高速で走る水野の元へと舞い戻り、フォームを崩すことなくボールを拾いドリブルを再開。
冴は既にゴール前へ。そして難なくラインを越える水野は自然と交差する視線により冴が求めるパスを実現。ＤＦがポジションにまとまることができる直前に冴の足元へパスを出す。
一度のトラップを挟み、ふわりと上がったボールに向けて左足を構える。
「させっかよ!!」
玲王が走り、ボールをトラップした冴にプレスする。その対応が想定内だったのか焦る様子を見せず冴はシュートを中止し軽くボールに触れて前へと押し出す。ボールカットが叶わなかったことに声を漏らす玲王。しかし僅かな時間の遅延から蟻生が冴のシュートコースを塞ぐ。
「――追い付いたっ!!」
水野に目もくれず、誰よりも真っ直ぐに冴へ向けて走っていた凛がギリギリで間に合い、強引に横から冴へと体を寄せて芯を揺らす。ギリギリだったこともあり、勢いそのままにプレスしたため冴の体は大きく反転。もはやファウルを取られてもおかしくは無い程の衝撃を与える。
プレスした凛は自身への衝撃があまりないことに気づく。冴は横

からの凛の特攻にも対応し、逆に力を利用して凛の背中に手を置き身体を反転。ボールは凛と冴の真上に上がる。
「――――クソナルシスト青薔薇野郎のオマージュだ。受け取れ」
振り絞られた左足を振り切る。上空にあるボールをオーバーヘッドで上から下へと叩き落とし、遮られたはずのゴールへの道筋を蟻生の股下を通すことで強引に開放。臥牙丸の飛び込みも僅かに届かず、ゴールネットへと深々と突き刺さった。
それはまさに……皇帝衝撃波（カイザー・インパクト）である。
電光掲示板の数字が変わる。それと同時に観客の歓声は最高潮に。水野のスーパーゴールと遜色のない冴の神ゴールが世界へと放送された。
「焦るなよ」
埋めた点差は即座に返され点差は再び1点に。ベンチで騒ぐいがぐり、そして口を押さえるアンリを横目に、彼らに向けてでは無い言葉を絵心が呟く。
「もうすぐ出してやる」
「――キヒッ」
ベンチに座る中では異質。目の前で繰り広げられるプレーに絶望するでもなく、ただただ闘争心を滾らせる悪魔の胎動が静かに響いた。
青い監獄ＶＳ　Ｕ―２０日本代表
５対４
日本サッカーの歴史が変わるまで、あと――――

【悪魔】の躍動、【傑物】の裁き

空を見上げれば所々に雲が散らばっているがほとんどが青空。太陽の輝きが地表を照らすが決して猛暑日ではなく過ごしやすい気温。

『おえっ……』

街から少し離れた位置にある空き地。サッカーコート程の広さは無いものの、軽いドリブルやｌｏｎｌ程度なら余裕で出来る程であるために簡易的なコートとして使用する。

端に生い茂る雑草の前で冴が四つん這いになって口から気持ちの悪い声を漏らす。汗が全身から噴き出し口からは胃液が僅かにこぼれる。運動着が身体にピタリとくっつき不快感が駆け巡る。

出会って数ヶ月ではあるもののこんなにも無様な姿を晒す冴を見た事はなく、同情の視線を向けるだけに留める。きっとこの姿を今後ネタにすればブチギレること間違いなしなのでここぞというタイミングで今日のことを話のネタにしようと決めた。

『ありゃりゃ。吐いちゃった？』

まだまだこっからなんだけどな～、とケラケラ笑いながら冴の後ろ姿を眺めるその人の姿を見て俺は相変わらずだなと苦笑い。

体力は冴の方が多いだろうに、その人は冴と対照的に汗一つかいていないし息切れも見せない。準備運動程度に思っているその人はサッカー歴が皆無だとこの状況を見て誰が信じるだろう。

気まぐれで俺と冴を同時に相手取って圧勝してしまうその人はやはり天才なのだと再認識させられた。

『悠はまだ出来るでしょ？』

無邪気な笑顔を浮かべて俺にそう問いかけるその人の言葉はもはや確定事項であり、確認のような言葉ではあるものの「ＮＯ」ということを許さない絶対君主の圧力。

『ちょっと休憩』

『ダ～メ～』

『じゃあ聞くなよっ』

汗が頬を伝う。冴ほどでは無いけれどこれ程汗をかいたのは何時

ぶりだろうか。
冴から聞こえてくる不快音が限界突破しそうな雰囲気を感じて冴は復帰するのに時間がかかりそうだなと予想。ていうかあいつメンタルやられてるくね？　大丈夫そ？
『ほ～ら。がんばれがんばれ～』
ああ。やはりこの人は俺が辿り着けない天才なんだ。この人以外は偉人達でさえ有象無象に過ぎない。俺たちはどんぐりの背比べをしているだけに過ぎないんだと。
楽しそうに俺たちとサッカーをするその人はまさに戯れているだけに過ぎず、その人と俺たちとでは話の次元が違うのだと。だから俺は周りの評価は聞き入れず、俺は凡人であると言い切ろう。

――――だからさ。
「調子に乗んなよ。贋作（ゴミ）が」
あの人以外で自分のことを天才だなんだと言う人間が酷く滑稽に見えるし、目障りだ。
「惨めに踊り狂って――――死ね」

????
観客にとってのダークホースたる水野悠の激動。呼吸するかのように飛び出てくる人外的なスーパープレーを量産した存在により、印象が薄れていた本来の目玉選手である糸師　冴の驚異的なシュートは再び観客達の脳に冴の存在を焼き付けるには十分すぎる効果を放っていた。
「クソナルシスト青薔薇野郎ｉｓ何？」
「自分のシュートに自分の名前を付ける痛いヤツだ。覚えなくていい」
「逆に興味湧いてきた」
「刺青付けて皇帝とか自称してる」
「なにそれ怖い」

後半始まって残り時間は２０分程度。この短い時間に既に４度ゴールネットを揺らしているという異常。そしてその全てが日本サッカーの歴史に残る程のスーパーゴール。小さな島国の国内試合とは思えない高度な攻防。

「悔しいなぁ、お前ら」

このコートで圧倒的な存在感を放ち、見ている者の脳に強烈な印象を与える冴と水野。そしてストライカーのみで構成され、前半には日本代表を圧倒した青い監獄。

この試合はもはや青い監獄対水野・冴という構図になりつつあり、日本代表の面々は何も出来ずにただ佇むのみ。

日本代表キャプテン、愛空が全身を汗で濡らし荒い息を整えながら込み上げてくる笑みを隠さずにチームメイトへと問いかける。

「俺たちは現状ただの観衆（オーディエンス）と変わんねぇ……日本の代表って立場に甘んじてた俺たちが。同じ日本人に手も足も出なくて。俺達の尻拭いを日本人がする」

日本という島国ながらに国の代表に選ばれた。その矜持は少なからずそれぞれにあった。誇りも、優越感も。

「認めろ。俺たちは弱い。この超攻撃的な試合に全く相応しくない雑魚でしかない。指くわえてババブ言ってる赤子に劣る、ただシャトルランしてるだけの馬鹿みたいな奴らだ」

シュートの機会に恵まれても得点には繋がらず、日本の武器であるディフェンスもまともに機能した記憶が無い。

貢献してると言えば愛空ぐらいのもの。

「水野と糸師　冴。この二人に任せて、俺達は邪魔にならないように端に固まってお喋りしてりゃあ良い……わけないよなあ！」

観客の目には日本代表の姿は映らず、印象に残らない。

あるのは青い監獄というプロジェクトの成功と、日本の至宝たる糸師　冴の姿と水野悠という最強の誕生。

「腐っても日本背負ってんだよ俺達は！　舐められたまま終わって良いのか!?」

膝に手を着き下を向いていた選手達はゼロに近い体力に鞭を打ち

無理矢理にでも前を向く。
「――ちっとはマシになったな」
「急にどうした、そういう時期？」
「殺すぞ」

ボールは青い監獄から。これまでの情報を纏め氷織と照らし合わせた潔はやはり初めと同じ結論に至る。
（糸師　冴と水野にボールが渡った時点で俺達は勝てない。俺達がすべきことはこの二人から極力離れた場所にボールをキープして点まで繋げる）
時間はまだ半分近く。ここからは得失点が士気に大きく影響することを理解する。
（問題なのはやっぱ水野。未完成とはいえ、超越視界に映らない特異点。ボール以上の存在感を放ちながら気づけば懐に迫る気配の強弱が全く慣れない）
潔の数倍以上の守備範囲。初速も最高速もコート上で最速。反応速度は未来を構築する水野の脳により遥前から動き出すために早いという次元では語れない。そもそも水野の虚を突くことができていない現状。
（今俺たちに求められるのは才能と才能を掛け合わせただけの化学反応だけじゃなく、才能、環境、現象の全てが奇跡的に噛み合って起こる才能（ビッグバン）の超爆発）
観客が求めているのはダークホースたる水野が作り上げる芸術的なまでのプレー。彼の一挙手一投足に叫び、驚き、狂乱する様はまさに信徒。
潔達は落ち着いたプレーで盤面を作りあげていく。氷織をパサーとして積極的に導入し、烏がペースを整えゴールピースを掻き集める。
青い監獄の最警戒は冴と水野の２人。次いで愛空だろうか。全てのリソースを注がなければ神出鬼没の水野を止めることは出来ず、なすすべもなく点を量産されることだろう。

（糸師　冴と水野、この二人の完璧なまでの共鳴は世界トップでも止められないぐらいのパーフェクトコンビ。糸師　冴が求める最高の延長線に必ず水野が居る。この二人には最早アイコンタクトは不要で各々が求めるプレーを再現出来る実力があるからこそ成り立てる）

加えて、先の得点から分かる冴のストライカーとしての才覚。フィニッシュは水野であると断定して計算していた故にまだ希望が見えていたがあのゴールで嫌でも冴のシュートという可能性を念頭に入れなくてはならなくなる。

青い監獄の思考はある一点のみ一致していた。それは日本代表側の驚異は冴と水野のみ。愛空も含まれていることもあるがこの２人の前には霞むために警戒度は格段に下がっていた。

「警戒ッ!!!」

その思考は間違いではなく、しかし致命的なミスでもあった。

脳のリソースをフィールド６割、冴と水野に４割振り当てていた潔の脳は既にパンク寸前であり、前半ならばこのようなミスはすることは無かった。

ボールを受け取った潔はＤＦを前に僅かな思考を割かれてしまう。僅かな停滞と油断。それ故に、息を潜めた閃堂の奇襲に気づかない。

「だっしゃぁぁぁ!!」

「ま……!?」

閃堂の気迫は先程までとは比にならず向上していた。執念のボールカット。潔の中で作り上げられた穴のある盤面が崩壊する。

氷織は閃堂の存在に気づいていた。そして潔もまた、その思考に至っていると考えていたものの、氷織の想像以上に潔の限界は近く、氷織の声が届いた頃にはボールは閃堂が弾いていた。

弾かれたボールに向かい閃堂は走りを緩めない。しかしその先には蜂楽がちょうど存在し、本人の意図せずボールを保有する。

ボールが自分の足元に舞い降りたことに口角を上げる。浮いて飛んできたボールを軽く跳躍してトラップ。前へと押し出して速度を緩めることなく走り出す。

「マジですかッ!!」

ボールをトラップし前を向く。その僅かな時間で足元から既にボールは消えており、視界の端に写った茶髪が全てを物語る。
潔のボールを閃堂がカット。その流れ弾は蜂楽の元へ。その全てを読んだ水野が低空姿勢を保ち視界に映らないよう忍び込みボールを奪取。
烏がすかさずヘルプへ。水野はふわりとボールを蹴りあげ烏の頭上を通すと純粋な脚力で身体へと潜らされた腕を振り払い烏を置き去りにする。
蜂楽のボールを奪われる場面まで読み切った氷織は途中介入が不可能であることを悟り一か八かで水野を止めるために下がる。
既に水野は氷織の眼前に。互いの瞳がぶつかり合う。
（あ～、クッソどこ見てんねんその眼。右か左か抜く方言ってから走れやボケカスッ）
「どっちから抜くん？」
「右」
１ＶＳ１の実力はそれほど高くなく経験上水野の挙動を読みきることは不可能であると分かっていた氷織は馬鹿正直に答えた水野の言葉を信じて水野から見て右へと身体をずらす。
「お前から見て右ね？」
「先言えや浮気性がッ!!」
反対側を堂々と通り過ぎた水野は氷織からの叫びを聞き「え、理不尽」と呟きながら閃堂へとパスを回す。
２人のパス回しでフィールドを駆けていく。それは冴と水野のペアと比べれば速度のないものではあるものの、水野のパスを受ける度に閃堂のパフォーマンスが劇的に向上していく。
（なんだこのパス。ストレスが全く無い。てか、気持ちいい）
閃堂のゴールレンジ内に到達。集中状態が深まりつつある閃堂の身体に湧き上がる全能感に似たなにか。
閃堂からシュートを決めかねない危険な気配を感じた蟻生は閃堂へと走る。
蟻生を閃堂が引き付け、シュートモーションに入り自身を囮にして

水野へと最後のパスをだす。
最後の砦である二子は真っ直ぐに水野の元へ。本来ならばパスカットを目的としていたが水野が閃堂との距離を知らぬ間に縮めていた事によりそれが不可能であると断定。ファール覚悟で止めに入る。
二子の特攻に目も向けず、水野は軽い跳躍でそれをかわす。既に背後には選手達が集まりつつあり、僅かな膠着はＤＦを間に合わせる要因となり得るものの既に水野はシュートモーションへ。
脱力。全身の力を抜き去り水野はシュートコースを捉える。瞬間に臥牙丸に伝わる悪寒。既にゴールが決まったかのような錯覚に陥り意気消沈仕掛けるが踏ん張る脚を叩き正気を取り戻す。
着地。地面から足裏に伝わる衝撃、それを全て右脚へ収束。脱力は続く。
「ロック」
臥牙丸の本能が警鐘を鳴らす。そして水野のシュートコースを確信。既に身体は正しく水野のシュートコースへと飛び込む。
脱力。初速は遅く、されど正確に。ボールの芯を捉える蹴りは、インパクトの瞬間に全身と地面から伝わる全てを右脚に伝える。
不可視の蹴り。それはボールが消えてから遅れて音が聞こえるという事象を生み出す。
超速の直線シュート。後半始まって一点目に見せたそれよりも格段に速いシュートは臥牙丸の予見したシュートコースを辿る。しかし水野がそのコースを選択した時点でゴールを確信。
かなりの前段階で飛び込んでいたはずの臥牙丸の指先を掠らせるも勢い衰えることなくボールはゴールネットへと突き刺さった。
『やはり水野ッ、水野です!! 日本代表、遂に青い監獄に並びました!!』
前半戦において青い監獄が作り上げた3点のアドバンテージ。
高校界では有名な選手もいるものの、外に出ればほぼ無名のＦＷのみで構築されたチームによる快進撃。
前半において場のムードは完全に青い監獄側へ。観客全てを味方

に付ける勢いそのままに迎えた後半戦、彼らを襲ったたった一人の選手による嵐の猛攻。
追われる側から追う側へ。狩人は獲物へ。絶対君主から認知されず、障壁ですらなく、結果として残る防戦一方。
「あ……れ」
潔の肉体と脳が限界を迎えようとしていた。
（おい……おいおいおいふざけんな!!　まだ１０分以上残ってんだぞ!?　何膝ついてんだよ俺の脚っ。止まれよ震え、こっからだろうが!!）
アドレナリンによる興奮状態。点が決まったことによりどうしても起きてしまうリセットの時間。その時間すら試合中だと認識して騙し騙し動かしてきた脚の震えは最早止めようがない。
同点。ここからは何がなんでも点を決めなければならず、水野にボールを持たせるわけにはいかない。潔の視界と思考は必要不可欠であり、水野の思考に手が届かなければ拮抗すら許されない。
「好きに暴れろ」
鳴り響く電子音。青い監獄側からの選手交代の合図。現在限界を迎えようとしている潔は歯を食いしばりながらベンチへと下がる選手の番号へと目を向ける。
「え――――」
歯をむき出しにして不気味に笑う士道が持つ交代の番号は潔のものではなく、まだ動けるはずの凪のものだった。
凪は自分が交代の対象となった事実に目を見開くも、すぐに納得を見せて迷いなく士道の元へと歩きベンチへと下がる。
「お前の覚醒は水野悠に届かなかった」
ベンチに座り、タオルを頭に乗せて俯き顔を隠す。瞬間にドッと疲労が凪を襲い体が鉛のように重く感じる中、絵心から向けられる温度のない言葉が凪を貫く。
「この結果が全て。お前は自分の才能に酔っていただけに過ぎず、本物には到底敵うことの無い凡才だと知れ」
そこに嘘は含まれず、相手を労る気持ちも無い。その言葉全てが凪

の図星を貫き壊し、拳を握り潰す凪は絵心からの言葉以外の全ての音が消えるような錯覚に陥る。
ベンチに下げられた理由を誰よりも理解している。点を決めたのは前半だけ。後半は最終的には馬狼が決めたとはいえあのシュートに貢献したとは全く思うことは出来ない。
「クッッッッソ……悔しい」
潔に敗北した以来の感情の昂り。
流れる汗が地面へ流れる濡らしていく中で、凪は深呼吸を1度するとゆっくりと顔を上げて水野の行動に集中した。

(なんで俺は残された)
凪が下がり、士道がピッチへと足を踏み入れる。ポケットに両手をしまい歓声に耳を澄ませる士道に緊張の色はなくむしろ場の空気を楽しむようにリラックスしていた。
疲労により震える脚にムチを打ち、なんとか両足で体を支える潔はガス欠寸前の自分ではなく凪が下げられた事実に疑問を抱く。
(俺が限界寸前だって気づいてないわけが無い。絵心は俺に何を求めてる?)
凪が元いたポジションに士道が加わる。舌を出して笑いながら冴と水野を見やる姿を見て水野がドン引きしていた。
(俺の視野……氷織も二子も同じものを持ってる。ダイレクトシュート……そんな武器が重宝されるような状況じゃない。俺が、俺だけが持っている武器はなんだ?)
冴を盾に士道の視線から逃れようとするも首根っこを掴まれて前に出され、そのやり取りを見て凛の舌打ちが連発される。
「潔くん」
思考の沼にハマり、底の見えない深さへと潜っていく。脳が蒸発しそうな程に熱が篭もり、血流が異常な速度で流れていくが思考は定まらず。
顔に付着した汗をユニフォームで拭いながら氷織が歩み寄る。
「しっかりサボりや」

「え？」
無意識に素っ頓狂な声が漏れた潔は目を丸くして氷織を見る。
「今は全部拾ってる余裕なんか無い。最低限の努力で最高の結果、やで」
これは水野から教えられた一部を自己解釈して簡潔にまとめた言葉。
超越視界という全能感を感じるほどに吸収する情報量はコート上の全て。無駄か否かは集めてから判断する取捨選択方式。故に労力は膨大なものであり、不要なものを一度集めて捨てるという作業が必ず発生する。
それはあらゆる情報を分析して最適解を出すというプロセスに必要不可欠な工程であると同時に最も無駄な時間と労力と言える。
水野のように完成された肉体と脳を持ち得ない選手にとってこの作業は酷く効率の悪いものであり最適化のしようのないものでもある。
「最低限の努力で、最高の結果……」
氷織の言葉を復唱。なにか重要なものがその言葉にはあるという確信めいたものが潔の中で生まれる。ハッキリとしたイメージは湧き上がらず、悩む素振りを見せる。
「一旦僕が場を整える。潔くんはゆっくりしてあのクソアホの度肝抜いたってや」
全力疾走は最早不可能。なけなしの体力を一瞬で無くす訳には行かず、最後までコートに立つためにも次のプレーは後方から俯瞰することを決めた。
潔がボールを凛へと渡すと潔は凛達に着いては行かずに下がる。
馬狼は潔の歩く程度に収めている姿を見て激昂することはなく、舌打ちを軽くするだけに留めて前へ出た。
「ヤッホー、ＮＯ．１!!　ここであったが１００万年目だっちゃ☆」
「いや一週間そこらだけど」
ボールを受け取った士道の前に水野が立ち塞がる。１ＶＳ１の形になり距離をとってお互いに静止するが士道はすぐにパスを出して

マッチを外す。
「まだまだまだまだ～」
「何言ってんだこいつ」
シンプルに気持ち悪いという感情が湧いた水野は素早く土道の筋肉、技量を把握。即座に離脱した。
（あいつ男色だもんなあ……急に襲われそうだ。冴を盾にしよう、うん）
蜂楽が左サイドから多彩なドリブルを魅せて相手を圧倒。中核まで進むものの冴の存在に気づき即座にパスを選択。
凛がトラップした瞬間に愛空が体を忍び込ませる。しかしそれは凛にとって想定内のものであり、氷織を使い妨害をするりと抜き去る。
（さっきまでとプレーの質が圧倒的に違ぇ……!!　俺単体じゃまず勝てないか）
湧き上がる殺意を胸の奥で燃やし続け、しかしそれを表には出さずに燃料に焚べる。クリアな視界。ただ勝利を求める猛獣を身の内に飼い慣らし、静かに牙を研ぐ。
水野のパスを経験し、ポテンシャルが跳ね上がった閃堂が動き回る。パスカットも寸前というところで土道がボールを強奪。バァ、と舌を出して挑発する。
水野から離れた場所に現れた土道。先程とは打って変わって独断専行を始める。馬狼と同じかそれ以上の協調性のなさと独立した個を目撃し日本代表勢の表情が歪む。
奔放であり、気まぐれな性格。しかし確立された実力は凄まじく、凛に勝るとも劣らないプレーは相手を翻弄する。
仁王、陀来が二人で土道を止めに入る。土道は唇をペロリと舐めるとキヒッと笑いながら強行突破。体幹と技術に手こずりながらも土道の侵入を許さない。
やるじゃあん、と馬鹿にしたような口調でため息をつく土道のボールを横から貫く黒き稲妻が刈り取る。
「タラタラしてんなよ触覚がッ」

「……あ゛ぁ゛!!?」
三者三様、完全に虚を衝く馬狼の介入に士道は低い声で唸る。
しかし馬狼が奪い取ったボールは元からそうなることが分かっていたかのように対応した冴により弾かれ「チッ!!」と舌打ちが強く響く。
「分かってるで、ここやんな」
弾かれこぼれたボールの落下地点で待ち構えるのは氷織。起こり得る未来を正しく読み切りボールが落ちてくる位置へ先回りしていた。
「ちょいと甘いんとちゃう？　水野くんの自称相棒は……ふっ」
「――あ？」
「ああ、それとも僕にパスしてくれたん？　優しい優しい、お利口さんやなあ、飴ちゃんはないけど堪忍な」
マウントの嵐。冴の額にシワがよる。
明言しなくとも、態度から分かる殺意。真面目に相手をすることなく即座に味方にパスを出し、右手を振って場を後にする。
（なんで氷織のやつ冴のこと煽ってんの？　めっちゃ不機嫌なんですけど。絶対次俺が腹いせに冴に殴られるやつじゃん。やめてっ、争わないでっ。みんな仲良くしてッ）
決して目で負えないほどの速さでパスを回している訳では無い。堅実に、冴と水野が触れることの出来ないルートを通していく。その他ならばドリブル勝負になったとしても蜂楽を筆頭に勝利は難しくない。
青い監獄の作戦にすぐに気付き、シンプルながらに大きな効力を持つソレに、だろうなという感想で止まる。
死角、そして甘いパス。それらを利用し冴はボールカットの機会を模索して数度駆け込む。
「チッ」
冴が動けば、その先には常に氷織が。冴に届く前に味方のパスを強引に奪い即座に軌道を変える。
水野の介入は無い。烏が常に水野の位置取りの把握を行う。水野

の動きで結果は大きく変わるために挙動の全てを捉えなければならない。監視されていることを考慮してか否か。水野は大胆に動くつもりは無いようだ。
（二子も前線に出てきてる。潔が限界に近いことで空いた穴を埋める役割と、氷織と常にコンタクトを重ねて情報共有により盤面を築いてんのか。まあ、もっとも）
――試合展開にズレは生じない。

水野の中で、この試合に対する認識が変わろうとしている。
冴によるハニトラ暴露（濡れ衣）、そして冴によるゴールの要求。凪の視線を受け、少なからず勝利を目指していた水野の気分が今、落ちつこうとしていた。
『勝利』に対する飢餓（ハングリー）精神。このスタジアムに集まるサッカーを愛する選手たちの中で、水野だけが持ち得ない感情。
『死んでも勝つ』、『勝利こそが全て』、『己の存在価値の証明』。これらの感情は水野には存在しない。生まれた時から見続けてきた圧倒的な才能。
何一つ叶わなかった至高の存在を目の当たりにしてもなお。いや、常に見てきたからこその『勝利』に対する価値観の欠如。
あの人以外に勝ったところで、それはただのどんぐりの背比べでしかなく、勝利による感情の起伏は少ない。
見下してくる相手は腹立たしい。自意識過剰なやつは見ていて痛ましい。当たり前に備わっている感情は水野にとって意味合いは変わる。

試合の残り時間は僅か。最早水野からすれば勝敗はどうでもいい。冴から言われたからゴールは決める。自分の意思はそこになく、義務的な作業でしかない。
ボールを持てば手を抜かない。しかし今ではもう自分から奪いに行こうなんて気にはなれない。ゴールを決めても、決められても水野

の心が動くことはなく点を取られたなら点を取り返すという当たり前の作業に取り掛かるだけだ。
故に、目の前で起きた事柄に水野は干渉しなかった。
凛が冴とマッチアップし、冴が勝利。そのボールを奪った烏がフリーでシュートを放つも強引な一撃はキーパーの指先に弾かれてゴールポストに阻まれる。
ボールは氷織へ。そして蜂楽が抜け出しそこへパス。愛空が止めに入り蜂楽の目の前の進路を塞ぐと二チャリと不気味な笑みで表情を歪ませる士道が割って入りヘッドショットでゴールを決める。
（まあ、妥当だな）
脳内で行っていた擬似的試合展開に狂いはなく、士道が決めたことに驚きも何も無い。あくまでも他人事のように漠然とした思考で考える。悔しさはなく、なるべくしてなった結果だからこそ納得する以外無かった。
スタジアムは爆発的な歓声をあげる。それに対して何を思うでもなくリスタートのためにゆっくりと振り返り。
「ビンビン来たァ～……おれ、やっぱ世界一の天才ちゃん♡ゾクゾクするっ!!」
「――――は？」
ゆっくり進めた歩は即座に停止、聞こえてきた言葉の意味を脳内で処理すると感情の消えた顔で振り返る。
今までも、そういった文言は数多く聞いてきた。
テストで百点を取った程度で天才だ。運動が得意なら天才だ。自己を高める『天才』というワードは日常に溢れていた。
しかしそれらは許容していた。なぜならそれらの言葉は本当の天才という意味ではなくてただ人より少し優れているという意味で用いられているであろう用途だと分かっていたから。
誰も自分のことを神の寵愛を受けた神にも等しい才能の塊だと本気で言うやつは居なかったし、だからこそ自分を天才だと冗談のように言う存在は水野からすれば子供が褒めて褒めてとねだってくるような微笑ましさすら感じていた。

だが。これはダメだ。
（本気で言ってんのか、こいつ）
世界一だと言った。天才だと、軽々しく口にした。
それらは全て、あの理解不能の凡人の口から出た本気の言葉。
ドロドロとした感情が沸き上がる。怒りは無い。ただただ滑稽でしかない。
自分のことを天才だと、頂点だと本気で思っているソイツの存在が酷く気持ち悪い。
故に、今から行うのは害虫駆除。
「調子に乗んなよ。贋作（ゴミ）が」
冴の珍しいものを見たという驚きの表情も、氷織達の唖然とした様子も、冷や汗を垂らす士道の作られた笑みも全て無視して水野は告げる。
殺意なんて湧いてこない。ただ目障りな存在を消すだけなのだから。
呆れを通り越したら無になるのだと。むしろ笑ってしまうほどに滑稽で、自分を天才だと持て囃す様はまるで独りでに踊るピエロ。

青い監獄ＶＳ　Ｕ―２０日本代表
６　：　５

「惨めに踊り狂って――――死ね」
――申し子は、最後のピースを手に入れる。

そんな終わりは認めねぇ!!

――――それは、正しく『蹂躙』。
無慈悲に、無情に、理不尽に。スポーツという枠組みから逸脱していると見れる程の惨劇。
沸き上がる歓声、気分が高揚し続ける観客達。
水野悠の繰り出す芸術的であり暴力的なドリブルを魅せられ思わず声をあげて盛り上がる。
客席も、実況席も、テレビ画面の前に座るサッカーファン達も一様に興奮に震えていた。
水野がボールを保持し、士道へ迫る。抜いて、止まり、戻り、抜く。
違和感を覚え始めたのは、そのやり取りが3度ほど繰り返された時だった。
抜いて、止まり、戻り、抜く。抜いて、止まり、戻り、抜く。
歓声は次第に疑問の声に。ザワザワと各々が目の前で行われている試合内容について議論し始め、その声には次第に恐怖の色が混じる。
困惑の声が飛び交う。観客席でも最前列に近い位置で傍観する人達は、選手たちの顔が見えてしまうが故に不気味な気配に気付いた。
ボールを奪おうと動き回る士道に対して最低限の動きで交わし続ける水野。前者は汗を垂らし口角を歪ませながら食らいつき、後者は全くの無表情で士道を見据える。
士道がボールに触れることはなく、何度も抜かれるが水野がそれ以上前に出ることは無い。抜く度に再び元の位置へ戻るのはサッカーを知らない人が見てもすぐ様異常事態だとわかる奇行。
この時はまだ士道の表情は活き活きしていた。煽られていることに気づき怒りを覚えながらも必ず喰い散らかすと好戦的な笑みでしがみつく。
決定的瞬間となったのは、水野が士道の足元へパスを出した時。
今まで触れることの出来なかったボールが突然足元へと転がり込んできた。いとも容易く吸い込むように流れてきたボール。士道の

思考が白く染まる。
そして即座に駆け出そうと予備動作を始める直前、ボールは足元から再び消える。
わざとボールを渡し、そして触れさせてから奪い取る。明らかな格下……敵とすら認知しないほどの圧倒的な差がない限り発想すら浮かばないであろう煽りの極地。士道の血管が膨れ上がり水野へ飛びつく。
気付けば再びボールは脚へ触れる。今度は最初から認知していたためにラグは発生せず、自然と足は前へ。
ボールは足元から消えていた。
2人のフィールドに誰も介入は出来ず、してはいけないと警鐘が鳴り響く。
しかし、そのような公開処刑のような所業を見せられ、遂に凛が動く。
水野を除く青い監獄側のトップ2。どちらも個人の実力は頭一つ抜けており、世界選抜から1点ずつもぎ取った実力は伊達ではない。
凛が介入し、1対2。状況は面白いほどに全く変わらない。
水野はただ繰り返す。士道の尊厳も、これまでの積み重ねも、自分を天才だなんて思ってしまった憐れな自尊心も全てを丁寧に破壊する。
二人を相手に圧倒する水野のプレーに再び歓声が沸きあがるも、困惑の声の方が既に大きく膨らんでいた。
連携など考えず、バラバラに攻め続ける士道と凛の猛攻をどうでもいいように躱し続ける。その間にも士道にわざとボールに触れさせ、そして奪うというループ。
今行われているのはサッカーの試合では無い。愚かにも天才を謳ってしまった凡人の思想を捩じ伏せるための舞台。主役は居らず、悪役も居ない。脇役が脇役の在るべき姿へと調教する教育である。
不意に、士道が膝から崩れ落ちる。それは決して心が折れた訳ではなく、疲労がピークへ至った訳でもない。水野がそうなるように仕向けただけであり、士道の意志は未だに健在であった。

コロコロとボールが転がる。そのボールは地面へ突っ伏し起き上がろうとしていた士道の顔にこつりと当たる。
元凶を睨みつけるように見上げる。殺意が迸る。殺すという文字が脳内を埋めつくし睨んだその先に映る光景を見て、士道は息を飲んだ。
スタジアムの光が逆光となり、水野を照らす。表情は暗く黒く、不気味なまでに瞳しか見ることが出来ない。
瞳を覗く。そこに反射して映るのは自分ではない。ただただ恐ろしく深い暗黒。血が通っている人間とはとても思えない温度の無さに、目の前で己を見下ろすナニカに呆然とさせられた。
凛がボール奪取に動く。視線はそちらに向かず、しかし士道に興味をなくしたのか視線を外して凛の相手を始めた。
士道は立ち上がれない。疲労は無く、怪我もない。ただただ立つという思考に至らないだけ。
フラッシュバックする先程の光景。本能が理解してしまった。水野と自分の間に生まれている格差。それは視認することも許されない、壁というのも生温い生物として、存在としての差。
士道は己が凡人だとは思わない。自分には才能があるのだと正しく理解している。それは格上に負けても格下に負けても変わらない事実。
しかし士道は負けを認めた。いや、勝負として成立していなかったのだと理解させられた。
――――『神』。
小さく開かれた口から漏れ出た2文字の音。それは霧散していき誰の耳にも届かない。
なんとも表現のできない表情。呆然としているという表現が最も近いだろう顔で地面を見つめる。
それは眠りにつく直前の子供のような無防備な表情。瞼が閉じられていき、視界の半分は黒くぼやけているだろう。
地面に手を着く。しかし身体に力は入らずにぐにゃりと沈んでいく。

「――――キヒッ」
眠たげな瞳はこれでもかと見開かれ、口角は異常なまでに上がる。悪魔の牙が妖しく煌めき、膝を立てる動作も見せずに勢い良く飛び上がる。
神を見た。生物としての格が違う、比べることも烏滸がましい存在の一端を垣間見た。
震えた。鳥肌が立つとは正しくこのことだ。今の自分では一欠片も見ることの出来ない頂きの更に上の光景を。
なればこそ、土道龍聖は喰らいつく。
負けた。認めてしまった。だからなんだと牙を剥く。
弱者をいたぶったところでそれは強者たる己の力を確認するだけのなんてことは無い作業でしかない。土道龍聖は青い監獄の誰とも化学反応を起こすことは出来なかった。
才能と才能の相乗効果。そこから生まれる前人未到のプレー。土道の個人技はどの才能とも噛み合うことはなく、先のゴールはただ己の実力を証明しただけに過ぎない。
土道龍聖の本質。格上相手に全てをかけて引きづり下ろそうとあらゆる手段を模索し、勝利という快楽を求める極限の集中状態。
下克上こそ、彼の専売特許である。
土道の心をへし折る。サッカーにおいてそれを実行することは不可能。どれだけの実力差、どれだけの屈辱を受けたとしても、土道は全てを燃料としてポテンシャルを底上げする。
「ガルルゥゥァァァァァァッッ!!!」
水野はここに来て初めて、観察により推定した土道の特性を見誤る。そこに僅かな驚きを浮かべながら、後ろから迫る土道の猛追を避ける。
「高みの見物ご苦労さまデちゅ!!　お礼に地面にアッついキスをプレゼントしてやるよォ!!!」
「いつまでもスカしてんじゃねぇぞＮＯ．１!!」
ここに来て、土道と凛が敵である水野に触発されてＦＬＯＷへと至る。全てが視える、なんでも出来る。そんな感覚に陥る程の全能感。

身体は思う通りに動き、適切な行動となるアイディアが無限に湧いてくる。
それに伴いアドレナリンが大量に分泌。疲労が消し飛び１２０％の実力を発揮する。
今の状態の２人は、世界でも通用するほどの最高の状態。二人を相手に渡り合えるのは、それこそ最前線で戦い続ける、ノエル・ノアを始めとしたトッププレイヤーだけだろう。
バラバラに迫る二人。推測を誤るという異常事態。パラメーターが跳ね上がった両者を見て、水野は感慨深くボールに足を乗せ、
「飽きたな」
――大した感動も浮かべることなく、当然のように二人を抜き去っていった。
「ワンパターンなんだよ、お前らは。なんの面白みもない」
ただ走る。さっさと終わらせようという一心で。
「俺一人に寄って集って、その癖何も出来ない」
何度も見た、水野が得点するまでのルート。代わり映えのない光景に息が漏れる。
「お前達は何して来たんだ？」
ああ、そういや犯罪者予備軍か。と心の中で納得する。
日本代表達も、圧倒的走りを見せる水野を追走しようとする者は現れず。ただただ指をくわえて後方から眺める。
「もういいだろ」
コツン、と軽くボールを蹴る。コロコロとゆっくり進んでいくボールは、ゴールラインを僅かに超えたところで停止する。
なんの感動も生まれない。歓声は疎らに。圧倒的すぎる実力を見せられ、蹂躙と呼ぶべき試合内容に畏怖の視線を向ける。
「あと1点。しっかり仕事しろ」
いつもと変わらない対応を見せる冴。しかし僅かな苛立ちを見せる。
「ていうか、この試合の勝敗ってなんかあんの？」
「あれだけ尊厳踏みにじりながらそりゃねぇだろ……」

苦笑いの愛空。冗談か否か、しかしその質問に正しく答える。
「青い監獄が勝ったら日本代表の席は全部アイツらのもん。んで、逆に俺たちが勝ったら青い監獄は解体……何回も説明はあったぞ？」
「……ん？」
ぴくり、と水野の耳が動く。
しかしその様子に気付いたのは冴だけ。先程までの様子は何処へやら。相変わらずの水野にため息を着く。
真面目な顔をして考える素振りを見せる水野に、どうせバカみたいなことを考えているんだろうと背中を軽く蹴る。
「え、痛い」
「当然の報いだ。つか、あの触覚ピンク元気ピンピンだぞ」
「お前が元気ピンピンとか言うの面白いな。ジワる」
「うぜぇ」
腰を捻りながら「確かに」と続ける。
「想定外ではあったけど、もうどうでもいいな」
水野は広いコミュニティを作るような性質では無い。他人と断じた相手は全くの無関心を貫く。琴線に触れ、思わず標的にしたと言えど、既に士道の印象は薄く、心底どうでもいいと感じる。
それについて冴はどうとも言うことはしない。しかし水野が既にこの試合に関心が無くなりつつあるのは頂けない。
ちらりと、相手の様子を見る。
士道、そして凛のボルテージは最大。ギラつく目には闘志が燃えたぎり、玉座から水野を引きづり下ろそうと魂を燃やす。
悪寒。いや、警戒心が強く反応。それは青い監獄側のトップ2から感じるものではなく、その後ろに控える体力が限界に近い、走ることも難しいであろう死に体の選手。
風前の灯。いつ消えるかも分からない弱々しい輝きは観客の誰の目にも映らない。息を荒らげ、滝のような汗を流し見るだけでも疲れてしまうような状態にも関わらず、現状一番の脅威として判断してしまう。
（潔世一……）

????

瞬きを忘れ、少し開いた口もそのままに、ただ一点を見つめる。

試合再開。凛達が勢いよく走り出す中、潔はゆっくりと1歩踏み出す。

超越視界を使っていた以前までは、あらゆる情報を取り入れ、その中から最適解を選びゴールルートを模索していた。

目に映る全てを要素として、必要か否かの膨大な計算により擬似的な未来予知すら可能となる超人の領域。

今の潔は超越視界を使っているとは到底言える状態ではない。脳は既に限界。以前までのような膨大な情報を取り入れようものなら1分と持たずに気を失うほどに脚は震え歩くのでさえギリギリ。

潔は今、不可解な体験をしていた。

視野が広がる。しかし全てが見える訳では無い。そこから得られる情報は数えられるほどに少なく、しかし不自然に湧いてくるインスピレーション。

1点。ポツリと光るポジション。何も分からない、何が正しいのか何をしているのか。ただひたすらに前へ。直感と言えるのかも定かではない、ただそこに行けと心が叫ぶ。周りの試合展開には目を向けず、ひたすらに前へ、前へ。

歩く。脚の感覚が無くなっていく。今歩けているのかも分からない。指先から温度が消えていくような喪失感。しかし足を前へと意識して動かす。意識しているが無意識に動くという矛盾。何も考えず前へ。

音が消える。何も聞こえない、風の音も消え去る。

触覚が無くなる。踏みしめる人工芝の感触がなくなり、宙に浮いているような違和感。

視覚が無くなる。どこを歩いているのか分からない。暗い暗い、黒も分からない空間を歩いているのかも分からない。倒れているのか、

何をしているのか定かではない。
見えない、感じない、分からない。しかし継続して光るポイントを目指し続ける。
脳内はクリアに。呆然と、今まで感じたことの無い感覚に身を委ねようやくポイントへと辿り着く。何秒、何分経過したのだろうか。試合は続いているのか、もう終わっているのかもしれない。全てが謎、分からない。だが、ふと脳裏に過ぎる使命感。
――ああ、シュートしないと。
なぜそう思ったのか分からない。もはや無意識に身体が動く。なけなしの力。既に限界。多分、今脚を振りあげようものならそのまま身体が吹き飛んでいく程にフラフラの状態。それでも、潔は左足で大地を踏みしめる。
初めに、触覚が戻った。踏みしめた芝生の感触。潔の思考が定まる。
次いで、音。これまた芝生から聞こえてくるザッという音。次第に周りから選手が走り踏みしめる音が聞こえてくる。
身体の感覚が戻った。地面に脚で立ち、右足。振り絞る。
そして――振り切る。
右足に何かが当たった感覚。次いで気持ちのいい重い破裂音。右足から響く感触は次第に全身を駆け巡り、遂に視界が戻る。
目の前には足を引っ込めていた水野。その奥には対面するように立ち、共にゴールへと視線を向ける凛と冴。宙を舞う愛空と、手を伸ばし飛び込んでいる日本代表のキーパーの指先を通り抜けるようにボールがネットを揺らしていた。
何が起きたのか全く分からない。突如視界に映った映像を見て、途端に身体から力を失い、誰かに体を支えられた感触を覚えながら意識を失い倒れた。
時????
時間は少し遡り――――冴と凛が対面する。
ボールは冴が保持。士道のシュートが愛空の脚に遮られ、ゴールポ

ストに弾かれ冴へと渡っていた。
その直前に走り出す水野。依然として狂うことの無い試合展開のビジョンに不安も抱くことなく、冴からのパスを待つため前へと走り出す。
凛が冴の前へと立ち塞がる。現状の両者の間に存在する絶対的な実力差。それは水野悠との出会いを機に指数関数的増幅を見せていた。
――しかし。
「チッ……!!」
迷いなくコートを走る水野が急停止。そして元来た道をそのまま戻り出す。
水野の中での計算。凛と冴が対峙した際、１００回勝負すれば１００回冴が勝つ。それはこの試合中に見せた凛の成長を加味した結果であり、揺るがない定義。
導き出された結論は冴の完勝。至極当然の結果にも関わらず、水野の中で既に確定していたはずのゴールビジョンにノイズが走る。
「何してんだあのバカ……」
原因不明。両者の実力差は明白。しかし今この瞬間において冴が勝利する確率が限りなくゼロへと変化したことに驚愕を浮かべる。
予想すらしていなかった異常事態。この試合に意味を見いだせなかった水野だが思わず本気の走りで自陣へと戻る。そして冴の元へ間に合わないことを悟ると弾かれたボールが落ちる確率が最も高い地点へと進路を変更。
「潔っ？」
冴の敗北を悟るまでの時間が予想より遅く、脚に力を貯める。最終到達地点に目を向ければそこへゆっくりと歩きながら向かう潔世一の姿。最初からこの展開を読んでいたような動きを見せる彼の姿に冴の敗北と同程度かそれ以上に関心を向ける。
遂に、冴の隙をついて凛がボールを弾く。冴自身も想像がつかなかった敗北に目を丸く開き唖然と凛を見やる。対する凛の視線は既に弾いたボールの先へ。そして目に映る光景に思わず舌打ちを零す。

既に潔はシュートモーションへ。見開かれた双眼から感じる誰よりも深い集中力。そして潔の脚が動き始めるその時、水野が僅かに間に合う。
コンマ数秒の世界。しかし確実に触れることの出来る距離まで接近。完全に止めることは出来ないものの、触れて僅かに軌道を逸らすことは可能だった。
ボールに潔の脚がふれる。その直前、水野は伸ばした脚を突如止めた。

「どういうつもりだ?」
沸き上がる歓声。試合終了を表すホイッスル。声にならない絶叫が辺り一面から響き渡り、空気の震えを身体が感じるほどにその場にいる全ての人間が全力で喉を酷使していた。
不満ではなく疑問の声を向けてきたのは腰に手を置きながら水野が片手で支える潔を一瞥する冴。
「お前こそ。負けると思ってなかったんだけどな。やっぱ弟ラブ?」
「違ぇよクソが」
青い監獄のベンチでは雷市を筆頭に喉が壊れるほどの声量で叫び、アンリは感動と安心感からか涙が溢れ出ていた。
絵心は叫んだり、喜びを顕にはしないながらに拳を握りしめ勝利を噛み締める。しかし他とは異なり、絵心の表情に変化は見られず、何かを思案するように前のめりになる。
「凛の方が強かった……そんな事は言わねぇよ。今のアイツより、俺の方が数段強ぇ」
ただ、という前置きを言い、後ろにいた凛を一瞥する。
「俺がお前の実力を見誤ったのも事実だ。日本(このくに)にはもう、悠(こいつ)以外にロクなストライカーなんて生まれないと思ってた」
「兄ちゃ……」
なんか言ってるけど、全く意味が分からん。そんなことを考える水野を蚊帳の外にして冴は凛のつぶやきを無視して続ける。

「お前の本能を呼び起こし、悠の背中を掴んで日本のサッカーを変えるのは……潔世一。このエゴイストなのかもな」
日本はまだ変われる……凛から向けられた殺意迸る視線を気にすることなく呟く冴に水野が軽く身を引く。
「いつまでソイツを抱える気だ。凛にでも渡しとけ」
「お前は鬼か。そいつの顔見ろ、潔渡したら心臓食いちぎりそうな勢いだぞ」
二人の親しげなやり取りを見て、さらに表情が歪む。水野は諦めて無視することを決めた。
「気絶してるだけだ。どっかで寝かせてやれ」
近くにいた……と言うより、近づいてきていた氷織に潔を託す。はいはい、と軽く返事をしながら脱力しきった潔の体を脇下に腕を通して支える。
「なんや、水野くんも負けるんやな。なんか安心したわ」
「俺の事神かなんかとでも思ってんのか」
「いんや。タチの悪い悪魔やで」
ニヒルと笑い、悪戯心を見せる氷織の言葉に意味が分からないと嘆息。思えば久しぶりの会話だなと思うも前に感じた危機感はなくなっていたために一安心。
(腐女子とか湧きそうな見た目してんなあ)
脳天気なことを考えていると、不意に氷織が冴に目線を向け、わざとらしく笑みを作り「ふっ……」という煽りとも取れそうな息を吐く。ピキっと冴の額にシワが寄せられ、追撃とばかりに氷織が口を開こうとした瞬間に二子が氷織の首元を掴みあげて引きづる。
「ちょっ、二子くんっ。こっからやのに!!」
「もうお腹いっぱいなので。というかあの間に挟まれてる潔くんが可哀想すぎます」
「いいやん。僕はただ……うわっ、アイツ今僕の事見て嘲笑いおった!! ギシャアアアッッッッ!!!」
「猫かっっ」
ワーワーギャーギャーと暴れつつ、潔のことは支え続け氷織はベン

チへとフェードアウト。青い監獄の選手達が今回の最大の功績者である潔の元へと駆け寄る。
「最後」
「ん？」
「わざと止めなかったな」
怒っている様子は無く、本当にただの疑問点として質問している様子の冴に、ん～と唸りながら空を見上げる。
「それは――」
「おーい、水野！」
愛空からの呼び声に言葉を中断。少し不機嫌な顔になった冴を見て（子供か）というツッコミを心の中でする。
「インタビューだってよ。あっち」
「いんたびゅー？」

「誰もが予想し得なかったこの試合一番のダークホース、水野悠選手です！　惜しくも敗北という形に終わりましたが、ゲームを終えての率直な感想をお聞かせください」
（なにこれ？）
水野は思考を放棄した。
本来、勝利を決めたゴールの張本人、潔にインタビューが入る予定だったが、当の本人は試合終了とともに気絶。インタビューを行うことが不可能であるために、今回の試合で最多ゴールを叩きだし、良い意味で観客の期待を裏切ることとなった水野へと白羽の矢が立った。
「まあ……潔には驚かされましたね」
意味は分からないものの、とりあえず思ったことを口にする。
「やはり潔世一選手ですか！」と興奮したように口調をあげる記者に対し（やはりって何？）と疑問が耐えない。
（てか、冴のやつ腕組んで見守るなよ。何してんのあいつ？　あっちいってて！　なんか恥ずかしいから！）

「今日の活躍で、世界が水野選手に注目しているかと思います！　何か今後に向けての意気込みなどはあるでしょうか？」
　記者の言葉の大半は水野の耳に入っていない。この謎の時間に意識を削がず、先程冴に聞かれた言葉を復唱する。
（なんで止めなかった、か）
『青い監獄が勝ったら日本代表の席は全部アイツらのもん。んで、逆に俺たちが勝ったら青い監獄は解体』
　思い出すのは数分前に告げられた言葉。その内容に、水野は疑問を浮かべる。
（この試合に勝ったら監獄は解体……つまり俺は出所できる）
「――世界に」
　自然と溢れた言葉。さほど意味のないそれを、記者は余すことなく拾う。
（あのシュートを止めたら、そこから追加得点はまあいけただろう……それでいいのか？）
　思い出す。青い監獄に収監された時に誓ったことを。
　無実の証明。それこそが水野が掲げた、打倒カッパ。犯罪者予備軍という括りにまとめられ、事実無根の罪で収監された（勘違い）。
　サッカーで勝てば、出所することは叶う……果たしてそれは、無実の証明と言えるのだろうか。
　故に、冴の質問に対する回答は非常にシンプル。揺るがない意志を。自身の中に燻る怒りを。
「俺が、俺であることを証明する」
（サッカーで勝って逃げるとか意味分からん。俺はァ、無実を!!　証明して!!　あの自称革命家の河童に土下座させるんだよォ!!!!）
　絶対の自信。冴の瞳を真っ直ぐに射抜き、そして紡いだ本心。
　真っ直ぐな視線と言葉を向けられた冴は……心の底から嘆息した。
　テレビ画面の向こうで、一人の少女が紅茶を吹き出したとか。

土下座……『土の上に直に坐り、平伏して礼（お辞儀）を行うこと。　日本の礼式のひとつで、姿勢は座礼の最敬礼に類似する』

「――私、とても興味深いお話を聞いたんですよね」

その声を聞いた瞬間。

俺は他の何をするでもなく、恐らく世界最速であろう土下座を決めた。

「ふふっ、ふふふっ」

その笑い声は、音声だけ聞けば蕩けてしまいそうな程に強烈な毒性を持った魅惑の声音であると同時に、生で聞かされている俺にとっては身体の震えが止まらない喉元に刃を突きつけられているような感覚にも陥った。

こいつ、ほんとに天使様って呼ばれてんの？　ああ、呼ばれてましたね、はい。

????

年齢詐称ＶＳ犯罪者予備軍の試合の翌日。なんか分からないが一時的に監獄から出ることを許された。なんで？

「黙って受け入れろ」

「なんでお前ここに居んの？」

一時的に釈放されたため、とりあえず帰省するかと歩いていたら当たり前のように隣を歩く冴。

方向が同じだけだ、と言い放ったものの本当か怪しい。まあ、どっちにしろ悪影響とかはないし別に気にすることじゃないな、と考えることを放棄する。

「冴は実家？」

「実家には寄るが、すぐにスペインに戻る。元々パスポート更新の為

だけに日本に来たからな」
「あそう」
　ダウンに身を包みながら口から漏れる息は白く輝き霧散していく。しかし体感はそれほど寒さを感じることはなくキャリーケースがゴロゴロという音を出すこと以外に何も無い。
　ピロン、という軽快な着信音とバイブを感じポケットにしまっていたスマホを取り出す。顔認証により表示されていたメッセージが開封され差出人と短文が3件ほど届いているのを確認し、片手で文字を打って軽く返事を書く。
　もう一度スマホをポケットに入れると隣を歩く冴からの地味に刺さる視線を感じて何用かと見る。
「ニヤついてんぞ、気持ちわりぃ」
　え、マジ？　と思い自分の顔を触ってみる。別に普通だと思うけどな。
「ていうかお前、お付きの人みたいなのいなかったけ？」
「マネージャーには先に飛行機のチケットを取らせに行ってる」
「あらヤダ暴君」
　サングラスをかけてすました顔で歩く冴は傍から見ればお忍びで歩く有名人の風貌である。流石は日本の至宝様(笑)だ。おっと、ローキックは勘弁。
「そういやこの前ネット見て知ったけど、冴ってプロ選手なのな」
「遅せぇよクソが」
「だってお前の苗字とか知らんかったし」
「だとしてもだろ……はぁ……うちに推薦してやろうか？」
「結構です」
「チッ」
　おお、舌打ちほんと上手いなこいつ。舌打ちで飯食えそう。
「世界じゃどれくらいの立ち位置？」
「知らねぇ……まあ、自意識過剰連中をボコれるくらいだな」
「ほーん。分かんな」
　あれ、糸師　冴じゃない!?　みたいな声でキャッキャしているＪＫ

が視界の端にチラホラしだしたために冴からそっと距離を取ろうとすると右腕を凄まじい力で掴まれる。ちょ、本気出しすぎだろ逃げないって!! ギシギシ言ってるるぅぅ!!
「お前、ノエル・ノアについてどう思う？」
激しい痛みを感じつつ顔には出さないように努めていると不意に冴からそんな質問が飛んでくる。突拍子無さすぎて返答に困るんだが。漠然としすぎじゃね？
「ノエル・ノアに勝てる勝てないで言えば、どっちだ」
急にそんなことを聞いてくる。何故に？ そもそもノエル・ノアに会ったことないし。動画もそんなに見てないから正確な分析できてないし。あんま興味無いし。
会話の延長のように聞いてきたが、割と力が籠っていたのでしょうがないと真剣に考えてみる。俺でも名前は知っている、世界一と言われているサッカー選手。サッカーに興味がなくても名前を聞くであろうビッグネームだ。
3秒くらい悩んだが、何しろ会ったこともないし正確な回答ができるはずもない。冴も本気の答えを求めているわけではなさそうなので、俺は思っていることを口にする。
「まあ、負けは無いだろ」
あの人以外に負けるつもりは無い。別に俺は自分が天才だなんだと思っている訳では無いし、世界一だとか言うつもりもない。けれど、ノエル・ノアが称されている世界一という範囲は文字通りのものでは無い。サッカーをしていて、表舞台に姿を出し、プロと契約した上で実力を見せているから世界一と呼ばれているに過ぎない。
あの人のように、自分の実力を見せびらかすことの無い実力者は世界にも数える程とはいえいるはずだ。そう思えば、ノエル・ノアは比較的狭いグループの中で1番だと言われているだけに過ぎず、そのグループに俺が入っていることもない。
勝てるかは知らん。相手を生で見てみない限りその判断はつかない。それでも、負けは無いと断言出来た。
俺の答えに満足いったのか、少しだけ口角をあげた冴は「そうか」と

漏らしタクシーへと乗り込む。
「じゃあな」
口角上がったままに、こちらに軽く手を振りタクシーが出ていく。
方面一緒なら俺も乗せろよ、なんて言い出せる空気じゃなかったために空気を読んで俺はすぐ後ろにあった駅へと歩いていった。

◇◇◇

空港に着き、マネージャーと合流。まだ少し時間があるためにエントランスに置かれてあるソファに深く腰掛ける。
別にカフェに行っても良かったが今はそういう気分ではなかった。
ふぅ、と一息。どこを見るでもなく、斜め上をぼーっと眺めリラックスの状態を保つ。今の時間飛行機利用の客は少ないのかあまり人は見られず、自分の姿を見つけて騒ぐ厄介な連中が居ないことに肩が軽くなる。
脳裏に過ぎるのはやはり青い監獄との試合。
前半戦の日本代表側への落胆と、それ以上に期待を抱かせた潔　世一のプレー。それでも、後半に悠が投入されれば試合が成立することは無いと思っていた。
事実、悠を止められたヤツはやはり居なかった。ハナから期待してない、と言うより今のアイツらでは不可能という事実。世界的に見ても悠を止められる存在はいるのか怪しい。故にあの試合は悠がボールを持った瞬間、全ての生殺与奪権は悠に一任されていた。
悠は己のゴールこそ全てというエゴイストでは無い。故に生じる隙。それを偶然の積み重なりで掠めとって行った結果が同点という形に納まった。
そこまでは、まあ予想通りではあった。これくらいはやってくれないと困るとまで思っていた。白いモコモコ頭も、光るところはあったが想像を上回ることは無かった。
他の奴らもそう。凛はあの癖を越えてスタートラインに立ってはいたが結局後半に得点はなかった。潔　世一もまだ眼の使い方にな

れてないのか体が出来上がってないのか、スタミナが少なすぎる。
片鱗を見せる奴らはいたが、それ止まり。悠はおろか、俺の驚異になる存在すら現れない。やはり日本はダメだと思った。接戦に見えたのは悠の気紛れ。そして俺が悠のゴールに拘っていたからに過ぎない。
けれど、違った。青い監獄の中でも、満身創痍と言えるほどに弱々しい光。風前の灯と言っても誇張にはならないほどに、手で仰ぐだけで消えてしまうのではないかという小さな存在。しかし、内包する熱量は他と一線を画していた。本能が警鐘を鳴らしていた。今のあいつ……潔　世一は、魅せてくれるのでは無いか、と。
それは、警戒。そして期待。俺以上に他者に期待していない悠に強烈な印象を与えられる存在が現れたのかもしれないという一方的な希望の押しつけ。
潔　世一だけではなかった。期待はしていたが、希薄で強烈な存在感を放つ潔　世一の陰に隠れてしまっていた凛が俺との１ＶＳ１を踏破した。その後に潔　世一が勝利のゴールを決めてはいたが、俺にとっては凛のプレーも印象深かった。
実力は俺の方が圧倒的に上だった。にも関わらず、あいつはあの瞬間、運や奇跡でもなく確実な勝利をたたき出していた。
油断はしていない。けれど敗北のレッテルが俺に貼られる。
歓喜した。やはり凛の潜在能力は凄まじい。このまま青い監獄で揉まれていれば、今の俺の背中に触れることは出来るかも知れない。
「はぁ……」
けれど、それではダメだ。確実な成長は見込めるだろうが、それで止まる。凛が成長するには、強烈な出会いが必要だろう。それこそ、俺が出会ったような――
「ちっ」
思い出し、思わず舌打ちを零す。嵐と大噴火、地震、津波が同時に襲いかかってきたかのような衝撃。確実な成長の要因になったものでもあり、二度と体感したくない苦行。１週間という短い期間にも関わらず覚えているのは苦のみであり、喜怒哀楽のどれも思い出すこと

は出来ない。
まさに災害、まさに劇毒。あの人に出会わなければ今の俺の実力は無いと思えるものの、決してハイリターンとは思えないハイリスクローリターンのクソゲー。
仮に。そう、仮の話だ。
もし万が一、億が一に。俺がもう一度あの人に出会ったとするのなら。俺はどう言った反応をするのだろうか。
今の実力を証明すべく立ち向かうのだろうか。それとも、なんてことのないように世間話でもするのだろうか。
あるいは……

「あっ。サエサエじゃーん!!」

俺はこの時、恐らく世界最速で男子トイレに逃げた。

電車に揺られてどんぶらこ。乗り換え続けて二時間経っちゃいました。なが。
中途半端な時間帯だったために席が空いていたのは幸いだった。あの監獄に収納されるのも突然決まったのもあり手荷物は少ない。キャリーケースを支給されたために使ってはいるがボストンバッグの方が良かったかなと思い始めていた今日この頃。
着いた駅は実家からは遠く離れた場所。というのも、収監されるなんて思っていなかったために実家の鍵なんて持っておらず、さらに今家に誰もいないことも重なって帰ることの出来ない可哀想な男子の構図が出来上がっていた。
目的地までは駅から徒歩で向かう。少し距離があり手持ち無沙汰なためにスマホを片手にＬＩＮＥを開いて軽くやり取り。片耳にワイヤレスイヤホンを装着して日本の月間ランキングＴＯＰ１００を

垂れ流しにする。
一軒家が立ち並んでいる区域を抜け、次第に比較的大きなマンションが並び立っている地域へと進んでいく。実家とは全く関係の無い場所とは言え、頻繁に訪れていたためにもはや見慣れた町並みである。
寒い風が強めに吹いていることもありマフラーを深めに巻いて風を凌ぐ。靡く前髪がたまにまつ毛に触れてなんとも言えない擽ったさを感じた。
そして辿り着いたひとつのマンション。玄関口を抜けると慣れたようにエレベーターの前に進み降りてくるのを待つ。ちょうど直前でエレベーターが上昇し始めていたのもあり思っているよりも待ち時間が長かったがあまり気にはしなかった。
上矢印が下矢印に変わり、どの階層にも止まることなく1階まで降りてくる。誰もいない室内ということでキャリーケースの音が目立つが気にせず目的の階の数字を押す。
新築なのか改装済なのか、エレベーターの揺れも音も少なく快適に進む。そして電子音により目的階に着いたことを知らされるとドアが開きゆっくりとエレベーターから出る。
エレベーターから比較的近い一室。直前に『着いた』と連絡していたからか、インターホンを鳴らす直前にドアの向こうから足音が聞こえ鍵が開かれる音と共にドアが空いていく。
瞬間、ふわりと香る甘い香り。菓子を焼いているのかバターの香りが僅かに混じり、そしてこの部屋の主である目の前の女性から香るフレグランス。
香水でも、洗剤とも表せない、女子特有の香りと言うべきか。
部屋着にしては少し着飾っているようにも見えるワンピース姿の少女は、長い髪を団子に結んでおり、俺の姿を目にした途端柔らかく頬笑みを浮かべる。
「おかえりなさい、悠くん」
１００人見れば、１００人が振り返るほどの魅惑の少女。『天使様』という嘘のような肩書きは誇張では無いと納得してしまう美貌。

「ただいま、真昼」
高校こそ離れてはいるものの、中学での出会いを機に交際を始めた少女。
椎名真昼がそこに居た。
俺の言葉に首を傾けて微笑む真昼。なんとも自然な笑み。恐らく彼女のクラスメイトが今の表情を見れば何人かはハートを撃ち抜かれるのではないかと思うその威力を見て、俺は思う。
――――違和感。
2ヶ月ぶり程の再開。にも関わらず、俺の体は謎の震えが襲っている。体の芯から、という程ではない。しかし確実に、俺の指先は痙攣を起こしている。
汗が流れる。暖房の効いた部屋に入ったからだろうか。きっとそうだ、そうに違いない。さっきから妙にフフフと笑っている真昼はいつも通りの彼女なのだろう。
考えることを放棄し、俺は部屋へと一歩踏み出し部屋に上がるために靴を脱ぐ。すると背後からカチャリという音が聞こえ振り返るといつの間にか俺の背後に回っていた真昼がドアの鍵を閉めていた。
いやはやっ。
「どうした……ん、ですか」
真昼の纏う怪しげな気配に気付き、思わず敬語。その間も彼女の頬笑みは途切れることなく、不気味なまで彼女は自然であった。
喉が渇く。何かがおかしい。分からんが、怒ってらっしゃる？　俺なんかやっちゃいました???
「――私、とても興味深いお話を聞いたんですよね」
警鐘が鳴り響く。本能が死を察知する。なんてことない言葉が死の風となって肌を撫でてくる。俺はほぼ条件反射で土下座を繰り出した。
いや、待て待て。俺は何もしてないはずだ。え、記念日あった？
いやもうちょい先のはず。だよね？
「帝襟　アンリさん、でしたっけ？　とても魅力的な女性のようですね」

「ヒュッ」
おいおいおいおいおいおい、死んだわ俺。
生存本能が産声をあげる。血が脳に回されるのを感じ、思考が加速する。
「いや違うんですなんか監獄に入れられてそこのトップがすんごい腹立つやつで周りも犯罪者予備軍の男だらけでそこに愛想の良い女性いたら癒されるじゃないですかいやいや決して好きになったとかではなくてマスコット的な癒しという意味でして俺には真昼さんしか見えてないじゃないですかホントのホントにまじのまじまじで邪な意味合いは無くてですね」
「フフフ」
「ごめんなさい」
頭を強く床に叩き付ける。よし、これで水平よりもさらに下に頭を下げられたことだろう。額がとても痛い。
真昼はスリッパを履いているだろうに、静かな空間ではスリッパの足音でさえも敏感に捉えてしまう。ゆっくりと近づいてくる死の気配に震え上がる中で土下座している俺の頬に手を添えられることで全身がビクッと大きくふるえると震えが止まる。心臓も止まってないですかね？
「――――許しません」
耳元で囁かれる声は、耳から全身に駆け巡りゾワリと気持ちのいい寒気が走る。怒気は感じず、面白可笑しそうに、悪戯心を添えたような声は顔を見ずともに笑顔を浮かべているだろうことが分かる。
きっと、学校など他人がいるところでは決して浮かべることの無いような悪魔的な笑みなのだろう。
「私、とっても傷付いてしまったんです」
この時点で俺は敗北を悟る。ああ、全て計画通りだったのだろう、と。やはり、真昼にはどう頑張っても勝てる気がしない。
真昼の顔がさらに近づいてくる。俺の耳に唇が着くのではという距離まで近づき、熱い吐息が耳を擽る。
「――責任、取ってもらいますからね？」

頬に添えられた手にとは逆の手が反対側の頬に添えられ、ゆっくりと上へと持ち上げられる。床一面真っ暗の視界が光が刺し、遂には真昼の顔の前まで持ち上げられた。
――ああ、やはりというか。彼女のこんな顔は俺以外には見せることは出来ない。
これはもはや凶器、あるいは兵器。
男性特攻でも着いているのか、こんなにも魅惑的でトロンと蕩けるような表情を見て誰が耐えられるというのか。
俺の瞳を射抜いて離さない彼女の瞳を見て、俺に残された手段はなかった。
今日一日は、確実に真昼の言う『責任』とやらを取らされるのだろう。
彼女を天使様なんて言い出したやつに俺は心の底から物申したい。
真昼は天使様なんかじゃない……人をダメにしてしまう、小悪魔である、と。

◇◇◇◇

「なん、なんだ、お前……っ!!」
地面にたまる小さな水溜まりは全て彼……糸師　凛が生み出したもの。流れる汗は滝を越える。残された体力は僅か。体を動かし始めて１０分経たずにこの様である。
「君、サエサエの弟でしょ～？　試合見てたよ、やるじゃん！　サエサエから一本とってた」

膝に手を付き胸を上下に揺らす凛の前で、余裕の表情でケラケラと笑う女性はスポーツウェアのような動きやすい服装では無くデニムパンツにブーツ。この服装で、凛を圧倒して見せた。
見知らぬ人物に声を掛けられ、突如始まった蹂躙劇に流石の凛も相手が女性とはいえ睨みつける。
既視感。この理不尽なまでの強さ。何より、顔付きにどこか既視感を覚えた。
「弟が世話になったでしょ？　あいつどんな感じだった？」
ああ、自己紹介がまだだったか。と大袈裟なジェスチャー付きで思い出したかのように言う女性は胸を張ってムフフん！　と言う勢いで腰に手を置き凛を上から見下ろす。
「君にはシンパシー感じたんだよ～。私と名前一緒だもん～！」
大胆不敵。神が創り出した異物であり世界のバグ。
理不尽の象徴。才能の権化。水野悠の自尊心を破壊し、糸師　冴にトラウマを植え付けた歩く災害。
「水野　凛――ああ、」
――――憶えなくていいよ。